

山 塚



VOL. **2**
サンミヤク

目次

◆◆◆山脈VOL02・目次◆◆◆

・ 山脈対談 ◆ 大友宗麟

・ 新脈文芸賞発表

- 新脈文芸賞受賞作品選評

- 『おひさまのにおい』 遠藤玄三

- 『みーな・かぶりっちお』 鳩ヶ谷沙織

- 『完全に透明な靴』 蜂殴打硝子ノ介

- 『メール攻略法』 小林アンドレア

・ わくわく・おにぎり堂 ◆ 鬼霧子

・ 【HASAMlgroup】が世界と君の腹を切り開く ◆ ・ うつぶせオナニーのススメ ◆ 小倉真子蜂殴打鉄ノ介

・ アリアンロッドシナリオ「湖の頂の迷宮」◆ サンベエ

・ ラブプラス考 ―なぜ人はラブプラスを怖がるのか― ◆ 稗田タカシ

・ 読者参加ゲーム企画『1999』

山脈



キャリアコーディネーター

阿武貝良子

×

レイブル

平田和磨

FPS 世界チャンピオン

レオン・リー

×

軍事評論家

岡本ぎさく

評論家

新田片矢

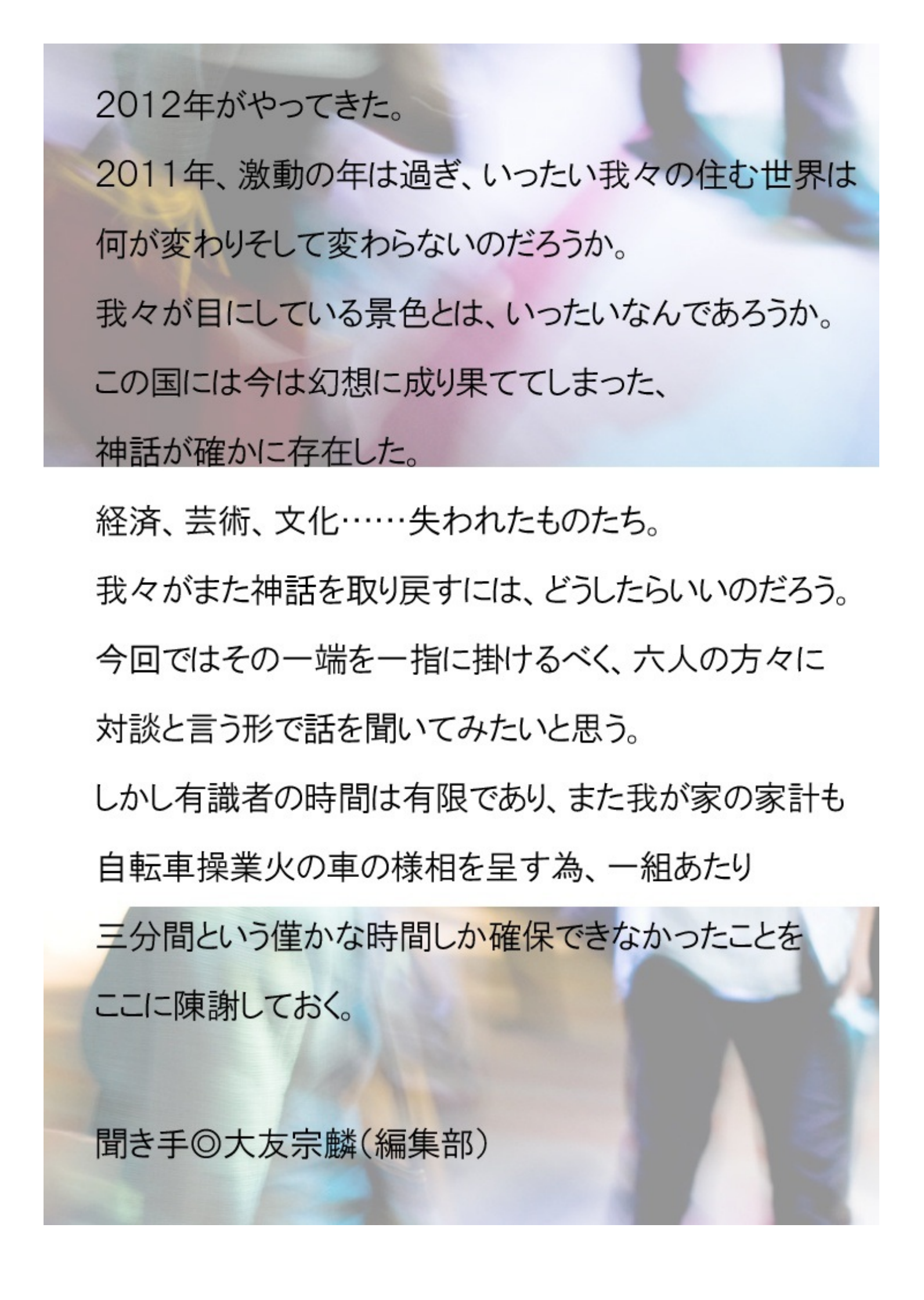
×

作家

藤真木純

対談





2012年がやってきた。

2011年、激動の年は過ぎ、いったい我々の住む世界は
何が変わりそして変わらないのだろうか。

我々が目にしている景色とは、いったいなんであろうか。

この国には今は幻想に成り果ててしまった、

神話が確かに存在した。

経済、芸術、文化……失われたものたち。

我々がまた神話を取り戻すには、どうしたらいいのだろう。

今回ではその一端を一指に掛けるべく、六人の方々に
対談と言う形で話を聞いてみたいと思う。

しかし有識者の時間は有限であり、また我が家の家計も

自転車操業火の車の様相を呈す為、一組あたり

三分間という僅かな時間しか確保できなかったことを
ここに陳謝しておく。

聞き手◎大友宗麟(編集部)

——未曾有の震災に見舞われた日本。幾多の政治不信や国際情勢の混迷を受け、新卒就職率が戦後二番目の低さを記録した2011年が過ぎ、今後の就職活動に果たして活路はあるのか。

阿武員 依然、厳しい状況が続くと思われれます。というのも、経済の不景気のトンネルに終わりは未だ見出せず、企業の採用志向は右肩下がりで。

——学生側として、今感じること、企業に求めることは。

平田 私はかつて、一週間で多いときには四回ほど就職セミナーに足を運んでいました。そこで見るものはみな同じで、中身の無い説明会を転々とする右へならえの民族大移動。それは最早亡羊のそれで、仕事を求めている姿ではない。つまり、就職活動が学生の就業意識の低下を招いている。

阿武員 それはどうでしょう。私がブレースメントを手がけた中では、内定を数社から受けた学生も少なくありません。企業は人間を見えていますよ。

平田 それは、私に能力と価値が無かったと？

阿武員 少し、私のニュアンスと異なりませう。要は平田さんのスキルが企業のバリエーションと合わなかった。つまりアダプトしていなかった。

——平田さんの努力が足りなかった。

阿武員 努力では無く機会。平田さんは現在何かされているんですか？

平田 少し前まではアルバイトをしていましたが、今は無職です。

——手元の資料によると、作家になるため研鑽中と言うことですが。

平田 まあ、そうですね。小説を書いています。

——どのようなものですか。

平田 今回の内容とは関係ありません。

阿武員 そうですね。興味ありません。

平田 (阿武員を睨みつけ、手元のコーヒーを一息にあおる)

キャリアコーディネーター ABUKA RYOKO

●阿武員 良子

三十一歳

コロンビア大学在学中にMBA資格取得。

セミナーを中心に若者に就職とは何かを問いかける。著書多数。

レイフル HIRATA KAZUMA

※レイフル……無職に変わるポジティブなイメージの言葉として生まれた二トトがネガティブであるとして生まれた言葉。

○平田 和磨

二十九歳

T大学在学中「就職活動離反の会」設立、代表に就任。現在は勇退、充電中。家に閉じこもり五年目。

——過去からタイムスリップしてきた政治や宗教の女王と君臨していた三人の女性が、現代でアイドルグループを結成すると言う……

平田 関係ありませんから！

阿武員 お聞きしたいことがあったんですが、この「就職活動離反の会」というのは何なんですか？

平田 墮落した日本を立て直そうと集った若き士の活動の場です。主に街頭でのデモ活動を行いました。

阿武員 それ、企業面接で自慢げに話したでしょう。

平田 ……………

——手元の資料によると、3社の面接にて演説を打って、3通の「あなたのご活躍をお祈りしております」メールが届いたとか。

阿武員 ちょっと歌舞いた真似をすれば受けると思っただけですか？

まあ、それは否定しません。個性は企業の重んじるところではありません。しかし、あなたのは、ちよつとねえ……

平田 ……あなたがたはあれだ。これから飛び立ち行く雛鳥を巣から放り出して野犬に襲わせるようなマッチポンプが好きなんだのサティストだ！許さないぞ、僕にはツイッターのフォロワーが1500人も居るんだ！1500人の糾弾があんたを襲うんだ！謝るなら今のうちだぞ！

阿武員 私のフォロワー数は54万です。

——対談も盛り上がりを見せてきましたが、平田さんの床を踏み鳴らして夕食を得る仕事が始まりますので、ここで終了とさせていただきます。お二方、本日はありがとうございました。

阿武員 ありがとうございます。

平田 ありがとうございます。

——今回では少し趣向を変え、ゲームと軍事の関係を対談を通し知りた
と思う。その筋では名を知らないものは居ない、昨年の世界FPSチャン
ピオンのレオン・リー氏にお越しいただいた。よろしくお願ひします。

通訳 ……………。(レオンに耳打ちする)

レオン (よろしく)

——対するは、国際情勢にも精通する、軍事評論の第一人者。メディアへ
の露出も多く近著「国は守られるか」は五万部を売り上げました。岡本
さく氏です。本日はよろしくお願ひします。

岡本 よろしくお願ひします。

——浅薄な進行役で申し訳ありませんがまずFPSとは何かを教えてください。
さい。

通訳 ……………。(レオンに耳打ちする)

レオン (何ですか？ ちょっと聞こえませんでした)

通訳 何？

——FPSとはどういうものか。

通訳 ……………。(レオンに身振りを加えながら説明する)

レオン (ゲーム)

通訳 ゲーム

——真に無知ではありません、どんなゲームなのか、そのところを詳しく
教えてくださいませんか。

通訳 いや、ゲームだって言ってるでしょ。

——あなたに聞いているではありません。

通訳 ……………。(タバコに火を点けつつレオンに話しかける)

レオン (言ってもいいがタバコを消してくれ。喘息なんだ)

FPS世界チャンピオン LEON LEE

●レオン・リー 二十四歳 米カリフォルニア出身。24時間何時でもオンライン上に存在する事からA-との疑惑も持たれた。

軍事評論家 OKAMOTO GISAKU

○岡本さく 三十九歳。銃番への憧れから十八歳で渡米、以降世界を飛び回り、各国の国防を研究する。軍隊経験あり。

通訳 土下座しろジャップと言ってます

——そんなもの後でいくらでもやりますので、FPSとは何なのか教えて
ください。

通訳 ……………。(鼻をほじる)

——通訳の方、レオンさんにお伝えください。

通訳 (チツ)……………。

レオン (そうだね。FPSとは、一人称のシューティングゲームの事だ。
プレイヤーは自らの視点でゲームの中を自由に移動することが出来る、リア
ルなシューティングゲームを体感することが出来る。特筆すべきは通信によるリ
アルタイムでの戦闘だ。プレイヤーは自らのクランの下集った仲間たちと
通信を交わしながら相手方の殲滅を目指す。非常にクールな判断力が必要
で、世間で言われるようなヴァイオレンスな側面よりもむしろインテリ

ジエンスが必要とされる知的でコミュニケーションを鍛えるのに打て付け
のゲームだ。俺はその誤ったイメージを払拭したいんだ)

通訳 自らの視点で逃げ惑う人のケツを追い回し、愚かにも隙を見せた瞬
間仲間たちとケツをブチ抜くゲームだそうです。ケツとケツの取り合い。
正にそれは対ケツなのだ、と言ってます。

——なるほど、いかに相手のケツを突くか、そのせめぎ合いのゲームなの
ですね。肛門がキュツツと窄まるのを感じました。FPSが何か分かった
ところで……はい、早いもので時間が来てしまいました。本日はありがと
うございました。

レオン サンクス

通訳 本日は真にありがとうございました。

岡本 こちらこそありがとうございました。

——山脈対談、いよいよ最後の一組になってしまいました。まずご紹介するのは評論家、新田片矢氏です。作品よりむしろ氏の評論を読みたいがために購入した、そんな声さえ聞かれる名伯楽です。

新田 いや、始まる前から荷が勝ちすぎる……ともあれ、よろしくお願ひします。

——そして相対すは、この国で一番の荣誉ある新人賞を受賞後、確かなクオリティの作品を生み続ける、人呼んで名作メーカー。最新作「戻る血痕」は発表前から映画制作会社のオファーが殺到していると言います。作家、藤真木純氏……

藤真木

新田 ……………藤真木先生？

——死んでますね。

新田 な、何ですって！

——動かないで下さい。スタッフの方、この部屋から誰も出さないように。

新田 き、君。早く警察に……

——新田先生にお伺いします。

新田 この期に及んで質問等、そんな悠長なことをしている場合ですか！

——あなたは、誰ですか。

新田 …………… 私は評論家の新田片矢です。それ以外の何者でもない。

——何故、警察なのですか？ 私は医者でもなんでもない。私が死んだ、と言っても何の医学的根拠が無い。あなたは知っていたんです。藤真木先生が死んでいたことを。

新田 ……気が動転していたんです。それはそうでしょう、人が倒れていてピクリとも動かない上、集いのホスト役が死んでいると言った。私にはそれを信じるしかなかった。疑いを持つ空気ではありませんでしたよ。

評論家 NITTA KATAYA

●新田片矢

三十九歳。斬った小説は200を越える。翻訳者としても活躍、5ヶ国語を操る希代のバイリンガルである。

作家 FUJIMAKI JUN

○藤真木純

三十三歳。若干十七歳で文壇デビュー。生々しい性的描写は世間に衝撃をもたらしたが、藤真木以降と言言葉を生む。

——始めの質問に戻りましょう。あなたは、新田片矢では無い。

新田 だったら誰だと言うんです！

——色々バックボーンやらもつたいぶつた口上を打ちたかつたのですが、何しろ猶予は三分しかありません。残された時間は一分二十秒。あなたは……藤真木。そう、藤真木さんですね。そして、あなたが殺したんです。地面に臥した女性、本物の新田先生をね。

新田（以後、藤真木） ……そこまでお見通しか。

——殺害方法は毒、ですか。あなたは我々に顔を知られていない秘密主義の評論家、新田片矢を名乗った。我々は騙されましたが、本物の新田先生は自分の名を名乗る何者かが既にこの場に現れていること、そしてそれがあなただと言うことをすぐに知ったでしょう。しかし、新田先生はそれに乗ったのです。なぜか？ それは……

藤真木 もういいです。その調子なら動機もご存知でしょう？

——ええおおよそは。辛口の新田先生に寵愛された藤真木先生だ、恐らくは次回作もとても評価されたのでしょう……しかし、それが許せなかつた。藤真木 ……。

——今後の、被害者遺族、旦那様と子息への謝罪と慰謝は。

藤真木 ……あなたもいじわるだ。そんなものやる気も、……そして必要も無い！（手元のコーヒーを煽る）

——無駄です。中身は摩り替えておきました。今頃一人のニートが病院へ運ばれている頃でしょう。

藤真木 ……なんだかよく分かりませんが、全て掌の上だったと言ふことですか。あなたのその、右手の上で踊っていたのですね私は……。

——この次は、ドキュメンタリー小説を楽しみにしております。今回のゲスト、殺人者藤真木婦人でした。本日はありがとうございました。

この対談はフィクションです。作品中の個人、団体は実在のものとは何ら関係ありません。

■気軽に気持ちいい？「うつぶせオナニー」の方法

うつぶせオナニーとは手や道具を使って性器に一切触れないオナニーです。もちろんきちんとイけます。早い時は1分くらいで。

方法はまず布団にうつぶせで寝ます。手は顔の前に伏せるようにします。イク瞬間にちょっと力めるように枕を抱えてると良いでしょう。顔は苦しくないように横向き、もしくは額だけ枕に乗せて下向きにします。ポイントは脚です。脚は性器に直接刺激を与えるので、しっかりと交差させます。服は着用します。下着の摩擦なども刺激につながる所以基本的に服は着ています。脚の間には何も挟みません。クッションを挟む方法等もあるようですが、それとは違います。身体ひとつでできます。

準備が出来たら交差した脚で性器を圧迫させます。継続的に圧迫するのではなくて、力んだり緩めたりを繰り返します。そうしているうちに性器全体にとくにと波打つ感覚が起きてきます。ここまで来ると息も少しあがり、全身が熱くなります。後は一気に脚で圧迫させる時間を長くする。そしていつの間にかイってしまうのです。短時間で絶頂に達するせいか、終わると結構ぐったりします。じんわり汗ばむことも。オナニーを始める前の性欲は消え、すっきりします。

女の子同士の話にオナニーの話は殆ど出てきません。

全国的なオナニーの経験の男女別のデータを調べてみると、1999年の調査において、男子大学生の94.2%が経験していることに対し、女子大生はその半数以下の40.1%という数字が出ています。

(財団法人日本性教育協会「第5回・青少年の性行動全国調査報告」より引用)

男性にオナニーが必要なのは理解できます。しかしなぜオナニーをする女の子は少ないのでしょうか。性生活に満足していて、本当にオナニーが必要ないからなのか、オナニーをしている自分が恥ずかしいからなのかわかりません。確かにオナニーをすることによって寂しさや虚しさを感じることもあるかもしれません。恋する乙女たちはオナニーに対してどんな考えを抱いているのか気になります。

私はオナニーをします。でも、みんなとはちょっと方法が違います。一般的な女性のオナニーは指、もしくは玩具で陰核や膣を刺激するという方法が多いと思います。

わたしは指も玩具も使いません。

■「うつぶせオナニー」との出会い

うつぶせオナニーとの出会いは私が小学校1年生の頃でした。最初のあの感覚は忘れもしません。私の小学校の体育館には、登って遊ぶ為のロープがぶら下がっています。でも学校の友達みんなはこのロープの末端の結び目に脚を挟んで座り、ターザンのようにして遊んでいました。直径8cm

くらいの太い麻のロープだったと思います。低学年の子供の体型だとこのロープの結び目に座ることは簡単でした。

ある日の放課後、ちょっとおしっこに行きたいのを我慢していつものようにこのロープで遊んでいました。するとお股のあたりが気持ちよくなってしまって、顔が火照り、トイレに行くことを忘れるくらい夢中でロープに脚を絡ませていました。おしっこに行きたいときにお股をきゅっとさせるとすごく気持ちがいいことに気がついてしまったのです。

よく聞く「机の角でオナニー」とは少し違って、私はいつの間にか脚を交差させることで快感を得るオナニーの方法を習得していました。こっそりと父が隠している「秘密の雑誌」を観ながら「秘密の妄想」を膨らませては、子供用二段ベッドでその快感に夢中になっていたのです。小学4年生くらいになると、こんなことをしている自分は病気なんじゃないかと本気で不安になったこともありました。二段ベッドなので下で寝ている兄にベッドが軋む音でバレたこともありました。弱みを握られて兄の言うことを聞くようになったのは言うまでもないです。

そんなうつぶせオナニーなのですが、私の中では生活の一部みたいなものになってしまっています。一般的なオナニーって性器に直接触れて行うから淫らなイメージがある。でもうつぶせオナニーの場合、客観的に観るとかなり「滑稽」なのです。布団の上で芋虫みたいにうずうずしているのですから。なので今ではあまりうつぶせオナニーをしている自分に対しての羞恥心はないのかもしれない。うつぶせオナニーは気軽に気持ちいい。

■「うつぶせオナニー」の長所

膣への刺激が直接ほしい場合は指や玩具を使ってのオナニーをすることがありますが、私はあまり好きじゃありません。確実にイクことができないから。「うつぶせオナニー」と「指などを使ってのオナニー」の頻度を割合で表すと9:1くらいだと思います。

うつぶせオナニーには良いところが沢山ありますのでいくつか紹介します。

・準備がいらぬ。

→うつぶせで寝れる場所があればすぐに始められます。

・短時間で確実にイケる。

→邪魔が入らない限りきちんとイケます。

・バレない。

→服を脱がないので、たとえ隣に旦那が寝てたとしてもこっそりできます。

・膣のしまりが良くなる。

→幼少期からうつオナを始めている私ですが、一緒にいいことをした男性に「よくしまるね」と言われます。「つま先立ちをして肛門をしめる」という膣圧トレーニングというものがあるようですが、うつぶせオナニーもこれと近い動きをしていると思います。同時に脚を細くさせる効果も期待出来るのではないかと個人的に思います。

短所をあえて挙げるとすると、「トイレで出来ない」ということでしょうか。

一度トイレの個室で立った状態で出来るか試したことがありますが、いくらすぐにイケそうなくらいに高まっても、立った状態だと頭に血が昇ってしまいクラクラしてしまいます。あと、おかずになるネタがないと少し難しいです。直接性器に触れるオナニーの場合は、その気じゃなくても次第に気持ち良くなってゆきますが、うつぶせオナニーの場合はなにかネタがないとイクまで時間がかかってしまいます。そして尚更欲求不満になります。

5年くらい前に自分と同じ方法でオナニーをしている人はいるのかと思いネットであれこれ調べましたが、なかなか見付かりませんでした。でも今では「うつぶせオナニー」で検索をすると自分と同じ「うつぶせオナニスト」が存在することが分かりました。うつぶせオナニーが世に広まるのも時間の問題かもしれません。

ここまでつたない文章にお付き合い頂いて、ありがとうございます。

「まあ！これなら気軽に気持ちよくなれるのね！」と思った淑女がおりましたら、是非一度お試しになってはいかがでしょうか。貴女が素敵なオナニーライフを送れることをお祈り致します。

第一回

新脈

文芸賞決定発表

完全に透明な靴 / 蜂殴打短編ノ介

おひさまのにおい / 遠藤玄三

みーな・かぶりっちお / 鳩ヶ谷沙織

メール攻略法 / 小林アンドレア

▼山脈編集部選評 ネタバレを含むので作品から読みたい方はご注意ください▼

前号にて新派文芸賞を発表し、多くの反響と賛同の声をいただいたので、企画として成功したことは確信していたが、実際のところ一体どれくらいの人が応募してくれるのかということに関しては半信半疑だった。1つもこなかった場合はどうしたものだろうと心配していたが、杞憂に終わったようだ。

ここに選ばれた4作品はどれも瑞々しい新しい才能にあふれ、新派文芸賞の名に相応しい作品である。

「おひさまのにおい」

メールに「佳作狙い」という言葉に添えられていたが、その言葉通りにコンパクトにまとまっている作品。

安定感のある文章から小説に書き慣れていることが伺える。

おそらく、簡単にかける題材を選んで、簡単に書いた、ということだろうが、この簡単なものを簡単に書く技術を賞賛したい。

嗅覚を刺激する文章。タイトルと、序盤の展開から想像するラストとのギャップが印象的な作品だった。

「みーな・かぶりっちお」

目的や手段、効率といったものをまったく省みないほほえましい勧善懲悪の構図に、古き良きアニメーションを垣間見る。

特にゆうきまさみの「アッセンブル・インサート」に近い雰囲気があるのではないのだろうか。少女の喪失や、変貌を扱いながらも、とてもにぎやかな作品に仕上がってる違和感が他の読書では味わえない特色になっていて良い。

「メール攻略法」

本作品のメインであるコミカルなメールやりとりは、芥川賞作家である北杜夫の「さびしい王様」の電報を思い出させる。

読者をおもしろがらせようという徹底したサービス精神と、一朝一夕では生み出せない独自の文体が確固たる作家性を生み出している。

多くの文学の主題となっている骨太テーマである「恋愛」を、ルールやら作法をお構いなしの表現力を優先した記号を多用したドライブ感の強い癖のある文体にのせたその様は「これぞ文学」というべきか、「これぞロック」というべきか。荒削りだからこそ光るものを感じる作品だった。

。

「完全に透明な靴」

今回、特に目を引いたのがこの作品だ。

応募作品の中でもっとも「完結した」作品であり、完結しているのにもかかわらず、読了後の広がりをもっともある作品でもあった。

物語自体が多重構造であり、ミステリーのような引きを見せつけ、それだけでは飽きたらないうでもいかのように実験的なシークエンス構成がなされていて物語のスリルを引き立てている。こうしたことは世界観を作り上げて確固たる方向性をもっていないとできないことであり、はっきりとした目的を感じさせる小説である。

作品の中に流れる情景もすばらしく、この短さの中にも、甘く蒸し暑い匂い立つような夏の世界と、病室のように管理された自由の利かない世界。そして、そのふたつが絡み合った異様な世界を作ること成功している。

もし、自分がこの世界に入り込んでしまったらと想像してしまう。この物語は甘い夢のようであり、覚めることのない悪夢だ。夢だと知って、この世界に入り込みたいとは思わないだろう。しかし、もし取り込まれてしまったら？ 不意に序文に書かれた「それは王子様に責任を被せるため」という文章を思い出す。どうだ。取り込まれることに期待してる自分がいやしないだろうか、読み終わった後、そんな自問をせずにはいられない作品だった。

以上。

小説作成には技法、文体、キャラクターの個性といった色々なツールがあるが、新派文芸賞もそのツールの中の1つだと思っている。第一回に続いて、第二回も有効に使ってもらえればありがたい。

第一回新派文芸賞は、応募作品のどれもが新奇に満ち、まるで深き地層から汲み上げられた、清冽な水の澎湃と湧く様、新派を感じさせてくれた。

『完全に透明な靴』が初めに手元に届く。初段を三呼吸で読んだ後、わたしは一息大きく吐いて、じっとり暑い真夏のワンルームにトリップした。差し込まれるイメージの濃い断章は次第に狭窄になってゆき、物語のゆるやかさと裏腹に薄ら気味の悪さを孕む。出てくる「男」も「女」も一見青年向け小説の、ステレオタイプな受けの良い人物像である。どこからだったろう。次第に物語は変容を遂げ、生温いスーヴニールは冷たいSFへと姿を変える。甘いお伽話を期待した彼ら登場人物に、読むものは次第に違和感を覚えはじめる。陶然と身を任せ、背筋で鬱蒼と空気を感じる良作品だ。

次に『おひさまのにおい』を読んだ。紙に印刷するとA4にして3枚。しかし、読了にまで経た時は、前述の「完全に透明な靴」よりも僅かに長かった。一字一句逃すまいと、そうさせる作者の筆致が、わたしの嗜好に合致したのだろう。ワンセンテンスのテンポと、言葉の選択がうまい。特に、「ただ、すれ違いざまにその男から漂う芳香が私を振り向かせたのである。」この一文が、「私」のみならず、わたし、を振り向かせたのである。絵本のような読み味である、台詞と台詞の間に、見事なまでに絵が浮かぶ。わたしが知っている町並みで、わたしが知っている人達が、「私」に対し話し掛け、「おひさまのにおい」を嗅ぎ、引っ越しを決意させる。読み終わったときには、自分はいつ引っ越そうかと戦きながら考えていた。極めてリアルな物語である。

メ切り当日に滑り込んできた伏兵は『メール攻略法』。まずこの小説が、「一体女子大生とはどういう生物か？」という疑問に終止符を打つものだと言うことを明記しておきたい。この物語は不条理である。冒頭、0からまたたき100マイルに達する人間離れした加速度に、付いて行ける人間はかなり稀だろう。展開はまばたき毎に移り変わり、僕らは時に創作上で思考の迷子……いや旅人になる。だが、小林アンドレアという名の一人のJDは、確かにこのチキウ上に存在するのである。認めるしかない、これこそがリアルというものなのだ。この物語に出会えた事を、わたしは幸いに思う。もはや宇宙人よりも遠い存在を、まやかしの媒体でもって確かに手と手を取り合える距離感で感じることができたのだから。しかもその手は恋を教えてくれたのだ！最後に。仕事中爆笑したぞ、どうしてくれる。

『みーな・かぶりっちお』わたしがあえて今回の作品から一番を選ぶとしたら、「みーな」だ。かわいい女の子がたくさん出てきて、とても嬉しいのだ。話自体はありがちな、世界征服を目論む悪の組織と、孤高の天才科学者が作り上げた、正義のサイボーグとの対立の図式なのだが、実を言えば悪は悪いことを何一つしていないし、正義は良いことを何一つしていない。日本のヒーローモノの根底に根付くビルドゥングスではない、起承転結の起、スタンディングロマンとでも呼

ばわる新たなジャンルを見出だした作品、それが「みーな」なのである。文章は軽快で、常に読者を楽しませることを忘れない、エンターテイナーとマッドサイエンティストの鑑。そこにSFの産物サイボーグと、メイドインジャパンのザ・工業製品軽自動車の対比とあっては、それはもうたまらなく男のコが疼くのである。最後には立ち上がり、頑張れ高橋！と叫ぶこと間違いのないのである。まだあなたがこの物語の頁をめくる前ならば、是非覚えておいてほしい一文がある。「宇崎みーな十七歳。彼女もまた謎多き少女だった」この大作は、これよりプロローグを終え、歩きはじめるのだ……。……しかし、日々うたぐってはいたが、やはり「埼玉」はファンタジー世界の別称であったか……。

以上、第一回新派文芸賞の選評を書いた。一読者として楽しく読ませていただいた。作者の方々にはお礼と、その苦勞を労りたい。物語を書くことは楽しいばかりでは無いことを、かつて作家を志した同志として理解しているつもりだ。決してゆとりがあったとは言えない期間の中で、見事な作品を仕上げた皆さんにはただただ頭が下がるばかりだ。

次回もわたしの頭が下がりつづけること願うのは、なにも、自分だけではないだろう。

今回ご応募頂いた皆様、どうもありがとうございます。そして、お疲れ様です。
第一回新派文芸賞は、4作品全てジャンルがバラバラで、色の違うお皿に盛られたおいしいごちそうを戴くような気持ちで、楽しく読ませて頂きました。

『みーな・かぶりっちお』

「ベタ」ってこんなにもわくわくさせてくれるしおもしろいんだな、と気づかされた作品です。誤解をしないでもらいたいのですが、ここで言う「ベタ」は最上級の誉め言葉であり、『みーな・かぶりっちお』は「名作ベタ」です。

誰かを一番目立たせるのではなく、バランス良くそれぞれのキャラクターの見せ場が用意されていて、登場人物一人ひとりに持ち味があり、一人ひとりを好きになりました。特に最終兵器木霊ちゃんはいつもおいしいところを持っていきます。(勝手に命名してしまいました)

ちよくちよく入る語りの独り言みたいなツッコミにも楽しめました。楽しめるネタ満載です。ちょっと元気がない時におすすめしたい作品ナンバーワンです。

『完全に透明な靴』

読めば読むほど新たな発見があるような気がして、何度も何度も読ませて頂いた作品です。黒髪ショートヘアの妹で、正体は宇宙人という設定に惹かれ、そして「子供を作りませんか？」という極めつけの台詞で不純な妄想に火が付き、序盤は少々変な気持ちになりながら読んでいました。(作者の方、申し訳ありません)「正体不明の何か(特にSF系の作品)」には、おそらく男女関係なく計り知れない色気があります。

読後はカッコいい！という言葉が頭の中で飛び交いました。端的でグッとくる台詞が多く、シンデレラのくだりにある「永遠にこれは続いていく」から「私たちが飽きるまで」の悪魔性は胸を打たれました。緻密に組み立てられたストーリーからキャラクターの切れ味の鋭い言葉選び、センスを感じます。

『メール攻略法』

ストーリーで読ませてしまう「小説」が多い中、この手の作品は珍しかったですし、目立ちました。何も考えずに読めてしまうというお手軽さがありますが、作品の中に意味を持たせていないということが読者に明確に伝わります。かなり癖のある作品なので、見応えのあるストーリーを作れるかどうかという点を克服すれば、もう少し大衆的になるのかもしれない。

『おひさまのにおい』

お話はあっという間に終わるのに、あっという間に終わったとは思えない読み切った感じがしたのがすごいなと思いました。文章に全く無駄がなく、充実しています。

「おひさまのにおい」というほのぼのとしたタイトルとは真逆のストーリーで、この裏切られた

感じににやにやです。おひさまは実体がない『におい』だと思いきや「こっちにいます」と、まるで何かの生き物であるかのように表現されており、一層不気味さが掻き立てられています。夏の白昼に見る幻のようであるのに幻では終わらず、日常に足が着いた状態で確実に侵食されていく恐怖と、トドメを刺す展開の速さは鳥肌ものです。

香水には異性を虜にしたり色々と効果が持たされていますが、老若男女全ての人を洗脳の域にまで虜にする「おひさまのにおい」は、変な使い方ですけどある意味ものすごいフェロモンだと思います。読後はいつも、自分もこの「おひさまのにおい」を嗅いでみたいな、という衝動に駆られます。嗅いでしまったら最後、戻れなくなってしまうんでしょうけど。

この短い小説の中でよくぞここまでストーリーを凝縮されました。今回の応募作品の中でも、書き慣れている感MAXの実力派の腕前をお見せ頂いて、まいりました。

今回ご応募頂いた皆様、改めて、お疲れ様でした。

小説を書くのは想像以上にうんと大変な作業ですが、書き終えた後の達成感と解放感は何にも代え難い気持ちよさがあると思います。「表現」ということはどんなジャンルのものでも素晴らしいです。それを誰かに見てもらう喜びを、色々な方に感じて頂ければいいな、と思っています。

次回の新派文芸賞にも期待しております。

新脈文芸大賞は今回が第一回ということもあり、どの程度作品が集まるか危ぶまれていたが応募総数4作品と多くの応募を頂いた。まずはそれについて応募者の皆様に厚くお礼を申し上げたい。また送られてきた作品もそれぞれテイストの違うものであり、とても楽しく拝読させて頂いたことも合わせて記載しておく。

『おひさまのにおい』だが、タイトルに似合わずかなり骨太のホラー作品であった。例えるならクトゥルフ系の印象を持つホラーではあるのだが、そこに描かれた恐怖は本文中の描写からあるように人間の肉体と近いものによるものであり、それは理不尽でありながらも「そういうものかもしれない」と思わせるだけの説得力を持ち合わせている。それと合わせて小中理論に沿った怪奇の描写・展開もあり、ホラーとして基礎をしっかりと押さえている腰の強さを感じた。また会話等から推測できる限り「おひさま」の影響は女性よりも男性に強く作用しており、表現された色彩なども性的なイメージを喚起させる部分が強い。恐らくこの「おひさま」というのは「お姫様（おひいさま）」からくる言葉なのであり、この作品の根底にあるのは女性への恐怖と欲望がないまぜになった感情なのであろう。読み終えた後にとりよりの家のピンクのカーテンをみて、ぎくりとさせるぐらい力を持った作品であった。

『みーな・かぶりっちお』は文章がラノベ風の文体に強く引っ張られている。しかしながらそのラノベ的背景を逆手にとることで「この人物像ならこうするであろう」という前提知識から各キャラクターのメリハリがハッキリとしており、余計な説明なく物語を駆動させることに成功しているのである。また、主人公の重さ/硬さ/強さに一貫性が無い。これはあくまでもSFではなくコメディ作品として書かれているため、その部分が欠点ではなく自由に笑いをドライブさせる「可変の要素」として機能している。そしてそれに対比するように「パロディとしての悪の組織」には常に、物理的不可解さへのツッコミがなされている。これは主人公がサイボーグにさせられてしまった理由と合わせて、「本質的に理不尽なのは正義である。」という911およびイラク戦争によって、誰もが避けて通れられなくなってしまった問題をも射程に捉えようとしているのである。最後に、こういう言い方が正しいかは解らないが今回の作品全ての中で「もっともお金が稼げる」内容になっているのも見逃せない。クオリティの問題ではなく、こういった内容を求める層は必ず一定数存在することを理解している強みは大きいと思われる。

『完全に透明な靴』ではあるが、冒頭部分の軽さをフェイクにディストピアな世界に誘う方法は悪くはないものの、いかんせん無理のある構成と言わざるを得ない。発想の部分を支える、より丁寧な描写と文章力の強化が望まれる。

最後に『メール攻略法』だが、まず冒頭部分から「ガリ勉」の前に「☆」を入られるこの文章は、この作者にしかできない強烈な才能である。それによってこの一行に満たない文章で作品の方向性をしっかりと提示できている。

また、文脈を切り替えす際のエッジが尋常ではないほど鋭い。

「恋とは無縁」と書いた直後に「彼氏ができた」といきなり裏切り、また「なれそめの説明を」と言いながらその段落の最後で「そしてなれそめはカットさせて頂くわ！てへぺろ☆」と盛大な肩透かしを食らわせ、かと思えば後半「他人によって強引になれそめを説明させられる」という構造による緩急のつけ方は物理的に狭い世界の話であるにも関わらず、全体にダイナミックさを与えており、それが「作品内世界」の広がりへと繋がっている。

故に唐突に登場し、しかも何人いるのかさえ不明な家族達がいることに疑問を抱かせない。

また最後には、この恋の終わりがあまりにも明確に迫っており、油断していた読者を唐突に切なさの真っ只中に突き落とす手腕は残酷を通り越して爽快である。

そしてもっとも恐ろしいのは、ギャグの無軌道さ、突然ねじ込まれるタテ読みとその解説、メールに不慣れである事を示唆していた演出が突然消える、送受信したメール内容の前後の文脈が繋がっていないようにも見える、無意味に大量の家族が物語に参加する。

これらの要素が、ただのノイズなのか意図的なのか、あるいは何か話の中に仕掛けを隠しているのか、疑おうと思えばどこまでも疑えるようになっている……例えば何件かのメール宛先が混在している、メールの時系列を崩している、何らかのルールにしたがって読むと別の意味が出てくる、等々の何らかの方法によって真実が隠されているようにしか思えない。

何度も何度も読み返した結果、「何も無い」ことがようやく理解できた。

しかるに、これは明らかに読者に対する挑戦でありながら「その挑戦に乗ってしまうこと」それ自体が敗北となってしまう、という「批評キラー」として恐るべき性能を誇る作品となっているのである。

以上が今回応募を頂いた全作品の感想であるが、全体的に荒削りながらも読ませる作品ばかりであり、またその傾向もホラー/SF/ラノベ/コメディとバラエティに富んでいた。

投稿作品に対して一切の制約をかけない新派文芸賞らしい、ラインナップであったように思う。また『新派』という名に相応しい、自由で活気溢れる才能を発掘できたことを大いに喜びたい。

その中でも特に作品の異常性、特異性、唯一性においては『メール攻略法』が群を抜くように思える。

いまの、ここで、この人にしか書けない作品だと「思わせる」力が非常に高い怪作であり、今回の全4作品の中では「新派文芸賞」という舞台の中でもっとも光輝いていた。

以上で第一回新脈文芸賞における選評を終わる。

なお今後も第二回第三回と新脈文芸賞は続けていく予定であり、これを読んでもる人が次回からは応募する側の……いや、才能を開花させる側の人になって頂けることを心から願う次第である。

【第二回新脈文芸賞】のお知らせ

第二回新脈文芸賞のお知らせ

第一回と銘打ったからには、当然第二回をやります！

【第二回新脈文芸賞】

公募要項

賞品：なし

締切：8月15日

発表：9月発刊予定の『山脈Vol.4』にて

- 1.応募原稿は完結しているものに限る
- 2.文字数制限はとくになし。
- 3.ジャンル制限もなし
- 4.タイトルとペンネームを記載してtxt形式で送ること。

送り先：jii_syuppan@mail.goo.ne.jp まで

メールのタイトルは「新脈文芸賞応募作品」をお願いします。

作品を受けとり次第、確認として3日以内に返信します。

返信がない場合はお手数ですが、もう一度メールしてみてください。

また『山脈Vol.3』に投稿頂いた小説でも、作者様のご希望があればそのまま『第二回新脈文芸賞』へのエントリー作品として登録をして頂けます。

『第一回新脈文芸賞』の募集でも宣言させて頂いた通り、応募作品には全て【新脈文芸賞】を授与させて頂きました。

もちろん第二回も同様に「応募作品には無条件で【新脈文芸賞】を授与」致します。

投稿した小説を個人的に発表するのも自由！しかもその時に【新脈文芸賞受賞作品！】とハッターを効かすことも可能！

そう、あなたが「電子出版の雑誌に小説を投稿して賞をもらった」という行動においては、なに

一つ嘘はないのです！

また少々真面目な話をするのなら今回と同様に、投稿頂いた作品に対しては編集部一同が責任を持って「本気で可能な限り良い部分を読み取る」選評を書きます。

一般的な投稿や個人レベルで公開した場合、ここまで読み込んでリアクションが貰えることは多くないと思います。

自分が書いた作品の武器となる部分を知る良い機会だと思って投稿いただければ、大変嬉しく思います。

ということで、山脈は君の作品を待っている！

新派文芸賞受賞作品①

『おひさまのにおい』

遠藤 玄三（語感研究家）

梅雨前線が気を緩めたのか、連日続く雨の切れ間。

それでもどこかじめっとした空気の中を、私は単四電池とスナックの入ったスーパーの袋を提げて下宿へと歩いていた。

三月に工事を終えたばかりのアスファルトとの継ぎ目にできた水溜りをひょいと越えたとき、私はその男とすれ違ったのだ。

男はどうか形容することも無い見た目で、強いて言うなら湿気を吸ってふくらみ乱れた髪が目を引きくらいであった。

ただ、すれ違いざまにその男から漂う芳香が私を振り向かせたのである。

それはどこまでも優しくふくよかで、そのくせ一筋の凜としたものが肺腑の奥まで抜けるようであり、まさしく抗いがたき蠱惑としか言いようはなかった。

水溜りをまたいで立ち止まりその香りに心奪われていると、後ろを歩いていた親子が

「あ、おひさまのにおい！」

「あらほんと、羨ましい」

と言っているのを耳にした。

私は最初それをいくつかの点で奇妙に思ったが、すぐに合点がいった。

『おひさま』というのは、おそらく洗剤かなにかの名前なのだろう。

どこの会社か知らないがすごいものを開発したものだと感じた私は、踵を返しスーパーへと戻ることにした。

洗剤は今日明日なくなるというわけでもなかったはずだが、ちょうどいい機会であるから買い足してもいいだろう。

いつの間にか男のいなくなっていた道に戻り、自動ドアをくぐって冷気の支配する店内へと戻る。

入ってすぐに積まれていた青物や果実の匂いが、つい先ほどより色あせたものを感じられた。

そのまま洗剤のコーナーに行って棚を眺めるが、『おひさま』という商品は見当たらない。

あの香りをもう一度、という一種強迫めいたものに襲われて、私は通りがかった店員を呼び止めた。

『おひさま』について問うてみると、店員はああ、という顔をして

「おひさまはですね、うちにはないんです」

と声を殺して言った。

む、と思いながら店員を見ると、

「店を出て右に曲がってそのまま歩いていただきまして、突き当りをまた右に曲がった行き止まりでお望みのものが手に入るかと思えます」

そう言って、にこりと笑う。

スーパーに置いていないということは、何か特殊な流通の品なのだろうか。道理で母親が羨ま

しい、と言うはずだ。

店の利益にならないだろうからあまり大きな声では言えないようだが、なかなか親切な店員である。

私は礼を言って、店員の手前歯ブラシなど買い足して店を出ると教わったとおりに歩き出した。

そしてじわりじわりと汗ばむ感触と共に角を曲がってしばらくすると、私の鼻は再びあの香りを捉えたのだ。

それは一歩進むごとに濃く、深くなっていき私の足もそれに比例して速まる。

かすかな恍惚すら覚えながら辿り着いた道の行き止まりは、どこにでもありそうな二階建てのアパートであった。

商店ではないのかとわずかに疑問にも思ったが、私の頭はいまやこの香りでいっぱいであった。

とはいえアパートでは一体どこを訪ねたらよいのかも分からない。どうしたものかと思っていると、おあつらえ向きに一室の扉が開いたのである。

そこに出てきたのは先ほどの男であった。顔には満面の笑みを浮かべている。

「どうなされました」

笑顔のまま男が訊いてくる。私はただうわごとのように「おひさま」と呟いた。

「おひさまは、ここにいます」

そう言って男は開いた自室のドアを手で示し、私を招きよせる。

誘われるままふらりと一歩を踏み出したところで、私は石か何かに蹴躓いた。

倒れるというほどではなく、一歩踏み込んで顔を上げる。

そして、私はようやく正気にかえったのである。

視線が男に吸い寄せられていて気付かなかったが、そのアパートの二階。

全ての部屋にかかる桃色のカーテンと見えたものは――全て桃色というだけでも異質だが――よく見れば、風などでは到底生じえぬ奇妙な模様を描いて律動しているのだ。

ぞわりと私の背筋が粟立った。全ての汗が脂汗となり身体を冷やした。

男は転びそうになった私を見ても何も言わず、全く同じ笑顔でなおも手招きをしている。

扉の奥は暗くていまいちよく見えないが、窓を見れば同じように蠢くカーテンのような質感の何かがあり、そして狂おしいほどのおひさまのにおいがしていた。

声は上がらなかった。歯の根が合わなくなるようなこともなかった。

私は髓まで痺れるような恐怖の中、踵を返し歯を食いしばってただ走った。

後ろで何やら声がし、それから窓が勢いよく開く音がした。

走りながら一瞬だけ振り返ると、開いた窓から住人と思しき人々がバケツや洗面器のようなものを手に顔を出していた。

彼らはばしゃり、ばしゃりとそれらの容器から何か液体を飛ばし、途端に鼻腔を襲う魔の魅惑が強くなった。

私はもはや振り返ることすらしなかった。先ほど曲がった角まで駆け抜け、大きく弧を描いて

曲がり、なお走った。

そうして下宿まで辿り着いたときには全身は汗でぐしょぐしょとなり、買い物をしたはずのスーパーの袋はどこかで失くしてしまっていた。

それでも私は兎にも角にも助かったのだ、という安堵感から床に倒れこみ、電気もつけずに蒸した部屋で膝と共に笑い続けた。

やがてそれが収まったとき、私を襲ったのは先ほどと比べれば薄い、しかし確かな恐怖であった。

あの桃色の『おひさま』とは一体なんなのか。

何らかの生物であることは間違いない、だが植物であるのか動物であるのか、あれだけでは全く判断がつかないのだ。

そしてあの住人たちは、店員は、親子は。

住人たちをああしたのはあの香りに違いない、だが、具体的にはどうなっているのか。

あの香りを嗅がずにいれば正常に戻るのか、それとも一度嗅いでしまったらもう戻れないのか、そして彼らはどの程度まで狂っているのか。

私が逃げる事ができたのだからある程度までは大丈夫なのだろうが、このままでは確実に感染を拡げていこう。

かといって誰に話すこともできない。到底信じてはもらえないだろうし、実際に見せてみたときにはもう手遅れなのだ。

スーパーとは歩いて数分の距離があるし、幸いにも自分が今まで大丈夫だったのだから、おそらくまだこちらの方まで広がってはいないだろう。

しかし、できるだけ早く引っ越したほうがいい。

そう思って立ち上がったとき、玄関をノックする音が聞こえた。

思わずびくり、と硬直するが、その直後に聞こえてきた「いるんでしょー？」という声に安堵する。聞き慣れた大家さんの声だ。

大家さんはこのアパートに住んでいるし大丈夫だろう、と思って鍵を開け、ノブを回そうとしたところで手が止まる。

そういえば。

買い物帰りとしか見えないあの親子はたしかこっちの方向へ、

驚くほどの強い力でドアが外から開けられた。

外は部屋の中と同じようにじめじめと蒸して、気がつかないうちに夕立めいた空模様となっていた。

開け放たれたドアの前で私より頭一つ小さい大家さんにはこやかに笑っていた。

濃くなる雨の匂いと、うっすらと、しかし確かにそこにあるおひさまのにおいが交ぜになって私を襲った。

新派文芸賞受賞作品②

『メール攻略法』

小林 アンドレア

ごきげんよう、はじめましてッ！ あたし、小林アンドレア☆ガリ勉に見えるラズベリーレッド色の眼鏡が取り柄・目印・トレードマークの大学3回生☆絶賛キャンパスライフ中☆

あたし、今まで男の子とお付き合いした事がなくて、自分で言うのも何だけど、とってもピュアでとってもウブなの。眼鏡の奥に光る瞳はさながら「ピュアレズ」って感じ？(ここ笑うところよ。)ファーストキッスも当然まだだし、ピチピチの『新品』です☆

今までに同じ大学の女の子たちに、「合コンセッティングしたんだけど、よかったら来ない？」って何度か誘われてはいたんだけど、「いえ、ボールだけが友達ですのでお断りします。」って頑なに断ってたの。眼鏡を言い訳にしてね。とにかく自分に自信がなくて。するとピオニーパープル色の眼鏡をかけた女が、去り際に「ノリ悪いよねー。コバヤシさんがいるとうちらが引き立ってよかったんだけどー。」って半径15メートル以内に居たにも関わらず本音を暴露しやがったの！丸聞こえだつううううう！じゃあ隣の梅紫色の眼鏡の女が何て言ったと思う？「うん。」だってよ！てめえらせいぜい会いたくて震えてろ！！

そんな恋とはからきし無縁なあたしだったんだけど、みんなに報告があります！

何と一週間前、彼氏ができちゃいましたッ！(照)

遡ることおよそ二週間前、たまたま小学校の頃と同級生のもーくんと付き合ってる夢を見て、十年近く経った今にして何だか急にもーくんの事が気になりだしちゃって...乙女心七変化ってヤツなのかな？

さてさて、この話電子書籍として出版されちゃう訳だし、もーくんってモロに名前出しちゃうのもアレだから、今から彼の事は「M君」って表記するわね☆

じゃあさっそく、なれそめを説明しちゃうーす！

まず、M君がどういう人なのかっていう人物像をお話しないと、説明聞いてもイメージしにくいわよね。M君...あたしの彼氏(強調)がどんな男の子かというとな、小学校の頃は顔と頭が人より少し大きくて、ずっと坊っちゃん刈りで、キックベースが異様に上手な男の子だったわ。そんなキックベースが上手なM君を、あたしはよくボールみたいに蹴り飛ばしてたなあ。何であんなに蹴ってたのかは覚えてないんだけどね！けど床にひれ伏すM君の姿とあの目の色、今でも鮮明に覚えてる。あたしがM君の事を好きでついいじめちゃってたのか、それともM君が、あたしの事を、好きで？ちょっかいかけてたのか？(で、蹴られてたのか。)どっちだったんだろう。いやー覚えてない。あるいは、M君は単に蹴られる事に快楽を感じる小学生だったのかもしれないわね。あたしも完全にM君をなめてたから、白昼その上校内で堂々とSMに興じてたんだけど、ごめんねM君。さてと謝ったところで、そんなM君にあたしが一体どうやってアプローチをしたかというとな、実は彼と同じマンションに住んでるの！M君が6階で私が2階。立場は私の方が上。同級生だらけなのよね、住んでるマンション。全員男子で、小学校の時たまにあった集団

下校みたいなのがすごく嫌だった。列から遅れをとって一人で花の蜜とか吸ってた。これ実話。て、いっけない、この話は別段どうでもいいわよねッ。てへぺろ☆ そしてなれそめは、ページの都合上、カットさせて頂くわ！ てへぺろ☆

～いきなり話が飛びます～

そんなM君と、明日はドキドキの初デートなの！どこへ行くかはまだ未定中の未定！このあたしが男の子とデートするだなんて...何だか信じられないや！

ま、今日もプチデートしたんだけどね！（ドヤ顔）彼氏ができた祝杯を挙げて、今まで持とうとしなかった携帯電話をついに買いに行ったの！もちろんM君と一緒にね！今すぐにでもM君とメールしたいから、早く使いこなせるようになるには簡単なのが一番だと思って、「らくらくフォン」ってやつを買ったわ！

そして今は子羊のルームウェアに包まれて、明日のデートに備えて体を壊さないように、部屋でピクリとも体を動かさないようにしてる！

それじゃあ、今から「らくらくフォン」を片手に、M君に初メールしちゃいま～す！

「タイトル：携帯買いました！祝・初メル！！

本文：あ」

よっし、送☆信☆っと！

[ぶるるるるる]

あっ、早速メールが返ってきたわ！

うふ、M君はなんて返してくれたのかしら？

「タイトル：携帯ゲットおめでとう(*^_^*)

本文：「あ」の次は「い」だよね。」

んま！あたしってば無意識の内にM君の誠実な人柄を丸裸にしちゃった！

そりゃあ常識から考えたら「あ」の次は「い」だものね！

「タイトル：ありがとう！ところでうちのきょうのぼんごはんは3日ぶりくらい

本文：に+-だったよ。ちょうハッピ-。」

[ぶるるるるる]

「タイトル：そうなんだ！

本文：僕んちはオマール海老丸ごと一匹とウニの姿揚げだったよ(*^_^*)

カレーとか家であんまり食べられないからうらやましいや！」

...て、何かえらくいいモン食べてるわね。ウニの姿揚げってなにそれ？この流れは金持ちに晩ごはんのカレーを小ばかにされてるって考えるべきなのかしら？同じマンションに住んでる事も隠れ嫌味？

.....て、ちょいちょい。あたし、ひょっとするとこのままゴールインしたら玉の輿決定じゃね？ビッグチャンス到来。...ぐふふっ。

「タイトル：すごいね！

本文：そんなの食べたことない！オマール海老って一体一尾いくらするの？M君の家はお金持ちなの？結婚したら玉の輿になれる？」

さりげなくそして大胆に結婚アピールぶちかましてみちゃった☆

まだちょっと早いと思うけど、だけど結婚とかこういう事は学生の内から気持ちを焦らせておかなくちゃ、未来で売れ残っちゃうからね！

[ぶるるるる]

「タイトル：M君？

本文：誰それ？(ハートがブレイクした絵文字)」

ぐはっ！！！！！！

し、しまったつい癖で！！

ここは機転を利かせて回避や！

「タイトル：言わせないで！

本文：照・れ・か・く・し！」

よし！完璧な言い訳！(ぐっ)

[ぶるるるる]

「タイトル：たった今入った超ビッグニュース！

本文：レモンの汁が目に入った！！うわあ—————！

あなたの今入ったばかりのビッグニュースは何ですか？(*^_^*)」

えええ大丈夫——。照れ隠し完璧にスルーされた。まいった……。

そんなことよりも、私も何か旬な話題を！…ぶふーっ。あっ☆

「タイトル：大丈夫？目にしみてない？

私のビッグニュースは、今才奈良が出たこと☆」

いっけなひいいいいい！ こういうお下劣な報告は女子…彼女 としてご法度！ しかも変換間違ってるし！

あっ…送信ボタン押しちゃった。ほんぎゃー！ 中止中止！！ てて手遅れえー！

[ぶるるる]ってかもう返信キター—————！！！！

「タイトル：どどどどうしたの

本文：なんかごめんたじたじしちゃって、タイトル噛んじゃって(二つに飛散した汗の絵文字×2)」

いけない！ M君をたじたじさせてしまっているわ！

ここは、何としてでも誤解を解かなければ！

「タイトル：なし！今のなし！

本文：なし！！」

15秒後、[ぶるるるる]

「タイトル：Re:なし！今のなし！

本文：りょうかいわかった(*^_^*)」

いやん、もーM君大好き！！！！！！

て、のろけてる場合じゃないわね！

そろそろ明日の予定を立てなくっちゃ！

「タイトル：ところでところで

本文：明日どうする？_|_○_ヒヤッε=_○ノホーウ!!」

かわいい顔文字導入してみちゃった！

送☆信☆

[ぶるるるるる]

「タイトル：どこへ行こう？

本文：僕はどこでもいいよ_|_○_ヒヤッε=__○ノホーウ!!」

いやん！ M君もさっそくこの顔文字使ってくれてるじゃない！

あたしたちってば、どこまでアツツツツアツカップルになれば気が済むんだろう？ けど、ちよっぴりM君が受け身なのが気になるところ！（ぶうッ）

「タイトル：どこでもいいとか一番困るブウ～☆(豚の絵文字)

本文：もお～！ も一君ったらあ、男の子だったらしっかりあたしをエスコートしてよお～！（笑）
」

よし送☆信☆っと！

～30分後～

え、てか返事来なくなったんすけど。

M君は昔から真面目で誠実な雄だから、きっとあたしのアフリカ系インディアンジョークのジョークの部分差し引いて嫌味しか残らない言葉を真正面から受け止めちゃったんだらうな……。それか、お風呂に入っているのかもしれない。

[ぶるるるるる]

どっきーん！ 返事が来たわ！

まずは、とにかく謝らなくっちゃ！

「タイトル：おまたせ！

本文：はじめまして、も一君の母の奈美です☆(*^_^*)

初めてのデート先ってとっても迷っちゃうよね！わたしも昔そうだった！明日はお天気もいいみたいだし、公園でピクニックとかいいんじゃないかなあ(*^_^*?)」

.....

母が出てきました-----!!!!

付き合っ一週間目にして早くもマザコン発覚！ 大決定超決定！ 21にもなってこんなところで母親頼るなよ！！ 「困るブウ~☆(豚の絵文字)」とか言っちゃってんじゃん私！ 宇宙の塵となりたい！ もしかして玉の輿とか言ってたのも全て隣でチェックされてた？ やばいやばいやばいブウー！

てゆーかお母様って...！ い、いきなりそんなラスボスに登場されて...。ななななんてお返事すればいいのかしら？ ここで名誉挽回の媚を売らないとマジで玉の輿の夢逃す！ とにかく媚びれええええええい！

「タイトル：初めまして！ (桜の絵文字)

本文：モス男さんとお付き合いさせてもらっている小林アンドレアと申します。公園でピクニックですか！ 確かに明日は気象庁による天気予報では降水確率0%でお天気も良いみたいですし、素晴らしい提案だと思います！ 張り切ってお弁当作っちゃいたいです！

(*^^*)味は到底お母様のお料理には敵わないでしょうけど.....(//>ω<//)

それでは、モス男さんに代わって頂けますでしょうか？(^ω^)」

よし！ 送信！ M...モス男出ろよ！

[ぶるるるる]

「タイトル：はいはいモス男です！ (ピースの絵文字)

本文：デートなんだけど、ピクニックの後はオタクの聖地、アニメイトでハッスルして、ミドリ電化でまたるりんちょりーす！ オラ悟空！ しませんか？(*^_^*)」

何の為に母と30分も恋の相談したんだお前！！ さっき何を懲りたんだむしろ悪化してるじゃねえか！

マザコンその上アニヲタだし家電ヲタなのかよ！

「タイトル：ちょりーす！ オラも悟空！(爆笑)

本文：じゃあじゃあ、明日はピクニックの後でオタクの聖地、アニメイトでハッスルして、ミドリ電化でまたるりんちょりーす！ しょっか(ハートの絵文字)

10時にあすなろ公園に集合でいいかなあ？ (*^^*)」

いつ何時お母さんにメール見られてるのか知れたもんじゃない。多分今までのやりとり全部見られてるんだろうな.....逐一お母さんに報告されて.....あああ海のモクズとなりたい。

[ぶるるるる]

「タイトル：父です。

本文：了解。」

おおおおお父様！????

何でこのタイミングで父親が出てくるの？ メールの文字からも心なしか威厳が伝わってくるよ！そして何でデートの予定の決定権がお父さんにあると思ってるの！？これ家族会議じゃないんですけど！

[ぶるるるるる]

今度は誰だ！

「タイトル：次男のミス男です(*^_^*)

本文：いきなりですみません！小林アンドレアさんに質問があるんですけど、 $[15x + 6 = 6x + 60]$ の答えって何だと思います？」

宿題の答えを聞くな次男————！！！！今関係ねえだろオオオオオい！！

一次方程式くらい自力で頑張って解けや！

しかし親の監視下に置かれてしまっている今...おとなしく言いなりになるしかあるまい。

「タイトル：はじめましてミス男さん(サーファーの絵文字)

本文： $[15x - 6x = 60 - 6]$ の解き方

左辺をxでくくる： $(15 - 6)x = 60 - 6$

$$9x = 54$$

両辺を9で割る： $x = 6$ ではないでしょうか？」

[ぶるるるるる]

「タイトル：続きましてはミス男のじじいの登場で～す。(*^_^*)」

家族でメールリレーしてるんじゃないかねええええ————！！！！

こっちは別にそういうの待ってねえんだよ！てゆうか次男感謝の言葉の一つくらいかけてこいや！何なかった事にして答え書き写してんだ！

「本文：ちょっと聞きましたよ

○▲さんとこの娘さん、

こないだご近所の畑のサニーレタス盗んだんですって！？」

縦読みのセクハラ————！！！！

うおおおおくそじじいいいいいい！　ここの家族ろくでなしばかりか！！

[ぶるるるるる]

「タイトル：訂正、ごめんね！(b y モス男)

本文：うちのおじいちゃんちょっと暴走気味の変態なんだ！

けど、本人曰くスケベ星から来たエロエロ王子らしいから、何とか許してあげてくれないかな(二つに飛散した汗の絵文字×2)」

それでフォローしてるつもりかァー！！！！

発想が小二レベルで結局ろくでもねえじゃねえか！

「タイトル：平気だよ(ハットとキラキラの絵文字)

本文：ユニークなおじいさまじゃない！　うちのおじいちゃん逝きかけだからお元気そうでうらやましいな。」

[ぶるるるるる]

次は誰が出てくるんだ…。

「タイトル：あいつ今風呂ッス！

本文：え、てかどっちから告ったんすか？(*^_^*)」

これは誰だァ————！！！！名乗れええええ！！

何人家族いるんだよ！？　じじいのセクハラ騒動の後に容易に家族に携帯を預けるなよ！　そして『(*^_^*)』は家族の共通顔文字なんだね！　父以外！今確信に至った！　もう間違いないよね！　一人一回絶対使ってる！　父以外！

「タイトル：はじめまして(食パンの絵文字)

本文：どこのどなたか存じませんがよろしく申し上げます。

告白したのは私です。マンションの前で夜毎日待ち伏せして告白して、バイト先のコンビニで一日二回ハート型のチョコレートを買ってレジで渡して、それを一週間続けて、先日ようやくモス男さんのハートを射止めました。」

送信。ぜえ、ぜえ。つ、疲れた……。

[ぶるるるるる]

今度は誰だ.....。

「タイトル：僕僕！

本文：家族会議で明日のデートはみんなでアニメイトに行きませんかっていう結論になりました(*^_^*)」

もうお好きなようにして下さい。

「タイトル：了解です。

本文：。」

送信。

おやすみー。

新派文芸賞受賞作品③

『完全に透明な靴』

蜂殴打 硝子ノ介

『完全に透明な靴』 蜂殴打 硝子ノ介

扇風機がカラカラと羽根を鳴らしながら熱風をかき混ぜる。

全身からとめどなく汗が流れ落ちる。

暑過ぎてもう声も出ない。

本来なら快適で文化的な生活を提供するはずの機械は、数日前に異音をあげて完全にただの白い箱になった。開け放った窓からは熱風とエサを求めた蚊が入ってくるだけだ。

どうしてあの時、直しておかなかったんだ。

暑さで溶けた頭に、ぼんやりとそんな言葉だけが浮かんでくる。

蝉が鳴いている。

また今年もこの季節が終わった。

シンデレラはどうして自分から名乗り出なかったのだろう？

「その靴は私のです。」と言えば全てはスムーズに終わっていったに違いないのに。

意地悪な義理の姉に復讐するため？

自分の登場を劇的に演出するため？

違う。

彼女の美しさのピークは魔法が切れた時に終わっている。これから先はどんな飾りも、あの時以上に彼女を輝かせることは無い。

だったら何故。

何故？

それは王子様に責任を被せるため。

「あなたが勝手に私を探し出したのだから、私に責任は無いわ。」
きっとシンデレラはその免罪符が欲しかったのだろう。

だからわざわざ、彼女はガラスの靴を置いていったのだ。

私たちはそんな卑怯なことはしない。
これは全て、私たちの責任だ。

だから彼には、何一つ痕跡なんて残さない。
永遠に、誰にも、それは知られはしない。
永遠に、永遠に、これは続いていく。

私たちが飽きるまで。

エアコンが不機嫌な唸りを上げて生暖かい風を吐き出している。
テーブルの上のコップには、半分溶けた氷が気だるそうに浮かんでいる。

「どうしてこうもウチのエアコンは効かないんだ。」
ソファにだらしなく座りながら、汗ばんだ体に団扇で風を送っている男が呟く。

「壊れてますから。」
向かい合うような位置でカーペットの上にちょこんと座っている夏用の制服を着た女が、さも当然というように答えた。

ソファの男は、一体お前はいつからそこに座っていた？という顔をしながら団扇を向かいの女に向けてあおぐ。

「いつの間に帰ってきてたんだ……に、したってお前は どうしてそんな平気そうな顔をしていられるのだ。こんなに暑いのに！」

団扇の風が女の短い黒髪を揺らす。

「そんなこと無いです。暑いです。」

男はじっと女の顔を覗き込む。

「汗のひとつもかいていないのに？」

「兄さんとは体の作りが違うのです。」

兄さんと呼ばれた男があおいでいた団扇がピタリ、と止まる。

「ほうお前は兄が人間では無いと言うか。確かに兄妹仲は良好では無いがそこまで陰悪でもない、とっていたがな。」

妹のまるでブラックホールの様な真っ黒の目が、驚きの色を浮かべる。

「惜しいです。」

「なにがだ。」

何かを決心するかの様に、妹は小さく息を吸う。

「子供を作りますか？」

乾いた音をたて、兄の手にあった団扇がフローリングの床に落ち乾いた音を立てる。

「なるほど、俺の妹は随分と暑さにやられてるようだな。死ね。」

「順番を間違えました。」

兄は団扇を拾うと、今度は自分をあおぎだした。

「順番もクソもあるかバカタレ。」

「違うんです兄さん、聞いてください、」

ソファから立ち上がろうとする兄を制して妹は言葉が続ける。

「兄さんに言って無い事があるんです。」

正座に座り直す妹を見て、兄は立ち上がろうとした中腰の体勢から再びソファに深く座る。

「なんだおい改まって気持ち悪い。」

半笑いで答える。

「あの、びっくりしないでくださいね？」

「金ならねーぞ。」

「そんな話では無いです。ええとですね・・・」

もじもじと指先を見ていたが、意を決したように正面に顔を向け兄の顔を真っ直ぐに見つめる。

「実は私は」

「私は？」

「宇宙人なんです。」

ぼんやりと前を見つめる兄、目を強く閉じ顔を伏せる妹。

壊れかけているエアコンの送風口から吐き出されるぬるい風の音と、窓ガラス越しの蝉の鳴き声だけがやたら大きく聞こえる。

「.....そうか。」

その言葉を聞いた妹は伏せていた顔をあげ兄の右手を握り、期待に満ちた目を兄に向けた。

「わかって頂けましたか！」

「せいっ！」

兄の額が妹の頭頂部に叩きつけられ頭蓋と頭蓋のぶつかる鈍い音が響く。

「変わった風習をお持ちなのですね。」

空いてる手で頭を押さえて声にならぬ声をあげ悶絶したのは、兄のほうであった。

「.....今まで俺は良い兄として生きていたから知らなかったが、お前とんでもない石頭だな！」

「宇宙人ですから。」

「まだ言うか！」

勢いよく手を振りほどく。

妹はしなびた青菜のような顔になる。

「だって本当ですから……」

「妹よ、俺はお前を病院には連れていきたくないのだが。」

「大丈夫です！体の構造が違うので産婦人科には行けません！」

(なんだ、そんなことを心配していたのか)と言わんばかりの自信に満ちた表情で答える。

「ちっがーう！」

思わず立ち上がり頭をかかえる。兄につられて妹も立ち上がる。

「ああもう、冗談なんだろ？ただでさえクソ暑いのに勘弁してくれ。」

「ですから冗談なんかではなく……」

兄の両手が妹の肩を掴む。

「お前は、俺の、い・も・う・と、なの！同じ親から生まれた人間！」

妹がそっ……と兄の頬を手のひらで包む。

「信じてはもらえないのですね。」

「信じるもなにも、お前が生まれた時から一緒じゃねえか。どこに宇宙人の要素があんだよ。」

「それなら」

小さく息を飲む。

「それなら、私の名前を教えてください。」

「ああん？」

兄の目に浮かぶ困惑。

「名前です。」

「んなもんおめえよう……」

目が泳ぐ。

「あの、あれだ、あれ、えーっと、なんだ。」

目を逸らす。

「えっ？おい、ちょっと待てよ…あれ？え？なんだこれ？ド忘れ？」

目を白黒させる。

「妹の名前ド忘れ？えー？嘘だろ？ちょ、ちょっと待てな、えーと…」

「兄さん。」

呼び掛けた妹に視線を戻す。

「せいっ！」

妹の額が迫る。

まるで車がぶつかったような、重く深い衝撃が兄を襲う。

ゆっくりと崩れ落ちる兄の耳が最期に捕らえたのは、「また間違えた。」という妹の呟きだった

。

蝉の激しい鳴き声が男の子の耳を刺す。

布団の中で朦朧としたまま何度目かの寝返りを打つ。

夏風邪を引いた体は、だくだくと汗を流しながらも寒気が止まらない。

（明日は、お祭りなのになあ……）

ボンヤリと毎年の楽しみに思いを馳せる。

すっ……と襖が開く。

畳の上を透き通るような肌の足が近づいてくる。

足は男の子の寝てる布団の横までくると、膝を折って座る。

「どう？」

まるで風鈴の音のような澄んだ声が男の子の混濁した意識を少しだけはっきりさせる。

「うん……おねーさん……」

汗で濡れた額がタオルで拭われる。

「ほら、これ飲んで。」

男の子の口前に小さなカプセルが差し出される。

「おくすり……？」

「早く治してお祭り、行こうね。」

つるり、とカプセルは男の子の喉に吸い込まれていく。

「おみず……」

水差しが口元に運ばれ、乾いた口を濡らす。

「お熱どうかな？」

男の子の額に頭を近づける。

まるでお寺の鐘を突いたような音が響く。

「いぎっ」

そのまま昏倒する男の子。

「……距離感間違えた。」

赤くなった額を眺めながら、そんな一人言をこぼした。

右に左にと体が揺すられる。

「兄さん、起きてください。」

ベッドの中の兄がうっすらと目を開ける。朝の光が眩しい。

「なんだよ……」

ベッドの横に立ち、肩を揺する妹を振り払うように寝返りをうつ。

「いててて……」

何故か兄の頭を鈍痛が襲い、思わず声が漏れる。

「ほら兄さん、今日から実家に行くんでしょ？」

「そうだっけ……」

「荷物、昨日用意してたでしょ？」
部屋の隅に置かれたバッグをちらりと見る。
「なんか頭いてえし明日からでいいや……」
「それだとお祭りに間に合わないですよ。」
「いいよもうこの年になってお祭りとか……」
ベッドの中からひらひらと手を振る。
「ダメですっ！」
妹は兄の手首を掴むとぐい、と引っ張り体を強引に起こす。
「うーん……」
「ほら！急いで着替えてくださいね！」
そう言うと妹は、勢いよくドアを閉めて部屋から出ていった。

「なんだかなあ……なんでこんなに頭いてえんだ……？」
額を擦りながらベッドから這い出す。
「ん？」
何かが張り付いている。
爪の先で慎重に額から引き剥がす。銀紙のような金属の薄い膜が取れる。
首をかしげながらゴミ箱に丸めて捨て、兄は着替えはじめた。

鎖に繋がれた犬が尾を振りながら足元にまとわりつく。それを足でいなしながら少年は叫ぶ。
「ねーちゃん！まだかよー！」
遠くから微かに祭り囃子の太鼓と笛の音が聞こえる。
浴衣を着た姉が玄関から、下駄の履き心地を確かめるように乾いた音をたててゆっくりと出てくる。
紺の地に鮮やかな朝顔が描かれた真新しい浴衣が、夕日に映える。
「コースケ抑えといてね、折角の浴衣に毛がついちゃうし。」
弟と犬に向かって言う。
今まで足にじゃれていた犬が、低い唸り声をあげて身構える。
「なんでねーちゃんとコースケは仲が悪いのかなあ…」
ボヤきながら弟は犬の首輪を掴んで押し止める。そこを大きく避け下駄を鳴らしながら姉がひらひらと手を振る。
「ほら早く行くよ。」
「ねーちゃんがおせーんだって！」

夏の日射しが容赦無く照りつける。今はもうもぬけの空の犬小屋は、風雨に曝され崩れ落ちそうになっている。

「田舎とは言ってもあちーもんはあちーな。」

手で汗を拭いながら、実家を前に思わずぼやく。

「兄さんが遅いから、こんな一番暑い時間に歩くはめになるんですよ。」

後ろから妹がそれに答える。

(だからもっとゆっくりこりゃあ良かったんだって……)

反論は心の中だけに押し止める。

「そういえば……」

「なんですか？」

「コースケっていつから居ないっけ？」

ぼろぼろの犬小屋に目をやりながら、兄は首を捻る。

「随分前からですよ。」

兄は軽く目を閉じる。

「いつの間にか、どっかいったんだよなあ……」

思い出せないほど昔だったろうか？忘れてしまうほど軽いことだったのだろうか？

蟻は同じ巣の仲間を体についたフェロモンで判別しているという、そしてそのフェロモンは巣の状態や食物によって日々変化している。

例えば同じ巣の蟻を1匹だけしばらくの間だけ隔離し巣に戻す。すると既に巣のフェロモンは変わってしまっていて、戻した蟻は「部外者」として攻撃され殺されてしまう。

また、そのフェロモンを身にまわってしまえば――それが蟻にとってどんなに危険な生物だったとしても――仲間として巣のなかに居座ることが出来る。

つまり何かを騙す為には、「騙すべき部分」だけを騙せばいい。それがもっとも確実で、もっとも効率の良いやり方。

「だからね。」

唸り声をあげる犬に、女は語りかける。

「私はあなたを騙すようにはできていないのよ。」

剃刀で誤って体を切りつけてしまった様な、そんな音が深く長く続く。

「ごめんなさいね。」

女は安堵とも後悔ともつかぬ息を吐くと、軽々とそれを抱えてどこかに持ち去っていった。

夕日が部屋の中に差し込んでくる。遠くの方から、まだ足並みの揃わない祭囃子が聞こえはじめた。

背後ですっ……と襖が開く。畳の上を透き通るような肌の足が近づいてくる。

「兄さん。」

なんとなしに外を眺めていた兄が、座ったまま顔だけ振り返る。

紺の地に鮮やかな朝顔が描かれた真新しい浴衣を着た妹が小さく両手を広げる。

「どうですか？」

「そんな浴衣持ってたっけ？」

妹は少し考えるように首を傾げる。

「どうでしたっけ？」

「俺に聞かれてもなあ……」

兄は困ったように苦笑を浮かべる。

「そんなことを聞いているのではないのです。」

「いいんじゃないねーの？」

目を逸らし、また外に顔を向けながら答える。妹は自慢気に胸を張り満足したような顔で小さく笑う。

「さ、いきましようか。」

「まだ早いだろ……」

そう呟きながら、のっそりと立ち上がる。

ゆっくりと山の間に日が沈んでいく。

女性と手をつないだ男の子が、楽しげに歩いている。

「風邪、治ってよかったね。」

「おねーさんのおかげだよーう。」

歩くのとスキップの中間で跳び跳ねながら、男の子が答える。

「そうかもね。」

女性は小さく笑いながら、男の子が勝手に行ってしまうように少し強く手を握り直す。

一歩進む度に祭囃子の音が大きくはっきりと聞こえだし、夕暮れに合わせて鳴き出した蛙の声と混じる。それがまるでこの祭が人と獣が交わり、ここではないどこか誰も知らない場所で行われているような気分にさせる。

真っ赤な鳥居が遠くにちらりと姿を現す。

神社の境内へ向かう長い階段の手前で妹は立ち止まった。

「どうした？」

ふわり、と妹はその場で一回転し兄の方を向く。

「着くずれてない？」

「大丈夫。」

妹はにんまりと笑うと、兄の手を取った。

「行こ。」

兄は手を引かれ石段を昇る。

神社の境内へ向かう長い階段の手前で女性は立ち止まった。

「どうしたの？」

ふわり、と女性はその場で一回転し男の子の方を向く。

「着くずれてない？」

「大丈夫だよ。」

女性はにんまりと笑うと、男の子の方に手を伸ばした。

「行こ。」

男の子は手を取り石段を昇る。

神社の境内へ向かう長い階段の手前で姉は立ち止まった。

「どうかした？」

ふわり、と姉はその場で一回転し弟の方を向く。

「着くずれてない？」

「大丈夫じゃね。」

姉はにんまりと笑うと、弟の方に手を伸ばした。

「行こ。」

弟はその手を無視して石段を昇る。

神社の境内へ向かう長い階段の手前で娘は立ち止まった。

「どうかしたのか？」

ふわり、と娘はその場で一回転し私の方を向く。

「着くずれてない？」

「大丈夫だ。」

娘はにんまりと笑うと、強引に私の手を取った。

「行こ。」

私は言われるまま手を引かれ石段を昇る。

この祭に来るのは何回目だろうか？私は思わず周りを見回す。

毎年、夏には娘を連れてこの祭に来ているはずなのだが……どうも思い出せない。

いや、考えてみれば子供の頃から毎年この祭を楽しみにしていた筈なのだが……これといった記憶が無い。

空気を震わせる太鼓の音が、私の思考を途切れさせる。

祭とはそういうものなのかもしれない。

ここはいつもの私がいる所とは切り離された、何か特別な空間なのだろう。

考え事をして歩みの遅くなった私の手を娘が引っ張る。

「お父さん、ちゃんと歩いてよね。」

考えてもみればこのぐらいの年頃の女の子が、父親と祭にきてくれているのだ。

自分の娘ながら優しいと言うか、変わり者と言うか……普通このぐらいの年だと父親とは疎遠になるものだと思うが、十……いやはや、娘の年も忘れてしまうとは酷い父親だな私は。

高校生だったかな……？だと十五、六歳か。いや、しかし娘の制服姿が思い出せない。そんなバカな。

「お父さんってば！」

「すまんすまん。」

また足が止まりかけていたようだ。

耳から否応なしに入り込んでくる太鼓と笛の音が頭を痺れさせる。ゆらゆらと揺れる浴衣の柄が、まるで夢と現実の境目のように私の記憶を曖昧にしていく。

そういえば子供の頃、同じように親戚の女性に手を引かれてこの石段を昇ったような気がする。

いや……このあたりに私の親戚などいたのだろうか？あれは姉か？違う、私に姉はいない。おぼろ気な記憶の底から妹と一緒に祭に来た思い出が顔を覗かせる……いいや私には妹もいない。

じゃああの女性は誰だ？母親か？

そもそもここはどこだ？

握られた手からひんやりと冷たい感触が伝わってくる。果たしてこれは私の、人間の手の感触な

のか？

視界の隅を真っ赤な枠が流れる。今のは鳥居なのか？頭を痺れさせる音はますます強くなっていく。目の奥がちかちかと痛む。

私はどこへ行くのだ？

急に淀み無く進んでいた歩みを止める。

「花火、はじまっちゃうね。」

女性が男の子に話しかける。

「もうそんな時間？」

祭の熱気に当てられたのか、男の子はぼんやりと答える。

「よく見える場所、行こっか。」

女性が手を引き、鬱蒼とした林の方に向かう。

「なんか怖いよ、暗いし。」

男の子は立ちすくむ。

女性が振り返り、諭すように語りかける。

「大丈夫。おねえさんが一緒だよ？」

男の子は小さく頷き、手を強く握るとおずおずと歩きだした。

木々の間をすり抜け、先に進むと少し開けた場所に出た。地面がわずかに隆起し、小さな丘のようになっている。

「ここよ。」

丘のまんなかに女性と男の子が並んで立つ。

「さあ、はじめましょうか。」

急に淀み無く進んでいた歩みを止める。

「花火、はじまるね。」

姉が弟に話しかける。

「もうそんな時間だっけ？」

祭の熱気に当てられたのか、弟はぼんやりと答える。

「よく見える場所、行こ。」

姉が手を引き、鬱蒼とした林の方に向かう。

「この奥にそんなところあるか？」

弟は立ち止まる。

姉が振り返り、呆れたように語りかける。

「忘れたの？去年も行ったでしょ。」

弟はいぶかしみながらも、手を握られたまま歩きだした。

木々の間をすり抜け、先に進むと少し開けた場所に出た。地面がわずかに隆起し、小さな丘のようになっている。

「ここ。」

丘のまんなかに姉と弟が並んで立つ。

「さあ、はじめましょうか。」

急に淀み無く進んでいた歩みを止める。

「花火、はじまるね。」

妹が兄に話しかける。

「そんな時間か……」

祭の熱気に当てられたのか、兄はぼんやりと答える。

「よく見える場所、行こうよ。」

妹が手を引き、鬱蒼とした林の方に向かう。

「おいおい、どこ行くんだ。」

兄が林の先に目を凝らす。

妹が振り返り、笑いながら語りかける。

「覚えてないの？」

兄は何も答えず、手を引かれるまま歩きだした。

木々の間をすり抜け、先に進むと少し開けた場所に出た。地面がわずかに隆起し、小さな丘のようになっている。

「ここ、ここ。」

丘のまんなかに妹と兄が並んで立つ。

「さあ、はじめましょうか。」

急に淀み無く進んでいた歩みを止める。

「花火。」

娘がぼつり、と言葉を発する。

「花火か。」

花火、花火……私はぼんやりと答える。

「行こ。」

娘に手を引かれるまま、鬱蒼とした林に向かう。

「何か……」

思い出せそうな気がして立ち止まる。

しかし娘にぐい、と手を引かれ再び歩き出す。

「……」

無言のまま娘はまっすぐ林の奥に向かっていく。

木々の間をすり抜け、先に進むと少し開けた場所に出た。地面がわずかに隆起し、小さな丘のようになっている。

「……」

丘のまんなかに娘と私は並んで立つ。

「さあ、はじめましょうか。」

急に辺りが暗くなったような気がした。突然のことに、思わず繋いでる手に力がこもる。その上にそっと、冷たい手が重ねられる。

真っ暗な空に、光が弾けた。

ただただ真っ白な輝きが四方八方に飛び散る。眩しいばかりの燐光が尾を引いて放射状に空を埋め尽くしていく。気が付くと今まで手を掴まれていた筈なのに、隣には誰もいない。

慌てて周囲を見回す。

暗い林の中に、チカチカと空の白光を反射する幾つもの点が見えた。幾つもの……？いや、これは尋常な数じゃない。まるで満天の星空のような密度で、周囲すべてが瞬く光の点で囲まれている。

「なんなんだこれは……」

呆然と周囲を見回す。

「解らない筈です。」

聞き覚えのある女の声がする。

「どこだ……ここはなんだ……」

声は暗闇に吸い込まれる。

「みんなあなたの子供たちです。」

暗がりから、光の点が近づいてくる。

空から降り注ぐ白い光に照らされて姿を現したのは。

全て自分と同じ顔の

いや、年齢はバラバラだが、全て、間違いなく

自分自身、だった。

「これは……」

「ここであなたの複製を作ります。」

乾いた声。

最後に姿を現したのは一人の女。

そしてそれは私の、母だった。/従姉だった。/姉だった。/妹だった。/姪だった。/娘だった。/孫だった。

「設備の調整に関する技術的な問題で1恒星周期のインターバルが必要なのは、未だ改善されない欠点です。」

「どういうことだ……」

「しかし需要を鑑みた場合、このペースで十分な供給数を確保できます。」

「なんのためにこんな……」

女は張り付けたような笑顔を浮かべると、こう言った。

「あなたたちは愛玩用としてとても人気がありますから。」

「愛玩用……」

「私だって、随分とあなたを可愛がっていたでしょ？」

膝から崩れるように地面にへたり込む。

「今では年に一度しか会えないので少々寂しいですが、仕事ですからね。」

女は細い針で、私の胸の辺りを突き刺した。痛みは無い。

「はい、これで終了です。」

針を引き抜くとそれを丁寧にする。

「お疲れ様でした。それではまた来年。」

そう言うと、額に銀色の薄い膜状のものを貼り付けた。

「やめ……」

頭に電流が走る。

最後に目にしたのは、優しく冷たい女の顔だった。

(今回は特にトラブル無く完了ですね。)

「そうです。」

(複製元の耐用年数に限界に近いのかもしれませんが。)

「では次の機会に、経過年数の浅い個体に入れ替えます。」

(それがいいと思います。)

「では今回複製分から1体、コピーガードを解除しての製造を申請します。」

(受理しました。)

寒さで目を覚ました。

どうやら知らない間に眠ってしまったらしい。

扇風機がカラカラと羽根を鳴らしながら風を送る。

全身に鳥肌が立っている。

夏だというのに、寒さで震えが止まらない。

本来なら快適で文化的な生活を提供するはずの機械は、付けっぱなしで寝てしまった為か部屋の温度を過剰に冷やす拷問器具と化している。

慌ててエアコンの運転を切る。

寝起きのはっきりとしない頭で、ぼんやりと窓の外を眺める。

蝉が鳴いている。

*****/span/span

新脈文芸賞受賞作品④

『みーな・かぶりっちお』

鳩ヶ谷 沙織

月明かりだけが煌々と照る、草木も眠る丑三つ時……

「フッフッフ、完成したわっ！」

「おめでとうございます、お姉さま」

様々な機械が薄暗い照明に照らされる暗がりの研究室。そこに、二人の女性の声が響きわたる

。

「苦節八十八年……やっとな私の願いが叶ったわ……」

拳を握りしめて、感涙のあまりふるふると震える一人の女性。それは白衣に身を包み、片眼鏡をかけた、いかにも科学者風の女性であった。

苦節八十八年というわりには年の頃は二十代前半だろう。

「八十八年は言い過ぎですわ、お姉さま」

にこやかに微笑んだもう一人の女性が口を開く。

あまりにもその場にそぐわない、中世の貴族風のドレスを身に纏った十代後半の女性。

お姉さま、と言う言葉から、この二人は姉妹なのだろう。顔立ちや輪郭が、どこことなく似ている。

だが、同じ長い髪でも、無造作に後ろで縛っただけの髪と、ちゃんと手入れされているロングヘアーでは、見た目はかなり違っていた。

それに、姉の真っ黒い髪に対して、妹の髪は鮮やかなスカイブルーをしてるのも印象の差を生むものである。

「これで今度のノーベル賞、間違えないわっ！」

妹に顔を近づけて、姉は高らかに言う。

「あの、ノーベル賞って。お姉さま、それを学会に提出するおつもりで？」

妹の言葉に、姉はふと気がついた様子で、ぽんっと手を打ち。

「出すつもり無いわね」

あっさりと言う。それに続けて

「でも、このまま埋もれさせる気はないわね」

「それでは、誰か実験台を用意しなくてはなりませんね」

「そうだわねえ……」

目の前にある木製の椅子に座り、腕を組みながら姉は考える。

彼女の目の前に存在する、研究の成果。それをどのように、誰に使うかで彼女は悩んだ。

「あの～」

そこへ、妹が口を挟む。

「街で、実験台を探しません？」

「それよっ！」

見かけのわりにはとんでもないことを堂々と言う妹に、姉は即答した。

それと共に、彼女は準備をし始める。白衣を脱ぎ捨て、普段着に着替え、大きめのリュックサックを背負い外へと出ようとする。が。

「お姉さま。まだ、外は夜ですわ〜」

のほほんとした口調で言う妹。

「そうだね」

その言葉に、すぐさま姉は回れ右をし、椅子へと戻る。

どうも、この妹は姉に振り回されっぱなしのようだった。科学者らしからぬ天然さだ。

その時だった。

バタンッ！

「！」

急に開くドアに、二人は警戒の色を浮かべる。

「夜中だって言うのに、うるさいっ！ 今何時だと思ってるんだっ！」

乱暴な言葉が響く。しかし、その声は高い。

ドアを開け、大声で怒鳴ったのはショートカットの少女であった。彼女たちよりも、さらに若い。小学校高学年と言ったところだろう。

「ごめんね〜」

しかし、突然の乱入者に、姉はまったく動じない。それどころか、軽く手をヒラヒラさせて謝る程度だ。

その様子には、反省の二文字は全くない。まさに、当然と言った感じの行動だ。

そんな様子に、乱入者は。

「まったく、こんな夜中に何をやってるんだか、姉貴達は……」

と、呟き、年不相応に肩をすくめる。

「ごめんなさいね。睡眠時間邪魔しちゃって」

二人のうち、妹の方が頭を下げる。

どうも、話の流れから、この3人は姉妹のようであった。

「まったく。明日も学校なんだから、無理すんなよ」

そう二人に言うと、その乱入者はさっさとその部屋から出ていった。

「わたくし達も寝ましょうか？ お姉さま」

「そうだね」

立ち上がり、二人も部屋から出る。

こうして、彼女たちの夜が更けていく……

* * *

「おっはよーございまーす、光さん」

「あら、おはようございます。みーなさん」

元気に挨拶され、にっこりと笑顔で返したのは、スカイブルーの長髪に同じ色のドレスを身

に纏った若い美女。名を東海林光という。

そして、元気よく挨拶したのは、その東海林家の隣に住む高校生。名を宇崎みーなと言う。近くにある市立高校の二年生。セミロングの黒髪に青いカチューシャを付け、夏用のセーラー服を身に纏った、まずまずの美少女だ。高めの身長がコンプレックス。

彼女……みーなは、今一人暮らしをしている。家族は彼女が八歳の頃、両親の離婚で父親を無くし、そして残った母親も義務教育が終わった直後、新しい相手を見つけ、娘を捨ててしまったという、とんでもない家庭で育ったのだ。

そんな彼女は当年にとって十七歳、親戚からの仕送りと、隣に住む東海林家との付き合いで何とか生活をしている。

「みーなさんはこれから学校で？」

「うんっ！」

光の質問に笑顔で答える。

親のいないみーなにとって光は、子供の頃からよく面倒も見てくれたし、お嬢様で頭もよく、運動神経もいい、尊敬できる姉と言っても過言ではなかった。

「光さんは、今日は学校は？」

「今日は休講ですの」

みーなの問いに、光はにっこり微笑んで答えた。

光は、世間的に名門と言われる私立大学の二年生で十九歳。お嬢様風貌に似合わず、専攻しているのは機械工学だというから、世の中不思議なものである。もともと科学者の家系であるからそれが当然と言っちゃ当然。

と、そこに。

「よお。みーな姉貴じゃねえか」

と、ふてぶてしく、東海林家の玄関から出てきたのは、小学生ぐらいの少女。短めの髪にTシャツとズボンと言ったいかにも活発そうな姿で現れた少女に、みーなは手を上げて。

「あ、おはよー。木霊ちゃん」

挨拶一つ。

彼女は光の妹、名を東海林木霊と言う。小学校六年生で十二歳。

「ちゃんはやめてくれよな～、ちゃんは」

ボーイッシュなところのある木霊は、照れくさそうな言葉づかいでみーなに言う。

しかし、みーなは微笑んで。

「木霊ちゃんは女の子なんだから、もう少し光さんを見習った方が良いよ、ねっ」

と、五歳年下の妹みたいな少女に言う。

しかし、木霊は光の方を見ながら頭を掻き。

「性じゃねえんだよなあ。光姉貴のような感じって」

「そうだね、無理だね」

突然響いたその声は、木霊のさらに後ろからだった。

「あ、おはようございます～、望さん」

みーなはその声に覚えがあるのか、名指しで挨拶をする。

そして玄関から現れたのは、無造作に長い髪を後ろで束ね、白衣を纏った二十代前半の背の高い女性。とは言ってもみーなと同じぐらいの身長なのだが。

しっかり整えれば美人なのだろうが、眠たそうな顔と、無造作にしたそのスタイルがその魅力を半減させている。

彼女の名は、東海林望。東海林家の長女で、一家の主である。国立大学で若くして教授を勤める傍ら、学会ではマッドサイエンティストとしても知られる女性だ。

彼女を知る科学者は総じてこう言う。日本工学界きっての天才であり、きっての汚点である。と。つまるところ、異端児を地でいく科学者なのである。

「あー、おはよう……」

眠たそうに瞼を擦りながら答える望。

前日はかなり遅かったのであろうか、本当に眠たそうだ。

「望姉、昨日は遅かったみたいだからなー」

付け加える三女の木霊。

この、東海林家は両親もまた科学者であり、常に海外に行っているため、この3姉妹でずっと暮らしているのだ。それ故か、隣に住む似たような境遇のみーなを、実の妹や姉のように接している。

お互いにとって、この隣人は愛すべき存在なのだ。

「みーな姉、時間大丈夫か？」

「あっ、そろそろ学校行かなきゃ」

木霊の言葉に、急いで自転車に飛び乗るみーな。

「じゃ、行ってきまーすっ」

と、一声あげて、自転車をかっ飛ばした。

これでなかなか脚力が強い。あっという間にみーなの姿が見えなくなる。

「元気だね。みーなちゃん。ふあ～あ」

「そうですわね」

望と光は、その後ろ姿に微笑みを投げかけた。

* * *

「んー、今日もいい天気」

自転車を快調に飛ばすみーな。

しかし、言うほど天気がいいわけでもない。雨こそ降ってはいないが、雲も多く、気温もそれほど高いわけでもない。6月にしては雨が降らないだけでも十分いい天気、なのかも知れないが。

ただ、唯一言えるのは、学校に行くのには何ら不自由のない天気ではあった。

「でも、学校めんどくさいなあ」

お世辞にも彼女は勤勉とはいえない。成績は下から数えた方が圧倒的に早い。なんと言っても、下から数えれば十指にはいるほど成績が悪い。

本人は大して気にしている様子はないのが余計にたちが悪い。

そして、快調に自転車を飛ばし、角を曲がったところでそれが起こった。

「自殺だあっ！」

「危ない〜！」

「キャー！」

あまりに大きな野次馬の声が耳に入る。

「なにになにっ？ 自殺？」

気になったみーなは、すぐに自転車を端に止めて声のあがった方へと向かう。

どうにも、彼女には野次馬根性があるらしい。

「ちょっとすいませ〜ん……………あっ」

人垣を割って、野次馬の最前列で彼女が目にしたのは、駅前デパートの上で若い女性が自殺しようとしている光景だった。

その女性、見たところみーなと同年代である。

目の前では、かけつけた消防団員がせわしく救助用マットの準備をしている。

よく状況が飲み込めないみーなは、周りの話し声に耳を傾ける。

「自殺だってよ」

「付き合ってた男にふられたんだってよ」

「ふーん、それで自殺かい。嫌な世の中だねえ」

野次馬達の話が、都合良くみーなに状況を教えてくれた。

だからと言って、みーなは何かするわけでもないが……。

「ふられて自殺、私にはわからないことだねえ」

しみじみと呟く十七歳。どうやら完全に傍観に徹する構えを取る。もう既に、遅刻寸前と言うことは、きれいさっぱり頭の中からは消えていた。

早く落ちないかな〜、なんて不謹慎な考えをしつつ、上を見上げる。

と、そこに。

「もしもし」

「はい？」

突然呼びかけられた声に、思わず答える。

彼女の目の前には、銀色の消防服に身を包んだ消防団員の姿があった。

「君、女子高生だよな？ その制服だと……ああ、岬陽高の」

「あ、はい」

勝手に話し始める消防団員の言葉に頷くみーな。

セーラー服を着ていて、通学カバンをその手に持っている以上は、嘘を言ってもすぐにばれてしまう。と考えたかどうかは定かではないが、彼女は正直に答えた。

「頼むっ！ 上の自殺している少女を説得してくれっ！」

「ええーっ？」

突然の言葉に、思わずみーなは大声で叫ぶ。

周囲の目がそちらに向くが、消防団員は気にせずに言葉を続ける。

「同じ女子高生だったら、説得できるはずだっ！」

なんだか訳の分からない理屈でごねる消防団員。

しかし、最前列にいたのが運の尽き、結局人の良いみーなはそれを受けることになってしまった。

しかし、消防団員は知らなかったのだ。彼女には、まったくと言っていいほど恋愛沙汰には興味がないと言うことを……。

「まったく、なんで私が……」

ブツブツと怒りを露わにして、ビルの階段を上るみーな。

恋愛沙汰への興味の薄さ、それが今の行動に現れているのかも知れない。しかし、その恋愛沙汰のために階段を上っていると思うと、自然と腹も立ってくる。

ただ、このデパートにはエレベーターもあったのだが、彼女はそれに気付かず階段を上っているのだ。

流石に、1年以上も自転車通学をした身。足腰は強いらしく、あっさり屋上までたどり着く、が。

チーン

彼女の目の前で、下から上がってきたエレベーターのドアが開く。

「……………」

彼女はやるせない気分になった。

急いで階段を上ってきたのに、なんだこの上下する箱状のは？ 科学のバカー！

と思いつつ、屋上へのドアへと手をかける。

キィ

錆びたちょうつがいの音と共に開く扉。

そこで、みーなの目に飛び込んできた光景は、一人の女性が自殺しようとしている姿であった。消防団員に言われたとおり、その女性はみーなと同じように女子高生であった。ただ、制服から見て学校は違う。みーなの通う学校とは天と地ほどの差がある、進学校の制服であった。

「な、なんなのっ？ 来ないでっ！」

みーなの存在に気がついたその女性は、彼女に向かって叫ぶ。

どうやら、みーなの存在が余計に動揺を生み出してしまったようだ。

「あ、あのですね……」

それでも、みーなは説得に励もうとする。が

「来ないでっ！ 来たら飛び降りるわよっ！」

「あ、その……、行かなくても落ちるつもりじゃ……？」

「そうよっ！ 自殺するんだから当然でしょっ！」

妙に強気なその女性に、みーなはどうしていいのかわからなくなり、とりあえず近づく。

「来ないでって言うてるでしょ！」

どっちにしろ落ちるんだから。と、思いつつ、みーなは叫びを無視して彼女の目前までたどり着く。

その次の瞬間。

「わあっ？」

彼女の目は点になった。

自殺しようとした女性の足が滑り、そのまま下へと落ちていく。

女性もとっさに近くにあったものに捕まるが……。それは、みーなの足だった。

「ちょ……………」

当然、みーなも一緒になって落ちていく……。

『きゃあ〜！』

落ちていく二人は悲鳴を上げる、だが、そこでみーなの意識が途切れた。

* * *

「……………いな……………」

声が聞こえる。

「……いなちゃん……」

目の前は真っ暗だった。

暗闇の中、声だけが響く。

「みーなちゃん、食べちゃうわよ〜」

えっ？ 何をっ？

次の瞬間、バツと勢いよくみーなは起きあがった。

明かりが目差し込む、だけど、それほど眩しくない。むしろ、目の方が意図的に必要以上の光量を抑えている感じであった。

周囲を見渡すと、そこには東海林家の長女・次女、望と光がそこに立っている。さらによくその場を見ると、そこは東海林望の研究室、その場であった。

そして、望は起きあがったみーなに微笑みかけて。

「おはよう」

と、一言。

だが、みーなは周りの光景に混乱するばかり。

デパートの屋上から落ちたはずなのに。ひょっとして、消防団員の人に救われた？ だけど、なんで望さんと光さんがいるの？ でもでも、アレって夢かもしれない。

そんな、混乱するみーなの思考を払拭するように、望が口を開く。

「みーなちゃん、混乱しないでよく聞いて。さっき、みーなちゃんは駅前のデパートから、もう

一人の女の子と共に落ちたのよ」

ええっ、やっぱりっ？ と言った表情をするみーな。

それに対し、表情を変えずに望はさらに言葉が続ける。

「それで、もう一人の女の子は消防隊のマットの上に落ちて無傷だったわ。だけど……」

だけど……、私は何でここにいるの？ 生きてるじゃない？

ますます混乱するみーな。

そして、望は神妙な面持ちで。

「もう、そのまま地面に激突して、もうボロボロで助からない状態だったわ。偶然、そこに通りかかった私は考えたの……。昨日の夜、完成したての私のサイボーグ技術で、みーなちゃんの命を救おうとして……。ゴメンね……。勝手にみーなちゃんを、機械の身体にしちゃって……」

悲痛な表情で告白する望。

だけど、みーなは数秒考えた後、にっこりと微笑んで。

「い、いいんですよ。望さんのおかげで、今こうして私は話していただけるんですから」

望を許す許さないのとか言うこと以前に、みーなは事実が分かってホッとしていた。

サイボーグになったのなら、なんとなく話が通るし。そう言う生活もまた楽しいかなー……。なんて、彼女は考えていた。

基本的には、楽観的なのだ。あくまでも、基本的にだが。

「ありがとう、みーなちゃん。こうなっちゃったからには、私達がちゃんと面倒見て上げるからね。ね、光」

望の問いかけに、傍らに立っている光がこっくり頷く。

そして、続けて口を開く。

「その髪の色もお似合いですわよ」

と、にっこり微笑む。

「あ……」

その時、はじめてみーなは気がついたのだ。自分の髪の色が変わっていることを。今まで一度も染めたことのない黒い髪から、光に反射するほど鮮やかな銀色の髪へと。

色が変わった自分の髪を手にとって、まじまじと眺めるみーな。

と、そこに。

「オイオイ、望姉貴に光姉貴。さっきからドアのところで聞いてたら、モノは言いようだなあ」

音も立てずにそこへ入ってきたのは、東海林家の末女、木霊だった。

「――！」

その姿に、ビクッとする望と光。

「みーな姉貴を連れて帰ってきたとき、『実験台を手に入れた～♪』とか歌ってたんじゃねえか？ それを、光姉貴は一緒になって喜んでたろ？」

「ええーっ？」

木霊の言葉に、みーなは驚愕の表情を表す。

しかし、木霊はさらに言葉が続ける。

「それもなあ、命が危ないどころか、消防団のマットに落ちたあとに、ちょっとマットからずり落ちて、膝をすりむいた程度の怪我しかしてなかったじゃねえか、なーにが、命を救おうとして、だ」

「ど、どういうこと……、望さん」

みーなは、訴えようと望のほうを向く。

が、既に望と光はその場から逃げ去っていた。ただ、机の上のノートに「ゴメンね～」と、殴り書きの文字で書き残して。

「……………何かと大変だな、みーな姉貴」

ベッドの上で半身起きあがったままのみーなの肩をポンと叩き、言葉を投げかける木霊。

なんとなく、彼女は今後の自分と隣に住む人々に不安を隠せなくなってきた。

サイボーグみーなの誕生と共に、その日も日が暮れていく……

* * *

「な、何なのこれはあーっ！」

翌朝、みーなの叫びが埼玉中に響き渡る……、はずが無く、ご近所三件両隣に響き渡る程度にとどまる。

だが、うるさいことは事実。

「どうしたんですの？」

窓が開き、なにくわぬ顔で光が覗き込む。

隣に住んでいるせいか、みーなの部屋と光の部屋は、窓2枚しか隙間がないのだ。その気になれば、部屋と部屋を直接行ったり来たりすることも出来る。

「こ……、これ……」

みーなは窓から覗き込む光に、新聞の地方欄を見せる。

「んー、えーっと。埼玉県議会選挙、本日公示……」

「違う～、こっち」

「あ、ごめんね。えっと……、川口のデパートから高校生転落、地元の高校生、宇崎みーなさん、括弧じゅうなな括弧とじ、が死亡。……みーなさん、死んでますわね」

「その……、括弧とか言わないでも……。でも、そうなんですよっ！」

熱くなるみーなに、光は落ち着きを払って。

「そりゃ、昨日死亡届を提出しましたから、何ら不思議な事じゃありませんわ」

「え……？」

「間違えなく、私が提出しましたわ。流石に姉さんの科学者としての肩書きを使ったら、あっさり受理されたようですね」

特に深い意味もなく、さわやかに微笑む光。それとは対象にずーんと沈むみーな。

「ど、どおりで、昨日証券会社の人 came とき、あの営業マン、幽霊でも見る顔をしていたんだわ……」

「わ、わざわざ対応したんですの……？ あ、これ、お姉さまから預かってますわ」

光は一冊の大学ノートを取り出し、みーなに手渡す。表紙にはミミズがのたうち回っているような文字で「取扱説明書」と書かれていた。

「これ……？」

「取扱説明書ですわ、みーなさんの」

不思議そうな顔をするみーなに、光はにこっと微笑む。

「ふ、ふーん……」

自分の説明書なんて不思議な感じもしたが、改造された以上、知っておかなきゃならない知識ではあるので、みーなは不思議そうにペラペラとめくってみる。表紙同様、汚い文字が羅列されていた。

そして、一つのページに目が止まり、ぷるぷる震え出す。

「どうしたんですの？」

「ねえ……、光さん……」

「なんですか？」

「ロケットパンチって何ですかあ～っ？」

泣きそうな声でみーなは叫んだ。

そんな彼女に、光は一つため息をついて。

「みーなちゃん、ロケットパンチを知らないんですの？」

「いや、知ってますけどお……。何で、そんなのが私についてるんですかあ？」

「お姉さまは言いましたわ『ロケットパンチは男のロマン』だと……」

すでに、みーなには「望さんって女性ですよね……」などと聞く気力も残っていなかった。

「ところで、朝食一緒にどうです？」

「んで……、証券会社の人逃げたんだって？」

パンをもぐもぐさせながら、望は言う。

いつも通りの東海林家の食卓。だけど、先日のお詫びの意を込めて、今日の食卓にはみーなも誘われていた。

先日のことがあるというのに、臆面もなく姿を現し、何事もなかったかのように挨拶する望に、みーなは責める気にもなれないでいたのだ。

「みーなちゃんが言うにはらしいんですわよ、ねえ、みーなちゃん」

光の言葉に、みーなはイチゴジャムをたっぷり塗ったトーストを含みながらこっくりと頷く。

「んな事よりよお、サイボーグって機械の身体なんだろ？ だったら、パンなんか食べてて大丈夫なのかよ？ すっかり忘れてて、普通に食事つくっちゃったけどよ」

そう口に出したのは三女の木霊。東海林家の食事は、総じて彼女が作っている。小学生ながら、その調理技術は主婦並だ。

「その点は心配いらないわよ」

望は立ち上がり、自信満々に口を開く。

「みーなちゃん、脳だけは生身だからね」

「だけは余計です……」

みーなのツッコミを無視して、望はさらに続ける。

「だから、ちゃんと食事をとって、脳に栄養を回さないとならないのよ、わかる？」

そして、望はみーなを指さし。

「あと、1週間に1回、充電ね」

「はい？ 充電……ですかあ？」

怪訝そうな顔で言うみーな。私は携帯電話？ なんて考えてみたりもする。

「そうよ、1週間に1回、必ず私の所に来てね」

にこっと言う望。そして、一呼吸置いて。

「それはそうと……、さっきの話なんだけど、証券会社の人 came たって本当？」

「ええ、本当ですよ」

トーストをコーヒー牛乳で流し込みつつ、みーなは答える。

だが、その答えに、望の顔つきが神妙になり。

「まずいわね……」

「俺の飯がまずいだとーっ？」

「木霊のことじゃないわよ……」

包丁をテーブルに突き刺し激怒する木霊をあしらい、望は続ける。

「その、証券会社の人……、もしかしたら」

『もしかしたら？』

3人の声がハモる。

「悪の秘密結社の構成員かも」

「そんなわけあるかあっ！」

スマッシュ気味に放たれた木霊のフライパンが、望を大きく吹っ飛ばした。

「なにすんのよっ！ 木霊っ！」

「やかましいっ！ その妄想癖をどうにかしろっ！ バカ姉貴！」

起きあがった望はそのまま木霊に飛びつき、乱闘になる。

二十代の大人が小学生相手に互角に戦っている様子に、みーなはただただ啞然とするばかりだった。

「ごめんね、慌ただしくなっちゃって」

「う、ううん。いいですよ、楽しかったですし」

玄関先。謝る光にみーなは頭を下げる。

ちなみに、望と木霊は未だ取っ組み合いを続けている。時たま、奥の方から絶叫や雄叫びが聞こえる。

こうなると、2時間ぐらいケンカが続く。と、いつも見ている光は言う。

「ところで、みーなちゃんは今日はどうするの？」

「うーん……。もう、学校に籍はないし、これを読んで、そこら辺をブラブラとしようかな...と」

と、言いつつ、自分の取扱説明書をパタパタさせる。

その言葉に、光は。

「それがいいですわね」

と、にっこりと微笑み、家に戻るみーなを見送った。

「さて……。そろそろ止めないと、死人がでますわね」

ふすまを包丁が貫通したのを見て、潮時と感じたのか、ケンカを止めるべく、戦場へと彼女は戻っていった。

* * *

窓もなく、昼間だというのに光が射し込まない薄暗い部屋。そこに、二つの人影が存在していた。

「なに……。それは真実か？」

その部屋の奥にある、革製の椅子に座った人物が低い声で言う。

いかにも押し殺したような声、そして夏も近いというのに纏った黒いローブ。それはまさに黒幕と言ったような感じである。

「はっ！ 左様でございます」

黒幕っぽい者の声に、その椅子の前に立っている人物が答える。こちらの声は、押し殺すようなこともなく通常の若者の声だ。

状況からして、彼が黒幕っぽい者の部下なのであろう。

「むう……。これは、ひょっとしたら……」

腕を組み黒いローブの男がうなる。

「どこかの科学者が、我が組織の野望を挫くために生み出したサイボーグかもしれんぞ」

ンなわけあるかい。と、青年は思った。だが、立場上声に出しては言えない。

そんな不幸な立場の彼は、ただ頷くことしかできなかった。

そして、黒いフードを翻し、黒幕っぽい男は立ち上がり、バツと外（とは言っても、窓はないから外の方角と思われる方向）を指さし。

「さあ、我が組織の陰謀が明るみになる前に、そのサイボーグを消してくるのだっ！」

こんな事、話さなきゃよかった。そう考えてもあとの祭り。彼の上司と思われる黒いフードの男はもう自分の考えを信じ切っていた。

「返事はっ！」

「はい……」

嫌々ながらに返事をする。返事にはまったくやる気が感じられない。

その態度に、男は気付いたのか。

「うむ。しかし、お前だけでは心もとない、戦闘員を与えよう」

と、言い、右手をサッと挙げる。

「ヒー！ ヒー！ ヒー！」

それと共に、奇声を上げながら彼の回りに黒い全身タイツを着た男達が現れる。

見た感じからして、彼等が戦闘員のようだ。ただ、戦闘員と言うには、あまりにもひ弱そうである。どう見てもただのアルバイトのようだった。

中には、中年太りが全身タイツで明らかになっているのもまでいる始末。

しかし、それでも青年にとっては不幸きわまりないことであった。

指令を受けたとは言え、このまま無かったことにして、早く家に帰ってナイター中継を見よう。と、言う、彼の計画に監視が付くことになったからだ。

「はあ……」

青年は、考えた挙げ句ため息を付く。

「気を落とさないでください、主任。所詮、我らは雇われの身ですから……」

慰めるように、近くの黒服の男が慰めるように声をかけた。どうやら、青年の地位は主任らしい。

そして彼等は、「とりあえず仕事だから」、とすることで、与えられた命令を全うしに移動することにした。

* * *

「おねがいしまーす！ おねがいしまーす！ おねがいしまーす！」

街をにぎわすサンプリング。男女問わず配られる消費者金融のティッシュペーパー。にぎやかな街であった。

そこは、みーなの地元の川口ではなく、電車で十数分の埼玉最大の街、さいたま市大宮である。

「全く、すれ違う人なんか気にしないね。この街」

配られたポケットティッシュを手に、みーなは呟いた。

新しい身体に慣れようと、わざわざ電車に乗って来たものの、特に変わった様子のない街並にどうして良いものか考えていた。

そもそも、死者扱いだから顔がばれないように、と、違う街に来たのが考えすぎだった。横切る人々は全然相手の顔を見ようとしめない。

これでは、先日の新聞に載った顔（地方欄限定・さらに髪の色違い）も形無しだ。

ただただ、消費者金融のティッシュペーパーやコンタクトレンズの広告ばかりが集まってくる。

と、そこに。

「そこの君っ！」

待ちに待ったのかどうか知らないが、とうとう声をかけられた。

「は～い」

意気揚々に振り向くみーな。やっと、自分のことに気付いてくれたかと思うと、彼女の声も自然と弾む。

だが、振り向いた彼女に待っていたのは。。

「ヒー！ ヒー！」

「はいっ？」

奇声を上げながら、いかにも謎の組織の戦闘員と言った感じの、全身黒タイツの軍団が彼女を取り囲んでいく。

啞然とするみーな。だが、黒タイツ軍団は集団でみーなの身体を持ち上げて……。

「重たっ！」

組体操の最後のように、黒タイツ軍団はみーなの身体に押しつぶされた。

一応サイボーグであるみーな、その重さは結構なもの。170センチ強の身長に、ちょっとした巨漢力士並の重さがあるのだ。普通の女子高生と思って持ち上げようとするれば、こうなるのは自明の理。

「重いぞっ！ スゲー重いぞっ！」

「みんなで持ち上げるぞっ！」

みーなの耳に聞こえてくる、黒タイツ軍団の相談する声。さすがにその反応に。

「ちょっとちょっと、いくらなんでも失礼じゃないのっ！」

押しつぶしている側のみーなが非難の声を上げる。

そして。

「いっせーの一せっ！」

かけ声一発、みーなの身体が今度こそ持ち上がる。

もう、一部の黒タイツは足もガクガクして、やっとの事で持ち上がっている様子だ。

「ヒー！ ヒー！ ひい～！」

奇声も既に青色吐息。それでも、見せしめのように担いで周囲を回る。その光景に、周囲からは心配するような声やざわめきが起きる。

しかし、そんな中。

「大丈夫か？」

「重たいっす、先輩」

「頑張れっ！ 時給千円の為だっ！」

黒タイツ達のささやき声が、みーなの耳に入ってくる。

周囲から見れば、悪の軍団にさらわれてる少女と言った感じだが。黒タイツのささやき声に、彼女はちょっと憚然とした表情を見せる、その時だった。

「さぁ！ 突然の悪の軍団にさらわれてしまったいたいけな少女！ 一体彼女はこれからどうなってしまうのかっ」

突然どこからともなく現れる、マイクをもった一人の女性。どこことなく、子供っぽい格好をしているが、彼女の登場に、周囲にいた人々……特に子供は大いに盛り上がる。

もう、何が何だかみーなの頭では理解できなくなってきた、彼女の表情はさらなる困惑に包まれる。

「さあ、こういうときは、どうするのかなあ？ そう、みんなで呼ぼうっ！」

彼女は、いかにも手慣れている様子で子供達の方にマイクを向ける。それと同時に。

『サイタマンッ！』

元気のいい子供達の声が、大宮の空に響き渡った。

その瞬間。

「へっ？」

みーなの目が点になった。

近くに駐車してあったワゴン車から、勢いよく奇抜な格好をした人物が現れたのだ。

それは、エメラルドグリーンやピンクを基調とした派手な服、真っ赤なブーツ、背中には幾本かのネギ、肘と膝には堅そうな煎餅。そして、顔にはデフォルメした太陽のような仮面を被っていた。

「変態だわ……、変態」

見たままの感想を言うサイボーグ少女。

しかし、周囲の子供達の反応は、彼女とは違っていた。

「格好いいー！」

「すてきー！」

「頑張れ、サイタマン！」

次々に上がる子供達の大歓声。そして、マイクをもった女性が子供達の前に立ち。

「さあ、正義の味方サイタマンが来てくれたから、もう大丈夫。みんなでサイタマンを応援しよう！」

問いかけるように喋る女性。

その時、みーなは感づいた。これは、少年少女向けのヒーローアトラクションである、と言うことを。

「埼玉を悪に染める、ブラック埼玉団め。このサイタマンが成敗してくれるっ！ さあ、その少女を離せっ！」

ビシッと黒タイツの集団を指さして言う変態……いや、サイタマン。

それにしても、埼玉県だからサイタマンはないだろ。今時の子供は、こんなので喜ぶのか？ そんな思考がみーなの頭をよぎる。そういう自分も3流のSFのように気がつけばサイボーグになっていた、なんて言うにも関わらずにだ。

そんなことを考えているうちに、みーなの身体は地面に下ろされ、黒タイツの集団とサイタマンが戦い始めた。

重たいみーなの身体を持つことから解放された集団は、異様に軽い動きをしながらサイタマンを取り囲む。そして。

「浦和パンチ！」

謎な技名を叫びながら、お世辞にも強そうとは言えないサイタマンのパンチが黒タイツの一人

を吹っ飛ばす。と、言うより、勝手に吹っ飛んだ。

「大宮チョープ！ 与野キーク！」

次々と繰り出される弱そうな攻撃。

それでも吹っ飛ぶ黒タイツ。まさにお約束通りの展開とは、こういうモノなのであろうか。そんな中、黒タイツのリーダー格が。

「そこまでだ、サイタマンっ！」

「へっ？」

一人、話についていけず取り残されていたみーなの首もとに、ナイフを突きつける。

いかにもおもちゃのナイフだが、それでも周囲の子供達は盛り上がる。

「この娘の命が惜しければ、大人しくするんだっ！」

「くうっ！」

人質を取られ、うめき声を上げるサイタマン。格好が格好であるせいか、あまり絵になっていない。

「さあ、ネギを捨てろ」

「し、仕方あるまい……」

何だか訳の分からない要求に、渋々とサイタマンが従おうとした、その時。

「やめてー！」

「ガンバレー！」

「負けるなー！」

悲鳴のような声で騒ぎ出す子供達。

その声に、ぷるぷると震えるサイタマン。応援してくれる子供達の声を背に、ネギをぎゅっと握りしめる。いよいよクライマックスと言ったところであろう。

みーなも、ここでなんかしら言うておけば格好が付いたんだろうが、特に何も思い浮かばないせいか、黙々と状況を見守っていた。ただ、首筋にはナイフ（おもちゃ）を突きつけられているが。

「さあ、どうした、サイタマン。早くネギを捨てろっ！ さもなくば、この少女の命はないぞ！」

強い口調で迫る黒タイツ。だが。

「許せ、少女よ……。正義のためには、多少の犠牲も仕方がないのだっ！」

「はあっ？」

サイタマンの言葉に疑問符を投げつけたのは、他でもない、みーなだった。

「ちょっと、正義の味方でしょっ！ 私の命を尊重しなさいよっ！ その、なんだ解らないネギをそこに捨てれば私の命を助けてくれる、って言ってるんだから！」

そんなことは言っていない。そう言いたげな黒タイツの表情をよそに、みーなはさらに続ける。

「だいたい、私の命なんてどうでも良いってわけっ？ そりゃ、確かに今の私の命は、拾ったようなものだけど、仮にも正義の味方なんだから、せめて表だけでも私を助けようとしなさい

いよっ！」

黒タイトの腕をふりほどき、みーなはサイタマンの方へと迫る。

「お、オイ、こら……」

みーなの腕を掴もうとする黒タイト、その瞬間。

「うわっ？」

宙を舞う黒タイト。

掴もうとしたところを、逆に掴み返されそのまま投げられたのだ。それも、プロレスでよくある、腕だけを取って投げる、アームホイップで。

「邪魔しないでよっ！」

「は、はい……」

みーなの一喝に、黙り込む黒タイト。

そして、彼女はサイタマンの真っ正面まで来て。

「いいことっ！ 仮にもヒーローなら、犠牲無しにして解決しようって事をもっと模索するべきよ、わかっているのっ？」

「は、はい」

「そもそも、ヒーローってのは……」

その場にサイタマンを正座させて、長々と説教をはじめめるセーラー服を着た銀髪の少女。

周囲にいた子供達は、啞然とした顔でそれを見つめていた。自分たちのヒーローであったサイタマンが、さっきまで捕らわれていた少女に何故か説教を喰らっているのだ。いろいろな意味でショックであろう。

しかしながら、場所は大宮駅前。こんな事をしていれば。

「警察だっ！ 道を開けろっ！」

当然のごとく、制服を着た警官達はその場になだれ込んできて、いともあっさりとみーなの身柄が確保されていった。

「ちょ、ちょっとっ？ 私も逮捕されちゃうのっ？」

批判の声も虚しく、みーなは護送車に乗せられて、警察の方へと連れて行かれた。

* * *

警察署にある牢獄。そんな中で、みーなは不機嫌だった。

「帰ったら、絶対新聞に投書してやるんだから……」

と、先程からぶつぶつと不満不平を言う始末。こんな状況であるから、機嫌がいい道理もないのだが、ここまで来ると機嫌が悪いを通り越して、いつ暴れ出してもおかしくない状況だ。

その原因に、一緒に連行されてきたサイタマン（他数名）の存在が一役買っている。

どう考えても、見た目は向こうの方が怪しいはずなのに、ちょっとした取り調べのあと、すぐに釈放されていったのだ。

「なんで、あんな怪しいのが先に釈放されて、私だけは釈放されないのよっ！」

バキッ！

彼女は、勢いよく壁を殴りつける。

「なんでっ！　なんでっ！　なんでよっ！」

バキッ！　バキッ！　バキッ！

サイボーグゆえに痛みを感じないのか、言葉にあわせて拳を叩き付ける。

そして、次の瞬間。

「なんでっ！」

ボキッ！

牢獄に響く鈍い音。その音に、みーなはふと音の出元を見る。

「えええーっ？」

今度は、絶叫がそこに響き渡った。

今し方、壁を叩いた彼女の右手が、手首の辺りからぱっくりと折れていたのだ。骨折のように、手首があらぬ方向に曲がっているわけではない、掛け値なしに手首の部分が折れていたのだ。

折れた部分からは、フレームや配線など、壊れて痛々しい機械がむき出しになっている。

「こんな脆いのっ！　私の身体っ？」

みーなは驚きの声を上げる。

そして、壁に向かってこの体を作った望に対して一通りの悪口を言い放ち、近くにあるベッドに腰をかける。

「でも、どうしようかな……。ホント」

ため息混じりの声には、少しだけ不安も混ざっていた。

自分はここに存在しているとは言え、死亡届まで出されていて、戸籍上は存在していない今の状態。ひょっとしたら、このまま本当に抹殺されてしまうんじゃないかと不安になるのも仕方がないこと。

「望さん……、迎えに来てくれるかなあ……」

鉄格子を見つめながら呟いた、その瞬間。

ガラガラガラッ！

「っ？」

先程、彼女が叩いていた壁が、音を立てて崩れたのだ。

サイボーグである彼女がボコボコ叩いた上に、長年使われてきて老朽化していたのが重なり、もろくも壁は崩れ去ったのだ。いくら機械の身体でも、ここまで力が出るモノなのだろうか。

そんなことを考えているのか、みーなは目をパチクリとさせて。

「ラッキー！」

そんなことは一切考えていなかった。

彼女には、どうも楽天的なところがあるのだった。

これ幸いとばかりに、残骸だけとなった壁を通過する。が……。

「……………何よ、これ」

壁の穴を抜けると、そこは隣の牢屋だった。

牢屋の横の壁を砕いたところで、隣の牢屋に出ることは当然。それ以前に、まさか崩れるとも思っていなかった彼女である。期待は一気に冷めていった。

大きくため息を付き、崩れた瓦礫の上に腰をかけるみーな。

その時だった。

「なんじゃ、騒がしいのお〜」

低い老人の声に、彼女はキョロキョロと辺りを見渡す。

「ここじゃよ、ここ。そこの若いの」

声は、隣の部屋のベッドから響いた。

みーなは、自分の空けた穴を通して、隣の部屋のベッドにと向かう。

「おお、よお来たの、若いの」

そこには、枯れ木のようにやせ細った老人が寝転がっていた。

みーなの姿が女性と確認するやいなや、歓迎の意を見せるように手招きをする。

「ワシはなあ、この牢屋に三十年暮らしておるのじゃ」

聞かれもしないことをいきなり話し出す老人。

年寄り特有の事ではあるが、突然話されたみーなは、ただただうんうんと頷くことしかできない。

「ワシは息子にも先立たれてのお、身寄りがいいからここの警察にやっかいになっておるのじゃ。そもそも、ワシがここの署員と知り合ったのは……」

延々と語り出す老人。

みーなはつまらなさそうな顔でそれを見る。でも、茶々を入れようとはしない。長年住んでいるんだから、ここから出る方法をひょっとしたら知っているかも知れない、そういう一抹の望みに、彼女はかけてみたのだ。

そして、話はクライマックスを越えて。

「と、言った訳じゃ……」

「うんうん」

「さて、これで話は終わりじゃ。ワシは寝るとするかのぉ〜」

「ちょっと待てーっ！」

みーなは、再びベッドに潜り込もうとする老人を引っ張り出す。

「何じゃ、年寄りは夜が早いんじゃから……」

「ここの抜け道とか教えてくれるんじゃないのーっ！」

「誰がそんなことを言ったのじゃ？ ワシは昔話をしただけじゃよ」

「そんなの詐欺よっ！ イカサマよっ！ 憲法違反だわーっ！」

期待を裏切られたた反動からか、老人の言っていることは正しいのにキヤーキヤーと騒ぎ出すみーな。ここまで来ると、ワガママ以外の何物でもない。

「ほら、今ならまだ間に合うわよっ！ 言いなさいっ！ 出口を言いなさいよーっ！」

敬老精神はどこへやら。老人の首根っこを捕まえて、ブンブンと振り回す。

「そ、そんなことを言われたってのお〜。知らぬモノは知らぬのじゃ」

「そんなの知ったこっちゃないわよっ！ ほら、早くこの辺に出口を出しなさいよっ！」

「いや、そのな……」

あまりにガクガク振られたせいか、目を回し、白目をむいた老人はそのままベッドに倒れ込む。

「全く、役に立たないわねえ……」

まるで悪役のようなセリフを吐き、壊れて鉄のフレームが飛びだしている方の手で椅子をたぐり寄せ。

「迎えに来ないなあ……。やっぱり忘れていたのかなあ」

しみじみと鉄格子付きの窓から空を見上げる。空には燦々と輝く太陽。だが、みーなには、その太陽はサイタマンの顔以外の何者にも見えなかった。そして、彼女の中でのイライラはさらにつもり。

「ああ、もうっ！ サイタマンのバカーっ！ ついでに迎えに来ない望さんのもっとバカーっ……………いたっ！」

突然飛んできたスパナに頭をぶつけ、思わず声を上げるみーな。

サイボーグに改造されてから痛みという痛みは感じないのだが、とりあえず反射的に言ってしまったのだろう。

そして、スパナが飛んできた方を見ると、一人の人影があった。それは、みーながよく知った顔……。

「誰が、もっとバカですってえ～」

「の、望さあん～」

やっと来てくれた。そんな感情が彼女を涙目にさせる。

「誰がバカですってえ～。この、バカたれがあっ！」

「あ、あのお……」

感動の再開シーンをやるはずだったのが、どうも雲行きが妖しい。

望は、目の前に落ちていた警棒を拾って。

「このっ！ 誰のおかげで今日があると思ってるのよっ！ それなのに、バカとはなによっ！」

「わわわっ！ そんな、警棒を振り回さないでっ！」

「取り消しなさいっ！ 取り消しなさいよっ！ 私は天才よっ！」

「ごめんなさいっ！ ごめんなさい～っ！」

部屋のベッドに頭を埋め、必死にみーなは謝り倒す。

「わかればよろし」

「早っ！」

「ほら、驚いてないで。今、鍵開けるから……」

そう言って、望は懐から針金を二本出す。

まさか、これで開けるつもりなのだろうか？

「少し、黙ってなさいね。手元が狂うから」

「は、はい……」

しばらく望は2本の針金で鍵穴と格闘し……。

カチャン

「うわっ！」

響く錠の音とみーなの声。そして錆び付いた音と共に開く牢獄の扉。

その瞬間だった。

「おおおー、光じゃーっ！」

ものすごい勢いでベッドから飛び出すさっきの老人。老齢とは思えないスピードで、みーなの横をすり抜ける。

そのまま、老人は開いた牢獄から飛び出す……が。

「呼びましたか〜？」

突然響いた声と共に、老人は足払いをかけられその場に転倒した。

地に這った彼が見上げる先には、ヨーロッパ風のドレスに身を包んだ一人の少女の姿。東海林光である。

確かに、老人は光とは言ったが、きっとそれじゃないだろう。

「とりあえず、貴方はダメですわ。関係ないですもの」

と、光は老人を力づくで牢屋にと押し戻す。

華奢な体つきからは想像も出来ないほどの力で。

そして、彼女は突然の老人の動きでいまだ腰を抜かしているみーなに。

「みーなちゃん、なんでこんなところに居るんですの？」

「そんなの、私が聞きたいですよー。気が付いたらここに連れてこられたんですよー、なんか」

困った顔で身振り手振りを交えて説明しようとするみーな。だが。

「あー、もう大体解ったわ」

説明する前に、望が口を挟む。

「みーなちゃんが言いたいことはこうでしょ。私の開発したサイボーグの秘密を暴こうと思った国家権力に連れさらわれて、ここに連れてこられた、って」

「いえ、思いっきり違います」

反射的に答えるみーな。

だが、その言葉に望は不服そうな顔をして。

「随分はっきりと言ってくれるわね……。お姉ちゃん、ちょっと傷つくなー」

「あわわ、ゴメンナサイゴメンナサイ！」

思わずみーなはその場で謝る。

そんな彼女の後ろから。

「いつものことですから、気にしないでくださいませし」

と、光。

彼女はそのまま続けて。

「さあ、お姉さまにみーなちゃん、早く帰りましょうか」

「あ、はい」

「しょうがないわねえ……」

錠を開けた針金をしまいながら望が立ち上がる、その瞬間だった。

「脱獄じゃーっ！」

『——っ？』

突然響いたその声に、まるで電気でも流されたようにビクッと反応する3人。

そして、望はその声の主——さっき光が転ばせた老人に向かって睨み付ける。

「この……」

「へへん、ワシが出れないと解ったら、一蓮托生じゃわい」

と、老人は意地悪そうな笑みを浮かべた。

だが、それがプライドの高い望に障った。

「みーなちゃん……。確か、格闘技好きだったよね……？」

「あ、はい、好きですけど……。それが何か？」

「改造手術した際に、少しは運動神経ってモノをよくしてあるから、このご老体に好きな技をかけてあげなさい」

優しい口調で酷いことをサラッという。

普通なら止めるはずの光もニコニコとしながらその光景を見守るだけ。いつも通りと言えはいつも通りだが、その笑顔もどことなく引きつっている。

そして、当のみーなは。

「よーし、私頑張っちゃうぞー」

壊れていない左手をブンブン振り回して、老人の方に近づく。笑顔なのが余計に恐怖をます。

「こ、これっ！ お前等には敬老精神というものは無いのかっ？」

「そんなモノは、当の昔に生ゴミといっしょに出しちゃったわ」

にこやかに微笑む望。

その笑みは、光と違って邪悪さに満ちあふれている。今にもみーなを差し向けようとした、その時。

「脱獄者だーっ！」

「ちい、気付かれたわよっ！」

一つしかない入り口から、怒濤のように流れ込んでくる警察官。その数おおよそ三十。そして、その中のリーダーと思しき警官が前に出て。

「貴様等かっ！ 脱獄しようとした奴はっ？」

上から見下すような口調で言い放つ。

だが。そんな警察官の前に、光が立ちはだかり。

「いえ、私たちは面会にただけで、このお爺さんが針金で牢を開けていましたわ」

「お、おい……。わ、ワシは……」

にこやかにいう光、それに反応する老人。

端から見れば、牢屋の外に落ち着いた少女と慌てふためく老人。他人の目から見たらどちらが怪しいか一目瞭然。いや、それ以前に妙齢の美女にそういわれたら、警官だって男である、どっ

ちの味方をするかはそれは欲望のままに動くものである。

そして、男性の警察官達はがしっと老人を取り押さえ。

「脱獄しようとはふてえ野郎だ！ さあ、こっち来いっ！」

「こ、こら、ワシは通報しようとしただけ……」

「ええい、黙れっ！ あんな可愛い娘に罪を着せようとは……」

あっさりとそれを取調室の方にと連れて行く。

見た目の印象というのは、非常に怖い物である。

「さ、帰りましょうか」

みーなと望の方に振り向いて、にこやかに微笑む光。

虫も殺さないような顔をしておきながら、実は相当のやり手であった。

* * *

「お姉さま、このまま家に帰るんですの？」

光が怪訝そうに口に出す。

一応警察からは無事に脱出した三人、あとは家に帰るだけと言うことで、車に乗り込んで発車はした。だが、ハンドルを握った光の表情は、いつもと違って少し険しい。

その原因は、時折サイドミラーやバックミラーに映る、不審な軽自動車のせいだ。

妹の言葉に、助手席に座る姉もため息一つ付き

「そうね……、どうやら追われているようだし……」

と、言葉を紡ぐ。

ただ、後部座席に座るみーなは、望の言葉で後ろを振り向いて、やっと不審な車に気が付いたようである。

彼女らの乗る乗用車に、ピッタリ付けてくる不審な車。さらに、中に乗っているのは揃いの黒服の男達。怪しいと思わない方が不思議である。

鏡で見える不振な車に、望は。

「光……、まくわよ」

「承知しましたわ、お姉さま」

光はクラッチを踏み込み、一気にギアとスピードをを上げて振り切る……はずだったが。

プスン……………、ガタンッ！

軽い音をたてて、車はその場に停止する。

エンストである。

「あら、止まっちゃいましたわね」

持ち前の、おっとりとした口調で光は口に出した。多少険しい顔をしていても、多少やり手の性格だとしても、この落ち着きっぷりは天然のようである。

しかし、その全然焦りのない様子に、望は。

「止まったじゃないでしょー！ 追いついちゃうじゃないのよっ！ これだからオートマ車のほ

うが良いって言ったのよー！」

叫び、足を振り上げてハンドルを蹴る。だが、そんなことしても車は動くはずもなく。

「うわっ！ ぶつかるっ！」

みーなは叫ぶ。そして……。

ドガッ！

彼女たちが乗るワゴン車は、後ろから追いかけてきた車に、カマを掘られたのだった。

車全体に大きな衝撃が走る。それでも。

「逃げるわよっ！」

とっさに、望はドアを開け、指示を出す。

それに、二人は何も言わずに従う。だが。

「ヒー！ ヒー！ ヒー！」

後ろの車から、カラムーチョでも食ったような奇声を上げつつ、覆面をした黒服の男達が現れる。

それも、意味もなく側転やバク宙をしながら。

まさに、基本的な戦闘員の登場の仕方であった。

数時間前にも似たようなのを見たみーなは、嫌そうな顔をして光の後ろにと隠れる。

「ヒー！ ヒー！」

奇声を上げながら迫ってくる黒服。だが。

ごきっ

鈍い音が響いた。

基本的な戦闘員の登場をしようとした黒服の一人が、側転の際に手を滑らし、頭からアスファルトの地面に激突してしまった。

そして、そのまま動かなくなる……。

「ああっ！ 鈴木っ！」

「大丈夫かっ？ 傷は浅いぞっ！」

「あれだけ練習では上手くいったというのに……、流石に、マットとアスファルトでは要領が違ったかあ……」

黒服の人達が、その側転を失敗した男に集まり、思い思いに言葉を投げかける。

「……………な、なんなの？ この人達……？」

流石に、目まぐるしく起きる出来事に耐えられなくなったのか、呟くみーな。

そんな、彼女の前に、黒服の中の一人が歩み出て。

「貴様っ！ よくも鈴木をっ！」

勝手に自滅したんじゃないか……。そう、みーなは言おうとしたが、それよりも早く、もう一人、黒服の男のリーダー格とおぼしき青年が歩み出て。

「戦う前から我が戦闘員を倒すとは、流石は我々が警戒したサイボーグと言ったところだな」

「おや、ご存じなのですね……」

青年の言葉に、にこやかに答える光。そして、望は落ち着きを払った表情で前髪を掻き上げ。

「フッ、どうやら既に、みーなちゃんがサイボーグだって事はアンタ達の組織にはばれていたようね」

「え？ 望さん、御存知だったんですか？ って言うか、組織って何っ？」

自信たっぷりの望の言葉に、みーなは耳打ちをする。

それに対して、望は。

「ハッターリよ……、私もあんな連中知らないわ。我々とか言ったから、ひょっとしたら悪の秘密結社かも……」

「ンな訳あるかい」

彼女にしては珍しく、敬語じゃない言葉でみーなはツッコんだ。ボソボソと小声で。

「お姉さま、みーなちゃん。漫才しているうちに、囲まれてますわ」

光の声に、二人は、ハッと我に返る。

既に、彼女たちは黒服の男達に四方を塞がれていた。

小さな軽自動車にこれほどの人数が乗っていたのか、と、謎は残るが、彼女たちは大勢の黒服に囲まれていた。

そして、リーダー格の青年が。

「そこの白衣のお嬢さんには、既に我々の組織はばれているようで、話は早い」

台詞と共に、一步も前に歩み出る。

黒いスーツ姿なのは他と同じであるが、金髪に白い肌、それは紛れもなく白人種である。それも、かなり美形の若い白人だ。

それにしては、日本語が流暢である。

「まー、お嬢さんだなんて、お目が高いっ！」

「貴方達は一体何者で？」

一人喜ぶ望をさしおいて、光が問う。

その言葉に、別の男が自信たっぷりに。

「知れたことよっ！ ミー達は、悪の秘密結社、株式会社北極星証券営業部世界征服課だっ！」

「……………」

彼の発言に、沈黙が走る。

「……………ほ、ほら、悪の秘密結社だ」

かろうじて出た望の声も、精彩を欠くものだ。

みーなと光に関しては、もう、声も出ないほどに気が抜けていた。

「ヘイ……、繁田」

「はい？ なんでしょうか？」

白人に繁田と呼ばれた男は、不思議そうに彼を見る。

「みんな、白い目をしているじゃないか。どうしてくれるんだ？」

「ど、どうしてくれるんだ……と、言われましても、丸池さんが我々のことがばれている、などというモノですから、つい、格好良く……」

その言葉に、丸池と呼ばれた白人は。

「ばれている、なんて言ったのはハッターリだっ！ それぐらい気付け！ と、いうより、私は丸池じゃない、マイケルだ」

無茶苦茶である。しかし、まるで日本人を思わせるようなその喋りは、ここ最近日本に来たのではなく、長い間日本に住んでいるようだ。

「我々の名前までばらしてしまっ、これからどうするっていうのだっ！」

「い、いや、それはですね……、この場であの3人を始末してしまえば済むことでは……」

繁田の発言に、マイケルはポンッと手を打って。

「それだっ！ 全員、戦闘準備っ！」

『は、はいっ！』

「返事がちがーうっ！」

『ひ、ヒー！』

マイケルのその一言で、黒服の男達は車内から武器を取り出す。

カマヤクワ、竹槍と言った、まるで農民一揆でもするような武器であった。中には、丸めた段ボールなんて言う、武器になるのかすら怪しいものを持つ者までいる。

しかし、それでもみーな達が不利な事には変わらない。

数的不利もあるが、彼女たちは手ぶらなのだ。

「どうします？ お姉さま」

光の言葉に、望は決意したような顔で。

「戦うしかないようね……」

と、頼りになりそうな一言。さらに、望は続けて。

「さあ、みーなちゃん、戦ってきなさいっ！」

「ええーっ？」

当然、我関せずと言った望の発言に絶叫するみーな。

「そうですわね、どうやら狙われているのはみーなちゃんだけらしいですし」

とんでもないことを言い、にこっと光は微笑む。やはり姉妹、こういうときは息がぴったりだ。

「ちょ、ちょっと光さんまでっ！」

二人に向かって絶叫したみーなは、そのまま望の方に近づき。突然ガバッと抱きつく。

「な、なにをするのよっ？」

「こうなったら、みんな巻き添えですよっ！」

と、自暴自棄に騒ぎ立てる。

そんな彼女に焦る望。焦っている以上に、みーなの身体が重たいことに四苦八苦しているようだ。

二人の光景を微笑ましく眺める光。

三者三様のその光景に、自称世界征服課の面々は、ただ啞然と眺めるだけであった。

「どうしますか？ マイケルさん？」

「どうするもこうするも……、とりあえず、あのサイボーグの小娘を壊せば終わりだろ……。なんで、みんな手を出さないんだ？」

「いや、なんか内輪もめしているようですし……」

繁田のその言葉に、マイケルは声を荒げ。

「そんなの関係あるかぁっ！ さっさと行ってこーいっ！」

「はい〜！」

怒鳴られ、急いで繁田はみーなの方へ走り出し。

「君にはなんにも恨みはないけど、俺等の生活ためにやられてくれっ！」

クワを振り上げ、みーなに振り下ろそうとする、が。

「ちょっと、口論の途中なんだから、邪魔しないでくださいよっ！」

バキッ！

「がふうっ！」

みーなの左手が繁田を吹っ飛ばす。文字通り、左手だけが彼の顎をとらえ、そのまま宙に浮くぐらい吹っ飛ばす。そして、みーなの左手も吹っ飛んでいた。

「……………なに、これ？」

思わず声に出すみーな。

十数メートル先に吹っ飛んだ自分の左手を眺めつつ。

「いい感じね。予定どおりだわ」

「望さんっ！ なんですか、これはっ？」

「何って、見ての通り、ロケットパンチよ」

「はぁ？」

望の答えに、みーなは目を丸くする。

なにしろ、今までロケットパンチなんて、SFの産物。それが目の前で起きたとなれば、びっくりするのもしょうがない。

そんなみーなに、望はくるりと背中を向けて。

「ロケットパンチは、漢の美学よ」

「何が美学なんですかっ！ これ、どーしてくれるんですかっ？」

手首から先のない左手を、ブンブンと振り回しながら詰め寄る。右手の方も、先刻から配線数本で危うく繋がっている程度のものなので、両手共々手が使えない状態だ。

「どーもこーも、別に無くなったわけじゃないし」

「なんか、よく解らない草むらに飛んでっちゃいましたよっ！」

と、身にならないような言い争いをしている二人。その様子に、光はマイケル達の方を向き。

「ちょっと今、姉さん達は取り込み中なので、しばらくお待ちくださいませ」

深々と頭を下げるその姿に、マイケル達も流石に動揺の色を隠せず。

「とりあえず、繁田は大丈夫なのか？」

と、今し方吹っ飛んだ同僚の介抱に行くことにした。

「うーん、こりゃどうだろ……」

「ですねえ……」

困った顔したマイケルと、その部下達。

その視線の先には、工事現場の石灰粉に頭を突っ込んでのびている繁田の姿が。そして、振り返れば。

「だいたい、両手が駄目な状態で戦えなんて無理がありますよっ！」

「大丈夫よ、みーなちゃんは立派なサイボーグなんだから」

「答えになってませんっ！」

両手のないサイボーグと、白衣の科学者が言い争う光景。それは端から見れば、異様すぎる光景であった。

「そもそも、望さんが私のことを、サイボーグにするから、こうなるんですよっ！」

「何言ってるのよっ！ みーなちゃんは科学技術の最先端になれたのよっ！ 光栄でしょ」

「光栄じゃないですよっ！」

頭から石灰粉に突っ込んだ繁田にお構いなし、みーなと望は喧々囂々と口論を続けるだけであった。

「お、オイ……。戦闘用じゃないって言ったの、誰だっけよ……」

石灰粉の入れ物から足を生やしてぴくぴくしている繁田を見つつ、マイケルは呟く。

黒服達にも同様が走る。メチャクチャ戦闘用っぽいじゃねえか、今のロケットパンチ。と。

「それに、そんなサイボーグ相手に堂々と何か言ってるあの白衣の女。ひよっとしたら、アレも何かやばいのかも知れねえぞ……」

別の意味で確かにヤバイ望にも目を向けて、黒服達は呟く。そして。

「み、見なかったことにして逃げるか……」

彼等は、最後の手段を使うことにした。

石灰まみれの繁田と頭を打って戦う前から気絶した鈴木を車の中に放り込み、現実的には不可能なほどに大量の黒服が軽自動車に乗り込んで、急いでその場から走り去っていった。

プスンプスン、と今にも壊れそうなエンジン音を発しながら。

「望さんの方が年上なんだから、時代の礎として犠牲になって下さいよっ！」

「私はまだ二十五よっ！ それに、みーなちゃんは丈夫に造ってあるから、盾になっても大丈夫よ！」

二人の不毛な争いは、脅威が去っても延々と続いていたのであった。

「あの～、姉さんにみーなちゃん。そろそろ帰りませんか？」

ただ一人、光だけは、いつの間にかにみーなの飛んだ左手を拾ってきて、にこやかにしていた。

いやに美しい夕日を背にして。

* * *

「結局私を売る気だったんですね～！」

夜の東海林家の食卓に、みーなの叫びが響き渡る。

「ほら、みーなちゃん、騒ぐと近所に迷惑よ」

「望さんに言ってるんですよっ！」

たしなめるような口調の望に、みーなはさらに怒鳴る。

光はいつものようににこやかに見ているだけ、木霊はやれやれ、と言った表情で黙々と食事をしていた。

「まあまあ、済んだことだし。気にしない気にしない、そんなことより、ほら、レタスを食べなさい」

楽天的なセリフと共に、望は目の前のサラダをみ一なの前に差し出す。

「私は野菜が嫌いなんです」

ぶすっとした顔のみ一な。その言葉の通り、彼女が野菜を食べている姿を見たことがない。焼肉やバーベキューの時でさえ、焼きはするものの、手を出さずに炭にしてしまうのだ。

「健康に悪いわよ～」

「サイボーグにそんなの関係あるんですか？」

「う～ん.....」

彼女の言葉に、望はしばし考え。

「全くないわね、整備さえしっかりしてれば、なんにも問題はないわ。ノープロブレム、モウマシタイって奴ね」

「じゃあ、勧めないでくださいよ.....。私、生まれつきの野菜アレルギーなんですから」

ぶすっとした表情でみ一なが言う。と、そこに。

「サイボーグなんだから、関係ねえじゃねえかよ。アレルギー.....」

ぼそっと木霊が呟く。

「.....」

「.....」

凶星らしく、一気に二人の口論は収まった。それどころか、二人揃って真っ白になってその場に硬直してしまっている。

ズズズっ、と、光が紅茶をすする音だけが静寂に流れる。

「俺、何か悪いこと言ったか？」

「いいえ、木霊はなにも悪くありませんわ」

不思議そうに光の方へ振り向く木霊に、光は落ち着いて答える。

そして、硬直した二人を見て。

「こう言うときは、こうするのが一番ですわ」

と、言い。財布の中から百円玉を出し。

チャリーン

「どこっ？」

「お金っ？」

落ちた百円玉に、み一なと望はほぼ同時に飛びつく。

「ちょっと望さん、私の方が早いっ！」

「何言ってるのよ、私よ私っ！　ここは年上に譲りなさい！」

「.....大人って、嫌だな.....」

ため息混じりの木霊の声だけがその場にと残った。

「と、言うわけで。悪の秘密結社は存在した訳よ」

食後、急遽開かれた、今日の反省会。

どこからか持ってきたホワイトボードには「月曜サスペンス。開局三十周年記念東海林望スペシャル 実際存在した悪の秘密結社を前に、一体我々はこの先どうするべきか、そして、温泉に消えた美女を待ち受ける殺人事件とは？ 朝まで生徹底討論」と書かれている。

大体なにか言いたいのかはみんな解っているが、完全に理解するにはあまりにも不思議な言葉であった。

しかし、突っ込むと長くなりそうなので誰も突っ込まない。東海林望とはこういう人間なのである。

「で、この先、私達は常に悪の秘密結社、株式会社北極星証券営業部世界征服課の脅威にさらされる危険があるわけなのよっ！」

常にさらされるのは私なんですけど。と、言いたそうに望の顔を見るみーな。だが、力説している望は、彼女のことが目に入らない。

「そこで！」

ダンッ、と望はテーブルを叩き。

「私達は、力を合わせてこの秘密結社と戦い抜かなければならないのよっ！」

びっし！ と、明後日の方向に指を指す。とりあえず、指の差す方向へと振り向くが、そこには食器乾燥機しかない。

特に何もなかったので、再び彼女らは望の方を向き。

「で、具体的にはどうするんですの？」

「フッフッフ、それをこれから説明するわ」

光の言葉に、待っていましたと言わんばかりに、望はぐるりとホワイトボードを回す。

『おおーっ？』

その瞬間、全員が驚愕の声を上げる。

そのホワイトボードには、これからの行程が、望らしからぬ丁寧な字で書かれていた。

「まず、これから、インターネットや口コミで、この悪の秘密結社の事を調べ……」

「あのよお、望姉貴」

自信満々で喋り出す望に、木霊が口を挟む。

「秘密結社のことを調べて、とか言うけど。連中、思いっきり名乗ってるじゃないのか？ 株式会社北極星証券と」

その、木霊の言葉に、望は何か気付いたようにハッとす。

「それに、次の行程として書いてある、存在場所の搜索、だってよ、本社行けばいいんじゃないじゃねえか？」

「……………」

望は、両手をテーブルにつき、ぷるぷると震える。

「まどろっこしいことしねえでもよ、とっとと殴り込みに行けばいいんじゃないじゃねえか、これ？」

核心を突く木霊に、望は。

「食事前から、ホワイトボードに一文字一文字丹誠込めて書いた、私の苦勞はあ〜」
『それかよっ!』

泣き崩れる望に、全員のツッコミが入った。

結局の所、翌日、北極星証券本社に行くと言うことで、その日はまとまったのであった。
当然、朝まで生徹底討論は行なわれなかった。

* * *

「なんで、こんな事になっちゃったんだろうなあ……」

ベッドに寝っ転がり、みーなは呟いた。

六畳の洋室内に、ベッドやテレビ、パソコンなどが所狭しと並べられたその部屋は、同年代の人間に比べて女性らしさに欠けている部屋であった。小綺麗ではあるが、華やかさには縁遠い世界である。

何しろ、みーなは年頃の女性としての色気は、かなり欠落しているところがあるからだ。ボーイッシュと言うわけでもなく、ただ無造作なだけなのだが。

「テレビでも見ようっと……」

枕元に置いてあるリモコンを手に取り、テレビを付ける。

時間的に、夜のニュースがやっている。しかし、テレビ画面には見慣れた光景が映っていた。

「ここって……大宮？」

映し出される画像に、誰もいないのにも関わらず、みーなは口に出す。

彼女の視線の先に移る映像には、大宮駅西口が映し出されていた。見慣れたデパート、見慣れた街並、見慣れた駅前。そこは、紛れもなく大宮だった。

そして、そこには女性レポーターが立っていた。

『では、ここで今日一日、さいたまの話題を独占した「激闘、サイタマン v s 謎の女子高生」の話をお伺いしましょう』

テレビから流れてくる音声に、心当たりアリアリのみーなの顔が青ざめる。

そして、ブラウン管の中では、レポーターにマイクを向けられたおばさんが。

『いや、見たんですよ。街角アトラクションのサイタマンが、女子高生と言い争いになって、正義の味方に説教してるのが〜。その後警察に補導されてましたけど。あ、そうだわ、あの子、髪を銀色に染めていたから不良だわ、きっとそうよ』

おばさんの回答に、レポーターは苦笑いをしながらそれを聞き流す。

そして、映像はスタジオの男性キャスターにと戻り、コメンテーターの有識者達がいろいろなコメントをしていた。

そんな状況に。

「い、一体これって……」

みーなはぷるぷると震え、テレビを見つめ直す。

「これは、本格的にまずいわね」

「うわっ？」

突然、横から響いた声に、みーなは反射的に飛び退く。その視線の先には。

「の、望さんっ！ どこから入ってきたんですかっ？」

「そんなの決まってるでしょ、玄関からよ」

いかにも当然と言った口調で望は言う。が。

「玄関って……、ちゃんと、鍵かけたんですけど」

「ああ、あの程度の鍵、針金一本で軽くちょちょいのちょいよ」

得体のしれない謎の女教授、東海林望二十五歳。一体どこでそんな技術を身につけたのだろうか？ それは怖くて誰も聞けない。

「人んちをピックアップしないでくださいよっ！」

「まあまあ、そんなことより。今の番組……」

「は、はい……。どうも、見られたらしくて……」

一気に深刻な雰囲気になる。

「まずいことになったわね……」

「はい」

「まさか……、その銀髪が染めたものだと思われてるなんて」

「はい～？」

望の目の付け所に、みーなは愕然とした。

「まあ、サイボーグなんて事はいずればれるんだから、そうそう気に病むことはないよ、じゃあね～」

愕然とするみーなを後目に、言いたいことだけ言った望は部屋からとっとと出ていった。

そして、後に残されたみーなは、心に誓うのであった。

「家の鍵、取り替えよう……」

と。

* * *

翌日。

天気は快晴であった。

「晴れましたね、お姉さま」

「フッフッフ、絶好の討ち入り日和だわ」

なにが討ち入り日和なんだろうか？ そもそも討ち入り日和とはなんなんだろうか？ 生まれつき望と付き合っている妹二人は、そこに一切踏み込まなかった。

「ところで、みーなちゃんは？」

「ああ、さっき行ったら、着替え中だとよ」

望の問いに答えたのは、木霊だった。

どうやら、今日は彼女も同行するらしく、いつも通りのラフな格好に、木刀をひっさげていた。

物々しいのは木霊だけではない、光も台所からフライパンと包丁を持ってきており、準備万端だ。そして、なによりも怖いのは、望が持ってきた黒いリュックサックである。

何かが入っている、それは解るが、それ以上が解らない。望の人となりを知る人から見れば、まさに恐怖以外の何者でもない。

と、そこに。

「お待たせしました～」

討ち入りの主役、狙われている張本人、宇崎みーなが姿を現した。

特になんの変哲もなく、いつものセーラー服に手ぶらで。

その姿に驚愕したのか、望が近寄って。

「これから討ち入りに行くってのにつ！ どーゆう格好してるのよ、みーなちゃんはっ！」

「う、討ち入りって……」

「それに、みーなちゃんは公的に死亡扱いだから、学籍は、もう無いのよっ！ それなのに、セーラー服を着て……」

「だ、だって……、これしか着るものが……」

いろんな意味で彼女は女性らしからぬ性格である。言われてみれば、望たちはみーなが中学校入学以来、パジャマ以外に彼女の私服を見たことがなかった。

無頓着もここまで来ると、立派な信念だ。

そんなみーなに諦めたのか、望はため息一つ付いて。

「時間がないわ。さあ、車に乗り込んで、いざ、悪の秘密結社を滅ぼしに行くわよっ！」

「……………」

一人意気込む望に、みんな黙り込む。

「返事はっ！」

『おー……』

「声が小さいっ！」

『オー！』

無理矢理にも先導して、彼女たちはワゴン車へと乗り込む。

エンストを警戒してか、運転席に座ったのは望であった。

* * *

「さあっ！ 到着よっ！」

さいたま市内にある株式会社北極星証券本社前、そこに4人の女性が降り立った。

白衣にリュックサックを背負った得体のしれない大学教授、東海林望。フリフリのドレス姿にフライパンと包丁を持ったお嬢様、東海林光。ラフな格好に木刀を持ったボーイッシュな少女、東海林木霊。そして、自分の意志とは全く関係なく、成り行きでサイボーグになったセーラー服

の少女、宇崎みーなの4人が。

「じゃあ、いっちょ行きますかぁ」

そう言って、望はリュックサックの中から陣太鼓を取り出す。

この瞬間、他の3人は嫌な予感のせいか、一方後ろへと退く。

そして、望はその太鼓を叩き。

「おのおの方、討ち入りでござる！」

その光景は、さながら年末の忠臣蔵であった。しかし、人数は圧倒的に少ない。

この望の行動には、他の3人は着いていけなかった。

ただただ、その場で望を見つめているだけである。

望は、その3人……特にみーなの方へ振り向き。

「さぁ、先制攻撃よっ！」

「はい？」

いきなり言われて、気の抜けた返事をするみーな。

「もう、しっかりとインターネットで世界征服課のフロアが解ってるから、先制攻撃を仕掛けるのよ」

目を白黒させるみーなに、説明する望。

それ以前に、インターネットのどこで、そんな情報を仕入れてきたのかが、3人には謎だった。

「せ、先制攻撃って……、一体何をやるんですか？」

その質問に、望は前髪を書き上げて。

「よくぞ聞いてくれました。みーなちゃんにはね、ホーミングミサイルがしっかりと装備されているのよ」

『ええーっ！』

その望の言葉に、その場にいた3人は驚きの表情を隠せない。

ホーミングミサイル。名を聞けば誰もが想像が付き誘導式のミサイルである。目標にほぼ確実に当たるといふ、効率的かつ確実性のある兵器なのであった。

それが、みーなに装備されている。その事実、一番驚いたのは当の本人であった。

「せ、戦闘用とかじゃないって言ってたじゃないですか」

食ってかかるみーなに、望は一息入れて。

「たかだかホーミングミサイルが付いてたぐらいで、なにが戦闘用って言うのよ」

完全に戦闘用だ……。彼女たちは総じてそう思った。相変わらず、口には出さないものの。

何も言わない3人を、理解したものだと思い、望はカバンからリモコンを取り出し。

「さぁ、ホーミングミサイル発射よっ！」

言葉と同時に、リモコンのボタンをポチッと押す。その瞬間だった。

「わあああああああああー！」

爆音と共に、みーな本人が目の中のビルの十階に吹っ飛んでいった。

悲鳴と共にガラスを突き破り、見事に彼女はビルの中へと突き刺さる。

その光景に、光が。

「あの一……、ひょっとして、みーなちゃん本人がホーミングミサイルなのですか？」

「そうだけど？ みーなちゃん改造するとき、そういう装置を付けたじゃない。無事に発動したしね」

当たり前のように言葉を返す望。

「完ッ全に、特攻じゃねえか……」

やれやれと言った表情で、木霊が肩をすくめ。

「ほら、心配だから、俺等も行くぜ。姉貴」

東海林家の3人も、ビルの中へ入っていった。

当然、1階の入り口から。

「なんだなんだっ？」

「女子高生が窓を突き破ってきたぞっ！！」

「つか、ここ10階だぞっ！」

突然の出来事に、パニックになる北極星証券十階営業部。

騒ぎの張本人であるみーなは、机に置かれているノートパソコンに頭から突っ込んでいた。

「と、とりあえず、助けた方が良いんじゃない……」

その社員の一言に、数人の社員がみーなをノートパソコンから引っ張り出す。

「だ、大丈夫か……？」

社員の一人が、おそろおそろ問いかける。

その問いかけに、みーなは。

「あ、大丈夫です。ありがとうございます」

と、深々とお辞儀をする。

「それは良かった。ところで、お嬢さん。何か用ですか？」

「あ、その……」

いざ、用件を聞かれて、考え込むみーな。

常識的に考えて、「討ち入りに来ました〜」なんて、言えるはずがない。いや、望だったら言いかねないが。

そして、考えに考え、彼女は思い立った。

「永井さんって人に、用があるんですけど……」

この前、襲われたときに聞いた名前の人を出してみたのだった。

「永井？ ああ、世界征服課の」

社員は思いだしたかのように、出口の方へ指を指し。

「永井なら、このフロアの反対側。廊下を挟んだあっちの部屋にいるぞ」

「あ、ありがとうございます……」

一礼をして、みーなは言われた方へと移動する。

「お騒がせしました」

最後にまた一礼をして、彼女は部屋を出た。

「なんだったんだ……？」

「わからねえよ……」

「とりあえず、解ってるのは、ガラス一枚に、ノートパソコン一台壊されたことだけだな」

「全く、逆の部屋だなんて……。望さんも、もうちょっと考えて行動して欲しいな……」

廊下に出た彼女は、ブツブツ言いながら反対側の部屋を探す。と、そこに。

「誰が、もうちょっと考えて行動して欲しいですってえ？」

「の、望さん～、いつからそこに～？」

振り向くとそこにいる望に、みーなはズズッと後ろへ退く。まさに、神出鬼没である。

「いつからって、さっき、そのエレベーターで上がってきた所よ」

にこやかに言う望。その後ろには、光と木霊も立っていた。

「え、エレベーターって……。私の今の怖い思いは一体何だったんですかあ～」

とうとう泣き出すみーな。

そんなみーなに、光が近寄って。

「泣いちゃいけませんよ、きっと、これから良いことがありますから」

まさに、月並みな慰め方で、みーなのことを慰める。そして。

「ほら、みーなちゃんの好きな、コーヒー牛乳ですよ～」

「うわ～、ありがとー、光さん」

差し出された、紙パックのコーヒー牛乳に、とたんに泣き止むみーなであった。

コーヒー牛乳好きのサイボーグ少女、宇崎みーな十七歳。彼女もまた謎多き少女だった。

「じゃあ、行きましょか」

光の言葉に、彼女らは一つのドアを取り囲むように立つ。

そのドアには、堂々と筆文字で「営業部世界征服課」と、しっかり書かれていた。

「ホントにあるもんですねえ……」

感心するみーな。そして、次の瞬間。

「じゃあ、行くぜっ！」

足を振り上げ、木霊は一気にドアを蹴破った。

「ようこそ……我が秘密のアジトへ」

世界征服課に入ったみーな達を待ち受けていたのは、昼間だというのに薄暗い部屋の中央に座った、いかにも怪しいフード付きローブの男だった。

「誰なのっ！」

大声でみーなは叫ぶ。

その言葉に反応するように、その男は立ち上がり。

「私こそ、悪の秘密結社株式会社北極星証券営業部世界征服課課長、高橋だ！」

バツ、と、フード付きローブを脱ぎ捨てたその男、高橋は胸を張って彼女らに対峙する。

しかし、その顔はかなり貧相なものだった。頭部は両脇にわずかな髪を残し、禿げ上がり。威嚇のために生やしたであろう髭は、顔の貧相さとの釣り合いがとれず、不自然なものであった。

誰もがそのギャップに絶句していた。

と、そこに。

「自分で言って恥ずかしくねえのか……」

ぼそっと呟く木霊。

『……………』

一瞬で、木霊以外の全員が凍り付く。

貧相な顔の秘密結社首領に、木霊の痛いツッコミ。

一気にその場が静寂の支配下となった。

「大体よお、自分で悪の秘密結社とかそういうこと名乗って、全然秘密じゃねえじゃんよ。なあ、姉貴……、オイ、クソ姉貴！」

パーンッ！

「はっ？ 私は一体何を？」

木霊にひっぱたかれ、正気に戻る望。そして、あたりをキョロキョロ見渡し。

「はは～ん、みんな固まってるなあ」

「姉貴も今までのな」

そんな木霊のセリフを無視して、望は黒いリュックサックから何かを取り出し。

「あ、木霊は光を起こしてね。私はみーなちゃんを起こすから」

そうやって、望はみーなの方へと近づく。

木霊も、やれやれと言った表情で、光を揺さぶろうとした。その瞬間。

バリィッ！

「なにっ？」

突然響き渡った弾けるような音に、木霊は思わず振り向く。そして、その場にあった光景は。スタンガンのみーなに突き付けた望の姿であった。

「あ、姉貴っ！ なにをやってんだっ！」

当然それに焦る木霊。だが。

「なにって……。大丈夫だよ、ほら、充電も兼ねて」

光張りの微笑みで答える望。

「そんな、高圧電流のスタンガンを押付けて、大丈夫なわけねえだろうが……」

呆れ顔でため息を付こうとする木霊。しかし。

「あ、おはよーございます」

まるで、今起きました、といわんばかりに、とぼけた声を出したのはみーなだった。

その声に、啞然とした表情の木霊。

「ほらね」

してやったりな表情で、木霊と今し方起きた光を見る望。

「造った本人が大丈夫と言うんだから、大丈夫なのよ」

ずいぶんと大雑把な理屈、いや、ただの屁理屈を口にして、未だ固まっている、高橋課長へと目を向け。

「一応、起こしておきましょうか」

「な、なんでっ？」

望の言葉に反論する木霊。

「せっかく固まってるんだからよ、今のうちにぶん殴るなり、蹴っ飛ばすなりして沈めておけば……」

「まだ甘いわよ、木霊。こう言うときはね、起こして、徹底的にぶちのめして、もう二度と私達に逆らおうって気を起こさせないようにするのよ」

グッと拳を握りしめ、さらに言葉を続ける。

「やるときは徹底的に。それが、私のポリシーなのよ」

望の言葉に、木霊は一つため息を付いて。

「確かに、姉貴はいつも徹底的だもんな。たかだか膝をすりむいたみーな姉貴相手に、身体全部改造しやがるんだもんな」

と、皮肉たっぷり言う。

しかし、望はそんなことを気にせずに、高橋課長の方に近づき。パーン、と、平手打ち一閃。

「な、なんだなんだっ？」

気が付き、慌てふためく高橋課長。

キョロキョロするものの、アンバランスな髭が顔と一緒に揺れるだけだった。

「目覚めましたね」

「ああ、目覚めたな」

「で、どうするんですか？」

みんなが望に言葉を投げかける。

そして、みんなの視線が集中する中、望はしばし考え。

「そうだね。木霊、ちょっと木刀を貸して」

「ん、ああ」

望の問いかけに、木霊は頷いて木刀を手渡す。

「ありがと」

礼を言うや否や、高橋課長の方へと近づき、木刀を振り上げる。

「ちょ、ちょっと望さんっ！ 短気はいけませんよっ！」

望の使用としたことを理解したのか、みーなが叫ぶ。だが。

「心配しなくてもいいわよ、私が勝つんだから」

「そうじゃありませんよっ！」

「じゃあ、なんなの？」

もはや、なにを言っても自分の道を突っ走る望に、みーなはなににも言えなくなった。

そして、彼女は思った。今、目の前にいる、悪の秘密結社の首領より、望の方が、よっぽど悪の秘密結社のボスにふさわしいんじゃないか、と。

そんなことを考えているうちに……。

「く、クセモノだっ！」

やっと、自分の置かれた状況に気が付いた高橋は、大きな声で叫ぶ。

叫びと言うよりは、悲鳴に近いような声で。

「ヒー！ ヒー！ ヒー！」

何かの決まりなのか、奇声を上げつつ、アクロバティックな動きで黒服達が部屋になだれ込んでくる。そのほとんどが、この前も会った黒服達である。

「全く、せっかくの好機逸しちゃったじゃない」

悪態をつく望。だけど、みーなは。

「こっちの方が、すっきりするんじゃないんですか？ ほら、残党も倒す、って意味で」

「そうね、それも一理あるわ。行くわよ！」

あっさりとなだれ込んで、望は木刀を木霊に返す。

そして、乱戦が始まった。

「ヒー！」

「なめてんじゃねえぞっ！」

奇声を上げて突っ込んでくる黒服Aに、木霊は勢いで木刀を振り抜く。

別に、戦闘員とは言っても、その正体はただのサラリーマンなのだから、避けられるはずはなく、顔面に木刀を喰らって吹っ飛ぶ。

「あらあら、木霊。はしたないわよ」

光が後ろから言う。だが、その光も、包丁をブンブン振り回しており、黒服はそこに近づけない。

そして、それよりもタチが悪いのはあとの二人だった。

「必殺！ ダイナマイトスマッシュ！」

「がふうっ！」

妙な必殺技の叫びと共に、みーなのロケットパンチが黒服を吹っ飛ばす。

それを見た他の黒服達は、腰が退けてみーなに近づけない。所詮は一般人、大の大人一人を吹っ飛ばすほどのパンチはやっぱり怖いのだ。

だが、みーなの方にも難点はあった。

「望さ～ん、なんか他に私には武器、内蔵されてないんですか～？」

「そんなのあるわけじゃない。私はあ、みーなちゃんには普通の生活をしてもらいたいと、常々思ってるのよ」

『絶対嘘だっ！』

「なによ。3人して言うこと無いじゃないのよ。まあ、武器はないから、ファイトっ！」

手で握り拳を作って、にこやかに微笑む。

そして、望はカバンからまた妙なものを取り出す。

「さあ、さあ、ご立ち会い。ここに来た人は運が良いよ～、世紀の大科学者、東海林望の新兵器が見られるんだから」

「自分で言うなよ、世紀の大科学者って……」

木霊のツッコミを、望は意図的に無視して。

「これが、私の新兵器。鎖スタンガン（特許申請中）よっ！」

威勢のいい叫びと共に、ただ、鎖の先端にスタンガンが付いたものを黒服に投げつける。

「の、望さんって……、あんなので特許とろうとしてるんですか？」

信じられないものを見た、と言った表情で、みーなは呟く。

彼女が思ったとおり、ただ、鎖鎌の鎌の部分がスタンガンになっただけで何ら工夫がない武器だ。が、いざ、部屋の中で振り回すと、それは流石に脅威だった。

放電するスタンガンが、遠心力付きでブンブン振り回されるのだから、みんな地面に伏せる。

黒服や高橋課長だけでなく、みーな達まで。

「ちょっと、望さ～ん。頼みますから、周りを見て行動してくださいよ～！」

「おーほほほほほ、世の中は私にひれ伏すのよ！」

東海林望二十五歳、悪の秘密結社より悪が似合いそうな若き科学者。暴走したら止まらな
い、ご町内で評判のマッドサイエンティストである。

と、不幸にも、その瞬間にドアが開く。

入ってきた不幸な人物とは。

「あ、永井君！ 今までどこに行っていたのかねっ！」

とことんまで貧乏くじを引く男、永井であった。

「課長何事なんですか……………あっ！」

彼は、見てしまった。

見覚えがある、関わりたくない顔に。

「あ、永井さん」

「あら、永井さんではありませんか」

みーなと光に目を付けられ、逃げるに逃げれなくなってしまった。そして。

「あ、アナタはあ～」

鎖スタンガンを得意げに振り回している望にまで睨まれてしまった。

その瞬間、彼は思った。こんな仕事、辞めてやる。と。

「な、永井君！ こ、この状況をどうにかしてくれっ！」

慌てふためく高橋課長。

そこへ、光がほふく前進で永井に近づき。

「あなたの上司は、ああ言っていますが、どうです？ ここは一つ、私の案を受け入れませんか？」

もう、一人にしてくれ、と言った表情の永井に、光は耳打ちした。

で……、結局の所。

光と永井の話し合いにより、「みーなと高橋課長の一騎打ち」で決着を付けることとな
った……。

流石に双方、こんなバカげた事に疲れたんであろうか、望以外に誰も反対することなく、トン

トン拍子で一騎打ちの会場セッティングが整っていった。

ただ一人、望だけは、自分が戦いたかったらしく、準備中はふてくされていた。

「レディースエンド、ジェントルメン！ まもなく、我が社が誇る左遷ポスト、営業部世界征服課の課長、高橋光司と、埼玉が誇るマッドサイエンティスト、東海林望作のサイボーグ少女、宇崎みーなの一騎打ちが始まります！」

この司会が最後の仕事、そう自分に言い聞かす永井。

言いたい放題言えるせいもあってか、自然とやる気も湧いてくる。

何しろ、自分は司会だけで巻き込まれる心配がないからだ。

「サイボーグだってよ」

「ホントにそんなのいるもんだなあ……」

「何しろ、あの、東海林の長女が関わってるからな……、どれだけ恐ろしいが出てくるものやら……」

急造されたリングを囲むように作られた観客席には、沢山の社員が見に来ていた。

昼休みと言うことも相俟ってか、興味本位で集まった社員でほぼ満席だ。

そして、口々に、みーなのことを話題に出していた。

「それでは、赤コーナー！ 当社営業部世界征服課課長、高橋光司の入場ですっ！」

赤コーナーに設置されたラジカセから流れる演歌のリズムに乗って、高橋課長がリングに上がる。

スーツ姿ではなく、いつの間に着替えたのか、ボクサー用のトランクスをはいて。

しかし、それがいけなかった。

四十も半ばに達したその年齢、お腹の辺りにはぜい肉がかなり付いていて、お世辞にも引き締まった身体とは言えなかった。

「ひっこめー！」

「ブター！」

「カスー！」

そんなものを見せられたのだから、観客席からはブーイングの嵐。同じ会社の同僚なのに。

「続きまして、青コーナー！ 東海林望作サイボーグ少女、宇崎みーなの入場です」

こちらは、アニメの主題歌と共にみーなはリングに上がる。

ちなみに、みーなは高橋課長のように着替えるようなことはしなかった。特にいつもと変わりが無いセーラー服姿だったのだ。

と、言うより、それ以外に着るものがない。

「おー！ なかなか可愛いじゃないか！」

「若いって良いわねえ」

「みーなちゃん、お姉さんと良いことしないー？」

一応、サイボーグといえども年頃の女性、見た目に関しては、高橋課長とは天と地の差であった。

そのせいか、観客席からは歓声が上がっていた。

みーなは、リングに上がって歓声に頭を下げる。

「さあ、両者がリングに上がったところで、ルールの説明です。ルールは簡単。ジャンケンで負けた方が、今着ている服を一枚ずつ脱いでいくという、何とも簡単なルール！」

つまるところ、ただの野球拳である。

これでは、一体何のためのリングなのか？ そう、観客たちは疑問に思い始めていた。

しかし、このルールを知ったみーなは、青コーナー側でセコンドに付いている望に。

「望さんっ！ 野球拳なんて聞いてませんよっ！」

と、大声で文句を言う。

だけど、望は余裕で。

「みーなちゃん、相手を見てご覧なさい」

「相手？あっ！」

赤コーナー側に目を向け、みーなは気が付いた。

相手である高橋課長は、パンツ一丁だと言うことに。

「ねっ、アレなら勝てるでしょ」

「はいっ！」

「それに、みーなちゃんの、強化された動体視力を持ってすれば、相手の出すものぐらい、すぐに解るわよ〜」

それは反則じゃないのかなあ.....？ なんて一瞬思うも、そんな細かいことは気にせず、みーなは勇んでリング中央へと歩む。

中央では、既に脂ぎった身体の高橋課長がジャンケンの準備を完了させていた。

「では、行きますっ！」

永井の言葉に、両者構える。

「じゃん.....けん.....」

緊張が高まる。

そして、その緊張が最高潮に達したとき

「ぽんっ！」

『おおー！』

一気に歓声が上がる。

みーなはグーを出しており、そして、高橋課長は.....グーだった。

あいこである。

「あいこです！ グーとグー！」

再び、永井が叫ぶ。

しかし、この結果に、望は不機嫌だった。

「何やってるのよっ！ 反則でもなんでも、勝てばいいのよっ！」

「で、でも.....」

リングしたから怒鳴る望に、みーなは頭を垂らす。

どうにも、サイボーグの特権でもある驚異の動体視力を使うことに負い目を感じたのであろうか？

「次はきちんと使いなさいよっ！」

「使おうと思ったんですけど……、ちゃんと、出す瞬間も見えたんですけど……。でも、見た後に出そうとしても、手がついていかないんです～」

泣きそうな顔で訴えるみーな。

その言葉に、望は納得したような表情を表し。

「見えるけど、ただそれだけって事ね。反射神経は、人間当時のまま、つてのが裏目に出たわね……」

呟き、彼女は頷く。一体、反射神経を人間当時のままにしている何の得があるんだろうか……

。

「じゃ、じゃあ……、どうすれば……？」

「普通に、勝つしかないわねえ……」

望の言葉に、みーなは嫌そうな顔をする。

負ければ脱がなきゃならない。

ただでさえ、相手は40過ぎの小太り男。ただでさえ、周囲には大量の観客。

彼女は不安になってきた。負けたらどうしよう、と。

「えーい、もう、やるっきゃないか」

頭をブンブン振り、自分に気合を入れて相手のほうを向く。

その時だった。

「————！」

突然、その場に起こった光景に、全員が目を見張る。

そして、みーなと高橋課長の二人の動きが完全に硬直する。

リング中央に一枚の布、真っ白いタオルが投げ込まれたのであった。

「————あ！」

一瞬、なにが起きたか理解できなかったが、すぐに正気を取り戻した永井は、マイクを握りなおし。

「た、タオルだっ！ 今、危険を意味するタオルが投げ込まれたあ！」

絶叫に近い声でまくし立てる。

「どっちのタオルだっ？」

確認するために、リングに身を乗り出す木霊。

その、木霊の瞳に映った光景は、ゆっくりと崩れ落ちる高橋課長の姿であった。

「か、課長ー！」

「しっかりしてくださいっ！ 担架だっ！ 早くっ！」

すぐさま世界征服課の社員達がリングに登り、課長の下に殺到する。

「な、なにがあつたんだ……？」

不思議そうに見る木霊。

「課長！ 屋上まで階段で上るから、ぎっくり腰になるんですよっ！」

「わざわざ、ウォーミングアップとか言って、そんな慣れない真似をするから……」

部下達の悲痛な叫びに、高橋課長は。

「私は、今悟ったのだよ……」

ぎっくり腰で担架に乗せられる彼の言葉に、みんな耳を傾ける。

「野球拳に、こんなウォーミングアップなど……、必要なかったのだ」

『そんなこと、最初に気付けええっ！』

社員の達の叫びが、青空の下に響き渡った。

そんな青空の下、高橋課長が担架で医務室へと運ばれていく。

観客達に白い目で見送られ……。

「終わった……んですね」

運ばれる課長を見て、みーなが呟く。

「終わったのよ……」

いつの間にかにリングへと登ってきた望が答え、みーなの肩をポンと叩く。

「――？」

妙な手応えに、望は目を見張る。

肩を叩かれた拍子に、みーなはあっさりと倒れたのだ。

「ちょ、ちょっと！ みーなちゃんっ？」

慌ててリングに駆け上がる、光と木霊。

だが、上がってくる妹二人に、先にみーなの身体に触れた望は首を横に振る。もう、手遅れといわん表情で。

「そ、そんなんっ！」

姉の反応に、光がガックリと肩を落とす。

「まさか……、みーな姉貴が、あんなくだらない野球拳で散っていくなんて……」

いつも冷静な木霊も、表情が冴えない。

そして、そんな二人に対して、望が口を開く。

「充電切れだわ。二人とも、運ぶの手伝って」

『はい？』

姉の言葉に、妹二人の声がハモる。

予想だにしていなかったセリフに、目が点になる二人。

だが、そんなことはお構いなしに。

「重たいんだから、手伝いなさいよ」

望はズルズルとみーなを引っ張って。

「とっとと帰るわよ」

数瞬後、光と木霊はみーなを担ぎ上げ、その場を後にした。

後の東海林光の論文では、こう書かれる。

スタンガンでは充電にならなかった……と。

* * *

「充電完了っと」

目の前にある機械を操作し、望はそこに置いてある椅子に腰をかける。

その機械からは、様々な配線が伸びており、ベッドに寝かされているみーなの身体へと繋がっていた。どうやら、これが充電機器らしい。

「大丈夫なんですか？」

心配そうに光が覗き込む。みーなに接続されている配線が想像以上に多いものだから、見ている方が不安であった。

と、その時。

「……………あれ？」

拍子抜けした声で、彼女は目覚める。

そして、周囲を見渡す。

「おはよう、みーなちゃん」

いつになく優しい表情で語りかける望。

その傍らで、いつもの笑みを浮かべる光。

彼女は実感した。東海林家に戻ってきたのだ、と。

「おはよーございます！」

元気良く、二人に頭を下げた。

「どう、調子は？」

望の言葉に、みーなはちょっと腕を動かしてみても。

「ちょっと、配線が気になる……」

自分の体中から伸びる配線、自分と配線が繋がっている部分は、まるっきり身体の機械が露出しているもんだから、気にならないはずがない。

「そりゃ、しょうがないわよ～。配線繋ぐ時は、そうしなきゃならないんだから」

望は答える。いくら、近所で評判のマッドサイエンティストとはいえ、人工皮膚の上から充電は不可能のようだった。

と、そこへ。

「みーな姉貴が目覚めたって？」

「あ、木霊ちゃん」

荒々しくドアを開けて、木霊が入ってくる。

ランドセルを背負っているところから、学校帰りなんだろう。

「一体どこで嗅ぎつけたのよ……」

学校帰り、そのまま来たであろう木霊に、望はため息混じりに言うが。

「ま、気にするなって、姉貴。それにしても、学校で聞いたんだがよ、北極星証券の世界征服課。宇宙征服課って名前変わったらしいぜ」

「へ～、懲りないって言うのか、あきらめが悪いって言うのか……」

「どっちも似たようなものだろ……」

ランドセルを放り投げ、木霊は手短にあった椅子に座る。

と、その時だった。木霊の投げたランドセルの背負う部分が、望の使用していた機械の電圧レバーを引っ張ったのが。

「きゃああああっ！」

急激に上がる電圧、そして、激しいショート音と共に、みーなの悲鳴が地下の研究室に響き渡った。

彼女の身体に繋がっていた配線が火花を散らして弾け、みーな本人は力無くその場にうなだれる。

「……………」

啞然とした様子でその光景を眺める制作者・望。

「ショートしてしまわれましたわね」

焦ってるんだか焦ってないんだから解らない口調で言う光。きっと、放心状態なのだろう。

「お、俺……、宿題あるから……」

レバーに引っかかっているランドセルを拾い上げ、あっという間にその場から逃げ出す木霊。

「ちょ、ちょっと木霊っ！」

望は叫ぶ。だが、木霊は全く後ろを振り向かずに階段を駆け上がっていった。

「……………行ってしまわれましたわね」

丁寧に状況説明する光。

「こ～だ～ま～！」

握り拳をプルプルと震わせる望。その表情は、まさに鬼の形相であった。

しかし、当の木霊はもう既にそこから逃げ出していた。

「みーなちゃん直すのに、また徹夜ですわね」

にっこり微笑む光の笑顔が、再び望に工具をとらせることとなった。

妹のような存在を目覚めさせるために。

めでたしめでたし……………？

おわり

こんにちは。

こちら、僭越ながらわたくしめが作ったおにぎりのレシピをてきとーな感じで載せたコーナーです。説明とかかなり適当なんですけど、私の経験上、適当に作っても大体のおにぎりはおいしくできちゃいます。あとはベテラン主婦の皆様の研ぎ澄まされた目分量チカラにお任せ致します。

『塩昆布と天かす』

おうどん作った時に余った天かすと、おにぎり作った時に余った塩昆布でできちゃうおにぎりです。

材料：ごはん(適量)+塩昆布(適量)+天かす(適量)

作り方：

①混ぜごはんなので、ボウルに入れて作るのが楽ちんです。塩昆布と天かすをごはんにしっかりと混ぜ込んで三角にむすんで下さい。

☆海苔を巻くなら味付けのりで！

結果：おいしい！ これはハズレないです。天かす入れてますけど油っぽくないし、無敵の塩昆布様のお出ましですからね。道理でマジ無敵超無敵な筈。塩昆布は神の食べ物ではないでしょうか。(発言が厨二っぽい)

何より簡単で、手間いらずなのがいいところです。

『油揚げとクリームチーズ』

和風の食べ物とチーズの相性がいいのはお馴染みなので、おにぎりでもやってみました。

材料：ごはん+油揚げ+クリームチーズ ←全部(適量)で

作り方：

①細かく切った油揚げをおしょうゆにちょっとだけ浸して下さい。

②油揚げをフライパンでカリカリになるまで焼きます。ちょっとくらい焦げても大丈夫！

③焼けた油揚げをごはんにサッと混ぜて、梅干し位の大きさにしたクリームチーズを真ん中にポチッと落として三角にむすんで下さい。

☆海苔を巻くなら韓国のりで！

結果：これもおいしい！ クリームチーズ用意するのちょっと手間かもしれないですけどね。かつおとクリームチーズで作ってもおいしいですよー。

それと、食べる時はおあげさんのせいでちょっとベタベタするので気をつけて下さいね。持ち歩く際にはラップを二重巻きにするか、アルミホイル使ってもらいたいかもしれません。

『ホットドック』

これはネーミングの通りホットドックを作る要領でおにぎりを作っちゃった系です。

かの有名なお料理コミック『美味しんぼ』で、おにぎりの具が案外パンにも合っていておいしいと書いてありまして、ビビッときました。《そのアイデア、いっただきー☆》ってね。

ウィンナーって元々ごはんにもよく合いますし、パンの具をおにぎりに挟んでもおいしいはず！(どん)という圧倒的な自信からチャレンジしたおにぎりです。

材料：ごはん(お茶碗に2，5杯)+ウィンナー(長いのを二本)+ケチャップ(適量)

作り方：

- ①ごはん2，5杯に塩をして、ラップの上に平べったく盛ります。
- ②そこにカリカリに焼いたウィンナーを二本乗せます。
- ③巻き寿司を巻く要領でごはんを巻いて、形を整えます。見た目もホットドックっぽく見せるのがコツです。ウィンナーは完全にインしてますけどね。
- ④最後にケチャップをかけてできあがり！

☆もちろん海苔なしで！

結果：失敗でした。

塩むすびとウィンナーとケチャップの味しかしませんでした。三つの味がガチバトル。特に塩むすびとケチャップが驚く程合わない！ がびーん！ 説明一番長いのに。

始めの三行目にて。「私の経験上、適当に作っても大体のおにぎりはおいしくできちゃいます。ますーますーますー……(エコー)」お、鬼子赤っ恥！ どひー。ごめんなさい訂正します。アイデアと結果が必ずしもマッチするとは限らないですね。こんな時はアレをやるに限ります。

てへぺろ☆

しかしこのままではちょっと悔しいので、リベンジしてみました。

『ホットドック』からの改善おにぎり、『赤ウィンナーお寿司風』！！

材料：ごはん+赤ウィンナー+海苔 ←おこのみでお願いします。

作り方：

- ①赤ウィンナーをフライパンでよく炒めます。
- ②塩むすびを俵形(お寿司の形)にしてスタンバイ。
- ③ウィンナーをおにぎりに乗せて、細長く切った海苔で巻いたらできあがり！

結果：これは成功です！ 良かったー。見た目もまあまあ可愛いので結果オーライです。画像がないのでおにぎりのルックスはご想像にお任せしちゃいますー。てへぺー。

やっぱり食べ物は見た目も大事ですよ。てゆーかぶっちゃけおいしけりゃ見た目とか別に何でもいような気もします。お弁当のおかずも結局茶色いおかずが一番おいしいですよ。こういう事言ってるやつがモテないんですかね。あっはっは。確かに全くモテないですね。へぼん。

他にも自分はこんな組み合わせ知ってるぜ！ というのがあれば教えて下さい。気軽にTELしてね、電話番号はお教えできませんけど。

それではまた！ここまでのお相手は鬼霧子でした。

【HASAMlgroup】が、世界と君の腹を切り開く。 蜂殴打 鋏ノ介

・言葉で人を殺したい。

虚構はいつも現実を負けてしまう。

たとえどんな陰惨で残虐な出来事を描いたところで、現実のたった一つの人殺しの方が「本当に人間が死んでいる」限り圧倒的に優位である。

あるいはどんな素晴らしい愛を創り上げたところで、実際に君の隣に座りその体を抱きしめる「本当の恋人」の前には消し飛んでしまうのだ。

でもそれが本当に正しいのだろうか？

我々は「ここにはない」ものへ、いくらでも想いを巡らせることができる。

それなのに、何故こんなにも現実には「強制力」を持って迫ってくるのだ。

自分にとっての現実、他人にとっての現実ではない。

昨日の現実、今日の現実ではない。

本当は現実なんて、酷くあやふやで怪しいものなのだ。

それなのに現実には理不尽にも「そこにある」という理由だけで、圧倒的に優位にいる顔をしている。

それならば我々は「そこにある」という優位を解体するために、意図的に現実と虚構を混同すべきだ。

いやそれ以上に、虚構で現実を上書きし、更新し、覆い潰していかなければならない。

その想いの最果てが『言葉で人を殺したい』なのである。

傷つくような事を言って自殺させるとか、酷く罵って生きる気力を失せさせるとか、そんなぬるくしょうもない意味では無い。

ナイフが心臓に刺されれば誰の意志とも関係無く、勝手に死ぬように。

銃で頭を吹き飛ばせば、どんな聖人君主であっても自動的に死ぬように。

言葉が文字が、視神経を通して脳に届いた瞬間、それが当然で自然で当たり前な事であるように、絶命させたい。

その時に初めて、ただの意志を持たない物質であるナイフめいた現実と、「ここにはない」言葉という虚構が対等の力で向かい合い『虚構が現実を上書きする』可能性が生まれるのである。

・ 関東チェーンソーチェーンソーズ

実のところ、この『言葉で人を殺したい』は借り物の言葉なのである。

『虚構で現実を上書きしたい』『虚構が現実よりも優位でありたい』という感覚・想いは常にあった、がそれは回りくどく綿密な説明を必要とするものであった。

そこに『言葉で人を殺したい』という端的で明確な一言を与えたのは、一人の人間が書いた詩とも小説ともつかない膨大な量のテキストであった。

それが【関東チェーンソーチェーンソーズ】である。

<http://chainsawchainsaw.blog112.fc2.com/>

「青木龍一郎」と名乗る詩人によって書き記されたこの作品群には、一人の人間が持ち合わせている狂気と笑いと悲しみが全力で叩き込まれていた。

そしてそこにあった一文

『僕はすごい詩を書きたい。
僕は未だに夢を見ている。
言葉で人を殺す夢だ。』

これを読んだ瞬間、私は完全に彼の世界にどっぷりとはまり込んだのであった。

・ HASAMIGroup

そしてその「青木龍一郎」が手がけるバンドが【HASAMIGroup】である。

あくまでの自身の音楽を「青春をしくじったものたちのためのダンスミュージックだ」と言い切る【HASAMIGroup】は、その音源のほとんどをネットで公開しており、特に何曲かはPVとして青木龍一郎が作成したMAD動画と合わせてYouTubeで公開されている。

『HASAMI group 「すずらん」 PV』

<http://www.youtube.com/watch?v=sdlPflgY1MM>

『人間』

<http://www.youtube.com/watch?v=PUC3dk0NXP8>

『「病気が治ったら」 HASAMI group』

<http://www.youtube.com/watch?v=CQ-DZfQhXcc&feature=related>

更に、【HASAMIGroup】HPでは大量の音源がアップされている。

<http://iaodaisuke.web.fc2.com/hasamigroup/inde.html>

特にHP最下段にリンクが貼られている『「初めてのHASAMI group」』というベスト盤をまずオススメする。

これの「2・III」「3・ヘビーローテーション」「5・すずらん」「11・Hakkotsu Funk Girl」の4曲が特に素晴らしく、ぜひ聞いて頂きたい。

そうすれば見えてくるだろう、【HASAMIGroup】の作詞作曲ヴォーカルを勤める「青木龍一郎」の、常にもがき苦しんでいる姿が。

どこまでも自分だけの音で、自分だけの言葉で、世界に一撃を与えられるのか？

どこまでも自分の音だけで、自分の言葉だけで、キミに一撃を与えられるのか？

ただひたすらにそれだけを求めて曲を詩を紡いでいく姿は、今はもう失われた「音楽で人を殺せた」時代をたった一人で呼び戻そうとしているかのようだ。

そう、これは『言葉で人を殺したい』と同じものを目指す『音楽で人を殺したい』という意志が全力で叩き込まれてい

るのである。

今近の音楽は、既に「本気で人を殺そうとしていた」時代を完全に失い……あまりにも「安全に痛い」場所で耳障りが良いだけの音を垂れ流している。

だからこそ【HASAMIgroup】は、もう一度『音楽で人を殺す』世界を、そして君の腹を切り開きに来るのである。

プレイヤー数 2～5人
プレイ時間 2～3時間
使用システム
アリアンロッド(富士見書店刊)

湖 の頂の迷宮



作
サンベエ

ア
リ
ア
ン
ロ
ッ
ド
シ
ナ
リ
オ

TRPGを知っていますか？

「TRPG」とは正式にはテーブルトークロールプレイングゲームと言い、要はゲーム機を使わないRPGです。通常3人～7人程でプレイします。一人が「GM（ゲームマスター）」、残りは「PC（プレイヤー）」を担当します。

PCは、名前、性別は勿論、種族、職業、能力、スキルなどをPC各々で選択、設定し作り出した「キャラクター」を受け持ち、GMが繰り広げるシナリオを自由に旅するのです。

TRPGとは、決まった一つのRPGを指すものではありません。現在日本には数多くのTRPGのゲームシステムが存在します。形態はムック、文庫、ボックスに入った本格的なものまで様々……。

もうお分かりでしょう、「アリアンロッド」とは、TRPGの一種です。アリアンロッドは日本のRPGの多くを占める、西洋ファンタジーを軸とするゲームです。剣と魔法、ロマン溢れる世界観……そんなRPGの世界を歩いてみたい、一度はそんな思いに駆られたことはないでしょうか。それをコミュニケーションのみで叶えることが出来る、それがTRPGです。

しかし、その敷居の高さ、知名度の低さから、TRPGは斜陽にあります（まあ、知名度が高かった時期など無いのですが）。TRPGを愛する著者は、それが残念でならないのです。

そこで今回は、少しでもTRPGを知って欲しい、そしてできるなら、なり手の少ないGMを育てたい、そういう想いでこのシナリオを書せていただきました。

シナリオ、と言うのはGMにとって台本です。これをなぞれば、TRPGプレイが誰でも出来ます。しかし、TRPGでは相手は実在の人間（PC）なのです。自由な行動が許された（最も、社会規範などを破れば罰せられるのは当たり前ですが）彼らの行動を予測することは出来ないでしょう。GMは時にプレイ（マスタリング）に迷うことがあります。

でも、それでいいのです。多少道を外れても、それは破綻ではありません。むしろ、GMの予想を越えたPCの行動にこそ、TRPGの醍醐味があると言えます。失敗は怖くない。怖いのは、GMがプレイを放棄すること。

それさえ気をつければ、第二、第三のプレイ（ちなみにセッションと呼びます）を行っていくうちにGMとして経験値が積まれていくのです。

PCたちが自分の書いたシナリオの上であたふたと踊るのは、正直かなりの快感ですよ。

さあ、堅い話はここまで。以降からはアリアンロッドシナリオ「湖の頂の迷宮」が始まります。ルールなど、細かい部分は今は無視して構いません。興味を持った方は、ルールブックを購入してみてくださいはいかがでしょうか。

そして、アリアンロッド経験者は、こんなやり方もあるのかと思ってくだされば幸いです。

オープニング

レベルは、PCが五人以上なら1、四人以下なら2レベルとする。

今回のシナリオは、神殿よりの依頼となる。（PCがほかの冒険者のいるギルドに入ることを納得したなら、仲間が挑んだまま帰ってこないシナリオに、リベンジする、というシナリオにする
と自然である）

神殿の担当者はモーフィス、男性、30歳。消えた冒険者の筆頭はリング、男性、37歳である。

依頼内容

- ・街の近辺の森に現れた、神隠しを解明してほしい
- ・被害者は10人に及ぶ
- ・神隠しは、森の中央付近に位置する湖で、夜に起こるようだ
- ・冒険者が探索に向かったまま帰ってこない（大きなギルドに所属している場合、その冒険者が知人であることが望ましい）
- ・報酬は600Gである

その他、酒場などから聞こえる情報

- ・森には怪物が出現したが、最近まったく現れなくなった
- ・一昨日、湖から天へと昇る不思議な光をみた（一昨日とは、冒険者が消えた日である）
- ・以前から怪しい風体の男が目撃されている。（詳しく調べるなら魔術師であることも突き止められる）

ダンジョンについて

- ・湖に着くまでのロールプレイは自由である。GMは場合に応じて戦闘や判定を行わせても良いだろう。
- ・湖までは半日ほどで到着する。静かに波紋を広げる、変哲もない湖である。
- ・PCが探索するなら、冒険者や被害者のものと思われる物品が見つかる。
- ・GMは夜になると何かが起こる、という情報を事前にPCに与えるよう努力すること。
- ・時刻が夜ならば湖の波紋がにわかに激しくなり、光があたりを包む。目を覚ますと、すでにそこはダンジョンの入り口である。彼らは気がつく、13枚のカードを握り締めている。(GMは13枚の部屋カードをPCに与える)

ルール説明（付図のGMマップを参照）

- ・プレイヤーは始め、1「始まりの間」に居る。GMは辺りの情報と、カード1をPCに与える。
- ・一部屋を移動=1ターン、戦闘1ターン=1ターン、その他特別な行動でもGMの裁量でターンを消費する。計75ターン以内に攻略しないと朝になってしまい、シナリオ失敗。PCは全滅する。
- ・残り50ターンに達した時点で、GMはPCにカード5を提示できる。
- ・始め、ダンジョンの情報は部屋情報カードのみ与えられる。（ゲーム内ではPCの頭にイメージとして記憶される）GMはマップ2をプリントアウトし、部屋ごとに切り分け、進んだ分だけパズルのピースのように組み立ててマップとする。
- ・部屋に入るとPCは各部屋の合言葉を得る（部屋の名前は言わない）。そののちイベントが起こる(各部屋のイベント 参照)。
- ・PCはカードとマップ、GMよりの情報から、現在いる部屋はなんなのか、推理しながら物語を進めていく。
- ・約束の間の場所を解明し、合言葉を唱えればクライマックスフェイズに突入。
- ・真実の間の情報により、合言葉は、五つの間の言葉を順番に読む。なので、部屋の名前を解く必要がある。
- ・五つの間：太陽→月→大洋→生→死（光、風、水、大地、火を象徴）合言葉を並べると「ダグデモア」（天空の神）

各部屋のイベント表

1 始まりの間「ウ」

何の変哲もない部屋。探索を宣言した場合、判定値10で感知判定。成功ならば、カード①が手に入る。

2 死の間「ア」

入ったらならば、判定値12で危険感知させる。成功ならば、命の危険を感じる、と警告。それでも足を踏み入れたら、シャッターの罠が発動する。次に、全エンゲージの仕掛け天井。ダメージは10+3D6。天井が戻ると、ハゲンティ、ニクネヴェン、レイエがどこからともなく現れる。

3 安息の間「ン」

中には寝息を立てているゴブリンが五匹いる。不意打ちが可能だが、部屋に入る際、滑る床のトラップ（一回きり）。かかると派手に転んでしまい、不意打ちはできなくなり即座に戦闘。ここで眠ることでターンにつき1D点のHPを回復できる。

4 平穏の間「レ」

死体置き場。子供、大人、冒険者、区別も感情もなく、ただ積み重なっている（仲間の姿はない）

探索を宣言したら、死体が起き上がり、ゾンビが現れる。個体数は、探索を宣言した者の数。倒すとカード④が見つかる。

5 闇の間「ヤ」

真っ暗で、何も見えない。魔法や火でも見通せない、真の闇である。危険だと警告する。それでも進むなら、トラップ落とし穴が起動。体重をかけたら発動するタイプなので、杖を突きながらの解除などは認めない。戦艦ゲームの要領で回避を行い、進めればよしとする。

6 真実の間「コ」

台座が鎮座する、20m四方の冷厳な空間。壁は大理石のようだ。石碑に文字が彫られている。

「真実は、太陽、月、大洋、生、死を巡り、天と約束を交わすだろう」

台座の上におかれているカード②を発見する。

7 大洋の間「デ」

とても大きな部屋。天井も高く、飛行に支障はない。下は水が溜まっており、トラップ「プ

ール」状態。

8 蛇の間「テ」

なんだかうねうねした壁に包まれた気持ち悪い部屋。次の部屋につながる通路の前に、4メートルほどの穴が開いている。敏捷判定に13以上で成功すれば飛び越えられる。穴の中は深さ3メートルほどで、中には蛇がうじゃうじゃ。部屋の奥にはロープや板などがあるので、各自努力して切り抜ける事。魔法を使えば蛇は一掃できる。入り口側に梯子があり、落ちてもそれで登ることはできる。

向こう側にカード③。

9 月の間「グ」

部屋に入ると、異様なにおいに気付く。なにやら前方で、白と赤の物体がせわしなく動いている。よく観察すると、それは骨の怪物が、何かの肉を漁っている光景だ。彼らは新鮮な匂いに気付き、冒険者の方を首だけを回して振りむくと、感情のないはずのしゃれこうべがなぜか、歓喜に満ち溢れ、突如襲い掛かってくる。食べられていたはずの人間も、ゾンビへと姿を変える。スケルトン×2、ゾンビ×2。HP、MPポーション一個ずつ得る。

10 太陽の間「ダ」

光が溢れ、眩しいくらいの明るさ。その光源は、中央に設置された、太陽のカンテラである。並みの明るさではなく、明るすぎて用を成さないだろうそれは、取り外すことが可能であるが、はずすと同時にトラップ毒針の罠が発動。闇の間はこの光でのみ照らすことができる。

11 約束の間「ス」

部屋に特徴的な文様が描かれているのみで、ほかには何もない部屋。

「ダグデモア」と唱えると、クライマックスフェイズへ以降。

12 星の間「ネ」

中にいくつかのオブジェクトが浮いている。（どうやら星をかたどっている）

扉は三つで、（GM的に）生の間への道が鍵穴のない扉で仕切られている。開けるには、三つの方法を考えておく。

①星をひとつ残らず叩き落すこと。星は自律して動くので、対決判定で壊す。正攻法。星×6
敏捷：12／4 HP10

②扉を壊す。50点のダメージを与えれば壊すことも可能。美しくない。

③裏技。探索をすると、何かのコンソールを見つけられる。ボタンを押すと星を自在に操ることができるので、カードの指示通り、輝きの大きいものを上にもっていくと、鍵が開く。

13 生の間「モ」

急な勾配があり、坂の下方から入ることになる。上にはグレムリンが二体いて、何やら砲台をいじっている。砲台からは2ターンに一発、交互に火球が発射される。命中値：2D+4、攻撃：2D+2。溜めの1ターンで移動のみをし、撃つ。坂を上るには敏捷12判定で、成功すれば敏捷の能力値分進むことができる。失敗したら坂を転げ落ち、はじめから。上っている最中はコースを変更できず、火球をよけるのに失敗したら落ちてしまう。坂は10mである。部屋の幅は8人分。一人でも昇ると、グレムリンは逃げてしまう。奥には、レバーがあり、倒すと死の間のトラップが解除される。

クライマックスフェイズ

「ダグデモア！」約束の地で呪文を唱えると、PCたちの体は突如浮遊感に襲われ、瞬く間に空へと上っていく。天空の神、ダグデモアの力の一端が封じられていたのだ。気がつくと、周囲は空だった。なおも空中に上り続け、ついには暗く、そして限りのない場所へ…。そこには、ギルドマスターの姿があった。「これはこれは……いらっしやい」何か、狂気を帯びているように感じられる。

空中要塞を手にし、狂ってしまったギルマスと、その眷族となった冒険者がラスボス。

ギルドマスター「ユゲルリング」ウォーリア／サムライ 分類：人間 レベル：4 能力値：
筋力：15／5 器用：15／5 知力：11／3 敏捷：11／3 感知：9／3 幸運：3
／1 攻撃：虎徹／3D+5／2D+7／物理／至近 防御：2／3 HP：60 MP：12
行動：6 移動：12 スキル コンバットマスタリー、ボルテクスタック、バッシュ、スピリット・オブ・サムライ、ストライクバック

アコライト「フィュー」 分類：人間 レベル：1 能力値： 筋力9／3 器用：12／4
敏捷：8／2 知力：15／5 精神：15／5 幸運9／3 攻撃：ライトメイス／3D+4／
2D+5／物理／至近 防御：2／6 HP：32 MP：36 行動：4 移動9 スキル メイズマスタリー、ヒール、プロテクション

メイジ「イールド」 上記同 スキル エアリエルスラッシュ、マジックフォージ、フライト

最期、「この兵器は人を狂わす……決して手に入れようと思うな……」と正気を取り戻し、PCに警告。

PCが手に入れようと思うなら、精神が邪悪な意志に染まる。精神判定で20以上出せば免れる。失敗した仲間との戦いとなる。（GMは警告すること）

壊すなら、光に包まれ、湖に戻ってくる。ギルマスのネックレスを握り締めている。

セッション終了。エンディングへ。

付図

部屋情報カード 1

始まりの間

すべては、
ここから始まる。
死を恐れしものは、
東の方角へ進路を
向けてはならない。

死の間

何人たりとも
足を踏み入れてはならぬ。
死は四方に
口を開けている。

安息の間

死と安息は、
背中合わせに存在する。
君に、安息あれ。

平穩の間

多くの死と引き換えに、
平穩はそこに鎮座する。

闇の間

何も見えない。
故に、何もない。

真実の間

闇を払わねば
真実は見えない。
呪文の真意は
ここに眠る。

大洋の間

夕陽は海に沈みゆく。

蛇の間

蛇は
月を見上げている。

月の間

生けるもの、
死せるもの、
ただ己が目的のために。

付図 2

部屋情報カード、カード 1 ~ 5

太陽の間

蠢く妖魔の
守りし先に、
約束の地はある。

約束の間

この地こそ、
求めし場所なり。
天に向かい
呪文を唱えよ。

星の間

死せる魂は空に至り、
星へと姿を変える。

生の間

輪廻をたゆたい、
やがて生を受ける。
永き道筋こそ、
生。

カード 1

天を求めしもの、
約束の地に行かん

カード 2

死は生により
打ち消される。

カード 3

闇は光にて
打ち消される。

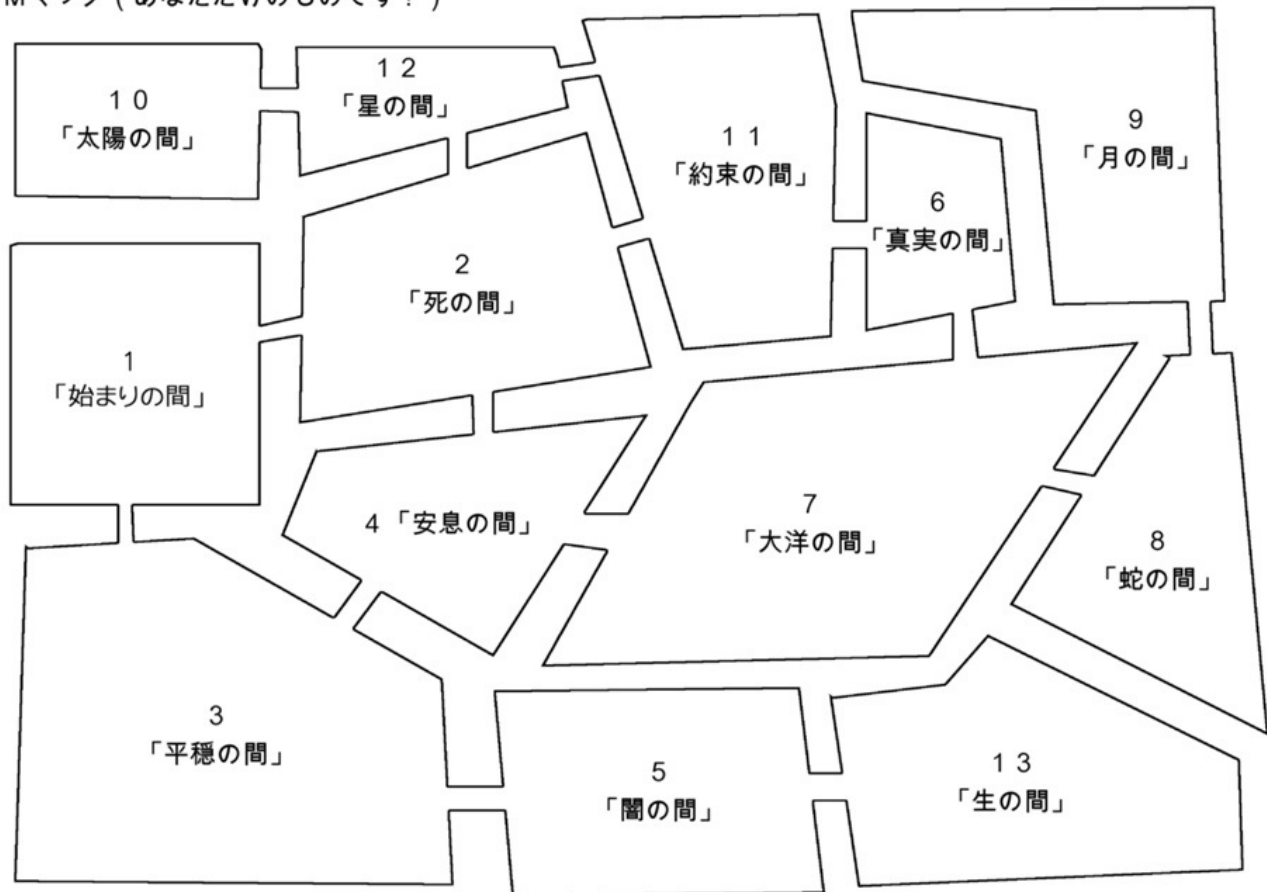
カード 4

海より偉大な
ものはない。

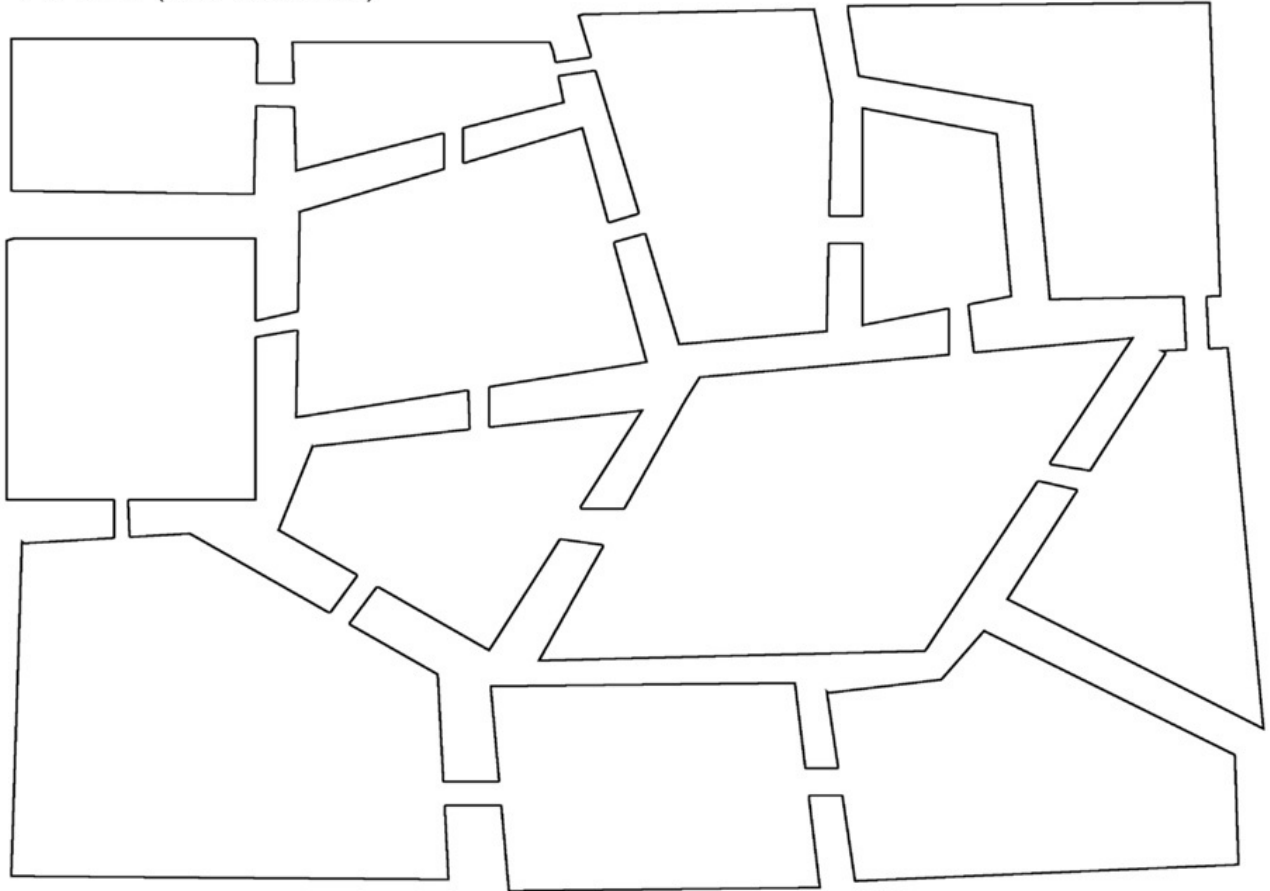
カード 5

夜明けは近い

GMマップ (あなただけのものです!)



PCマップ (通路で切り取り)



どうだったでしょうか。

T R P Gのことを、少しでも分かっていただけたら、そして興味を持ってもらえれば、今回の記事は大成功です。

あとは仲間を集めるだけ！しかし実のところ、その仲間集めが一番の難関だったりします。ですが今はネットの時代！ ネットのチャットを利用して、寝る前の一時間で！ なんてことも可能になりました。チャットにもダイス機能がついていますので、プレイング上のズルもできませんしね！

今回のシナリオは、初めてやるにあたってはGMに負担の掛かりにくい、設定づくのダンジョンものです。もしも次回があるとすれば、もっとGMとPCの間の駆け引きが重要となる、シティアドベンチャーを取り上げたいと思います。

それでは、またのセッションで！

ライター募集

「山脈」ではライターを募集しています

- ・ どうしようもなく好きなものがある人
- ・ イラストを多くの人に見せたい人
- ・ あれやこれにギークな人
- ・ UFOを信じてる人
- ・ 幽霊を見たことのある人
- ・ 山脈v o l . 1、v o l . 2を見て少しでも面白かった！ と思った人

ジャンルや量は問いません！ 山脈は何でも受け入れます！ 作品の形式はテキストか画像にて投稿していただきます。

ちょっと無理そうだけどやりたいこと、手が必要なことがあればどんどん相談してください！

また山脈は無料雑誌のため報酬などはありません。広大なネット上で好き勝手やってるコンテンツではありますが、作品を電子出版した、それは確かな実績となるはずです！

お気軽にjii_syuppan@mail.goo.ne.jpに連絡してください。

もしくは、参加者向けのSNSも用意してますので、そちらに登録お願いします。

http://sns-walker.com/g_syuppan/?m=pc&a=page_h_home

次回締切は、6月2日です！

ラブプラス考—なぜ人はラブプラスを怖がるのか—

ラブプラス考—なぜ人はラブプラスを怖がるのか—

稗田タカシ（民俗学研究者）

はじめに

このテキストは、「何故、人はラブプラスを怖がるのか？」という疑問を恋愛を取り巻く環境、人の性、ゲームの特徴の3つのタブーから探ったテキストである。

ラブプラス紳士の諸君はすでに麻痺しているかもしれないが、外野で眺めてる人たちはおそらく、ラブプラスという作品そのものや、周りに集まった人たちから並々ならぬ威圧を感じているだろう。

その威圧から、私はラブプラスがいくつかのタブーを犯しているのに気がついた。複数のタブーが大蛇のごとく絡み合わさり、うねりをなしていたのだ。

これはその報告書である。だから、このテキストに結論らしき結論はない。何故ならラブプラスとは終わらない恐怖だからだ。

それと1つ。

このテキストは、一応、NEWラブプラス発売の祝いも込めて書かれたものであるが、NEWラブプラスは、ご存知のように商品回収レベルの出来であり、とてもオススメできるものではない。

私の立場上「買うな」とは言えないが「やるな」とはいいたい。購入する場合は多大なる覚悟を決めた上で行なってほしい。

このテキストも主に前作の「ラブプラス+」を元に書かれたものである。

恋愛が淘汰されるゲームメディア

恋愛をテーマにした様々な作品群の中で、恋愛ゲームというのは特異な位置にあるとっていい。

他のメディアと比べ、圧倒的に社会的地位が低いのである。

恋愛は古今通して、全人類の関心事であり、文学、映画、ドラマ、音楽すべてのメディアで広く取り扱われているテーマであり、もっとも人気の高いジャンルでもある。

映画でいえば、日本の歴代興行成績の1位と2位はアバターと、タイタニックである。タイタニックはいうまでもないが、アバターも恋愛要素が強い作品だ。

小説の売上数を見ても1位「世界の中心で、愛をさけぶ」2位が「ノルウェイの森」。やはりどちらも恋愛小説である。

しかし、ゲームとなるとどうだろう。テレビゲームソフト累計売り上げデータベースでみる限り、「ときめきメモリアル」の553位が最高である。明らかに売れていない。

すべてにおいて恋愛をテーマとしたものは広く受け入れられているのに関わらず、何故、ゲームだけがここまで人気がないのだろうか。

それはゲームメディアの特性に関係している。他のメディアにはない『入り込み、体験する』という特性だ。

コンピューターゲームというのは、基本的に「ごっこ遊び」が基軸となっている。

最初に生まれたゲームは（諸説あるらしいが）オシロスコープを使ったテニスゲームだったとされ、次に生まれたのが「スペースウォー！」というSFシューティングゲームだった。

どちらも画面上にある点を動かす程度のシンプルな表現力しかないのだが、既存する設定を落とし込み、想像力で補った「ごっこ遊び」に近いものだ。

コンピューターゲームの中でも特に人気の高いジャンルであるRPGや、アドベンチャーゲームの元ネタとなったTRPG（テーブルトークロールプレイングゲーム）は、複数の人間が集まり、各々が自分で考えたキャラクターになりきって遊ぶという、まさにごっこ遊びを複雑にしたものだった。

これを一人でプレイできるようにしたものがコンピューターゲームにおけるRPGや、アドベンチャーゲームの始まりとされている。

小説や映画と違い、ゲームではその世界に入り込み、能動的に行動することができるメディアなのである。

ゲームの世界に入れば、実際のものとはかけ離れているとしてもテニスプレーヤーとして試合をすることができるし、自分自信が現実には存在しない宇宙船に乗り込んでエイリアンシップを撃ち落とすことも可能だ。

そこで「恋愛ごっこ」ができる恋愛ゲームが登場するわけであるが、普通に考えれば、これは受けるはずだ。

現実では付き合えないような有名人と付き合ったり、高校生の頃に限り、当時は思うようにできなかった青春時代を謳歌する。誰もが一度は夢をみるもの設定ではないだろうか。現実では無理でも仮想現実の中での擬似恋愛ならばなんでも自由なのだ。需要はいくらでもありそうなものなのに、それは何故か売れなかった。

「恋愛ごっこ」というタブー

日本では恋愛をしてない人は異常者だと思われる風潮がある。

「なにをおおげさな」という人もいそうだが、過去には「結婚して一人前」という価値観があった。独身だと出世が遅れるという社会的な圧迫まであった。高度経済成長にあわせて人口を増やすのが市民の勤め、だったそう。

思わず過去の話にしてしまったが、現在でもういう風潮は根強く残っている。

今は不景気で少子化社会であり、女性には年齢的に「結婚しなくてはいけない」という強迫観念はあるものの社会的には結婚はそこまで義務化していない。その代わりに恋愛を強いられる社会になったといえる。

その原因の1つとして、見合結婚から恋愛結婚への変化がある。今までは親が決めた家族間同士の結婚が主流だったのに対し、自由に相手を選び結婚する恋愛結婚では、恋愛が重要視されるのだ。

これは極端に言えば恋愛すればするほど、恋愛がうまければうまいほど有利な結婚ができるということであり、恋愛をしないと普通の結婚ができないという意味でもある。

つまり、恋愛に興味がなかったり、恋愛をしないことは、結婚に関してのタブーなのである。

自分が高校生だった頃、クラスメイトからこんな話を聞かされたことがある。

「二十歳までに恋人ができなかったら異常者」

「三十歳まで童貞だったら魔法が使えるようになる」

ティーンエイジャーのたわいもない流言に聞こえるが、あながち悪ふさげだけとはいいがたい道理がある。たとえば「二十歳まで」というのは個人差はあるがモラトリアム期間であり、中学、高校、大学に在学中は同世代の異性と同じクラスになるので、異性と交際しやすい期間であるといっている。この期間で彼女ができないというはどこか問題があるのでは、という意見だ。

「三十歳まで」というのは交際したとしても、そこまで進まなかった場合、なにか問題があるという捉え方だろう。

恋愛競争主義の戦略

恋愛競争という考え方がある。

世の中には、モテる異性とモテない異性が存在している。これは昔からあったものだが、恋愛結婚が主流になった現代ではさらに激化したものだと思われる。

可愛い女の子は数が限られていて、その人と結婚するのはもう早い者勝ちというドラマで見かけるような世界が存在している。恋愛競争だ。

恋愛を競争とするならば、ラブプラスのような恋愛ゲームに興じることは、本来なら現実の女性へと向かうべきところを存在しない女性へと逆走していることになる。これは恋愛競争から脱落しているも同じだ。

本来「恋愛ごっこ」である恋愛ゲームは、恋愛映画や、恋愛小説と同じように架空の恋愛に身をゆだね、現実で実際の恋愛をする前の準備期間として機能すべきメディアなのだが、一般的な見方でいうと現実の恋愛から逃げ、自分の殻に閉じこもる印象を与えてしまっている。

何故、こういった解釈が生まれたのか？ という問いに答えるのは非常に難しい。

1ついえるのは、基本的に男性は元々積極的に恋愛に向かう文化がないことが挙げられる。男が恋愛するという概念は最近作られたものであり、私たちの頭の中にある男らしい男というものは恋愛に無縁の生き物なのだ。

試しに頭の中で「硬派な漢（おとこ）」というものを思い浮かべてみるといい。

私の中ではボロボロの学ランを羽織り、切れ目のはいったボロボロの学生帽を深くかぶった背丈の高い無骨な男が風に吹かれながら突っ立っている様子が思い浮かぶ。これこそが完膚なきまでに男らしい男のイメージだ。

そして、この男らしい男である「硬派な漢（おとこ）」は一途な想いを込めた守るべき女性はあるが、恋愛はしないだろう。恋の駆け引きなんて無縁だ。自分から女性に声もかけることもまずないだろう。恋愛なんぞ軟弱者のがする行為なのである。極端な偶像ではあるが、男性が思う「男らしさ」の中にはいつもこの「硬派の漢（おとこ）」が憧憬として潜んでいるとっていい。

逆に恋愛を重視する男は「軟派な野郎」とされている。女性に声をかけることを「ナンパする」というのもここからきている。

これも「軟派な野郎」を思い浮かべてみるとわかりやすいが、おそらく細身でさらさらの髪を

して、美しい瞳をもった男が思い浮かぶだろう。こちらは男らしいというよりかは、どちらかという女性らしく中性的なイメージを持っている。

現在のテレビタレントに近い容姿をしているので「硬派な漢（おとこ）」よりも「軟派な野郎」の方が女性受けがいいと思われるが、男からすれば、こういう男は「男らしくない」とされて倦厭されることも多いのだ。

他のメディアとくらべ、能動的な体験を主としたゲームメディアでは、恋愛ゲームをすること自体が、「軟派なこと」に当てはまる。しかも、酔狂なことに生身ではないプログラムされた女の子をナンパするのだ。

これは「硬派な漢（おとこ）」から見たらただのナンパ行為ということで、「軟派な野郎」からしたら生身の人間を相手にしないのは意味がわからない異常行為という風にみられ、どちらからも低くみられるということだろう。

性倒錯というタブー

ラブプラスが怖いとされるもう一つの理由は性的倒錯だ。

擬似的であろうとプログラムに恋をすることは「人ならざるものへの恋」と変わりがないので、人間以外のものを愛する性のタブーの領域に踏み込むことになる。

性倒錯は精神病の一種とされているので、「ラブプラスにはまってしまう」というのは「病気に感染してしまう」ということと変わりがないともいえる。

ラブプラスに、一番近い症状となるのはアガルマトフィリア（偶像性愛）であろう。

日本ではピグマリオンコンプレックス（人形偏愛症）という名でも知られている症状で、心がない人形を愛してしまったり、広義の意味では、実際の女性を人形のように扱ってしまうことも指す言葉である。

ラブプラスのコンセプトからして、プログラムの中に人格を見出し一人の人間として接しないとか何もおもしろくないシステムだし、彼女にリクエストをだして、服装や髪型を変えてもらうというシステムも組み込まれているので、故意にアガルマトフィリア患者を作るゲームといってもあながち間違いではない。

どこからが性的倒錯なのか

わざわざ説明する必要もないような事実ではあるが、人は実在する人間ではなくても性的な興奮を覚える。

世界的にみても淫らな絵画や写真、映像などは人気があり常に需要があるし、コンビニエンスストアなど生活に密着しているショップにも、それらが公然と販売されていることからそれを伺えよう。

絵を実在するものの代用とする行動は、人類が古くから行っていた風習である。

旧石器時代に描かれたとされるラスコーの壁画などが有名で、あの作品群は今の美術館のように絵を鑑賞する為に描かれたものではなく、呪術的な意味合いをもって実用的に描かれたものだ。実際は壁に描いた牛に槍を突き立てて、狩猟の成功を祈ったとされている。

性的興奮の為に描かれたものでいえば、日本では江戸時代に流行った春画などが有名である。浮世絵に分類されるものなので現代からみると芸術作品としてみてしまう傾向にあるが、当時、浮世絵が流行っていたのでああいいうタッチなだけで、今のエッチな萌え絵との違いはほとんどないといっている。

実在する人間を撮影し作られた写真や動画は、絵やフィギュアなどのいわゆる「二次元もの」と違い変態性がないと主張する人がいるが、写真など結局のところ実在したものを複写し模倣したイミテーションに過ぎない。モデルそのものは実在するが、現実で相互性にほとんど影響を与えないので根本的には何も変わりがない。

先ほど、絵は呪術に使われていたと述べたが、こういった行為は呪術の考え方に近い。

かの有名な社会人類学者のジェームズ・フレイザーの分析によれば、呪術の原理は次の2点に帰着する。

1つは「似たものは似たものを生み出す。いい換えれば結果はその原因に似る」

もう1つは「かつてお互いに接着していたものは、その後、物理的な接触がなくなったのちも、引き続きある距離をおきながらお互いに作用しあう」ということだ。

前者を類感呪術といい、後者を感染呪術という。

「二次元もの」は性的に興奮するものとして創作されたものなので類感呪術になり、写真や動画といった「三次元もの」は、実在する性的に興奮するものを複写しただけのものなので根本的には「類感呪術」と変わらないが、第三者がそれを 実際目撃し（接触して）撮影したものであるため「感染呪術」を喚起させる要素が強いといえるだろう。

実用的なものは許容される文化におけるタブー

小難しい事を述べてしまったが、簡単にいえば、昔から人は存在しないもの（性的倒錯）で自慰行為をしていたし、現在でも自慰行為をし続けているし、社会はそれを許容しているということだ。

もちろん「自慰行為はいけないもの」という風潮もあるし、おおっぴらに人前でするのは禁じられているのも事実だ。しかし、エロ本やエロDVDは手に入りやすく、次々と新しいものがでてくる現代社会において、性的倒錯気味の自慰行為について規制はない。全体的にハードルが低いのである。

何がしたいのかというと、「エロス」に関してはオタクっぽいものだとしても寛容に扱われ、タブーにはならないということだ。

以前、知人とオタクについて話していた時に「エロゲーで抜くというのはわかるが、エロゲーで感動したりするのはよくわからない」という意見が出てきたことがある。

これは非オタクの人の口からでた意見の中ではかなり寛容的なものだが、ようするに「萌え絵はかわいいし、エロいから興奮する気持ちはわからなくてもないが、その先にあるものはわから

ない」ということである。

そして、人々が怖がるのはその先にあるものであり、それは何かといえば「情」だろう。

人ならざるものを性玩具にする分にはいいが、その性玩具に情けをかけたならそれは病気であり、タブーであるということになる。

ラブプラスはまさにこの玩具に情をかけるものなので、アダルトゲームより、1つ抜きん出てた変態性を兼ね備えている。

それが性的倒錯におけるタブーからみたラブプラスの本質的な怖さとなっている。

恋愛ゲームとしてのタブー



『もはや、恋人が必要な時代は終わった・・・DSを開けば、そこにキミがいるのだから』
この気が狂ったような文章は実際に店頭で使用されたポップである。

恋愛ゲームにおいて、プレイヤーが本当にそのキャラクターに恋してしまうようなゲームの作りは暗黙の了解としてタブーとされてきた。

作品にのめり込むファンを作った方が商売としては儲かりそうなものだから、一見、矛盾した考え方にも見えるが、存在しない彼女に本当に恋してしまった場合、消費者が損をしてしまう結果になるという作者側の良心的な配慮である。

ビジネスライクに考えるのならば「宿主が死んでしまっは元も子もない」という考え方もできるだろう。

恋愛ゲームではないが、作り手の気持ちがわかる有名な例として、新世紀エヴァンゲリオンの監督庵野秀明がNHK番組トップランナーでの発言がある。

「神崎のナナメ読み」庵野秀明 in トップランナー【2】

<http://kanzaki.sub.jp/archives/000272.html>

庵野「僕にとってフィルムは"サービス業"なんですよ。お客さんがお金を出して、映画だと1000幾ら出して見に来てくれる訳ですから、その1000幾らをお客さんが出したのと同価値の"面白さ"、"見てよかった"みたいなのをお客さんに返す仕事だと思うんですね。少なくとも、サービス業である以上、お客さんに何かしらそういう"良かった感"みたいなモノをあげなきゃいけない。それをフィルムに入れとかなきゃいけないと思うんですよ。そこで、あの～う、エヴァの場合は、ちょっと"利き過ぎた"感じがしてですね・・・」

武田「利き過ぎた？」

庵野「ええ。現実逃避の"よりしろ"とか、後は現実からそこに逃げ込む"装置"みたいなモノにされつつあるのが、見ていて嫌だったんです。映画になった時(97年に劇場公開)は、元々そういう予定だったんですけど、お客さんにはとりにあらず水を被せて、何か目を覚まして帰って欲しい・・・そういうのがありました。僕にとっては、それも"サービス"なんですよ。お客さんにとっては良い事だと思うんで。あのまま、居心地の良い所にずっと居て、それも一つのサービスだと思うんですけど、エヴァの場合はそれをもうやっちゃいけない気がしたんですよ。少なくとも目を覚ますキッカケみたいなモノを入れなきゃいけない・・・それがお客さんにも良い事なんだろうと云う事で、最後はそういう事をやっていましたけれど。僕にとっては、それも"サービス"なんですよ」

このように、作者というものは消費者への影響力を考慮して、あえて最大効果を狙わない場合がある。

疑似恋愛を目的とした恋愛ビジュアルノベルでも恋愛シミュレーションゲームでもプレイすれば作品は終わるし、スイッチを消せば、その疑似恋愛は終わるのだ。

「ゲームであること」それが一つのセーフティーになっている。

恋愛ゲームの金字塔とされ、実際に過去最大の売上成績を残した「ときめきメモリアル」では恋愛をゲームとして落とし込めるための徹底したゲームナイズがなされていた。

たとえば、爆弾というシステムがある。

これはゲーム中で知り合った女の子とデートをしないまましていると相手に不満がたまり、放っておくと爆発し、悪い噂を流され知り合いの女の子全員からの印象が悪くなるというシステムだ。

リアリティーを重視するならば、こんなシステムはいらないはずだ。

現実ならば知り合いの女の子全員とデートにいった方が悪い噂を流されるだろう。

あくまで恋愛『ゲーム』であろうと、こういった細かいシステムでバランスをとっているわけだ。

では、ラブプラスはどうかというと、はっきりいえばゲームであろうとする気はないし、セーフティーも用意されてない。

まず、このゲームには目的がないし、終わりもない。電源を切ったとしてもリアルタイムに連動したシステムがあるので、終わることがないのだ。

そもそもコンセプト自体が「彼女から攻略される」というものなので、プレイヤー側からの明確な攻略法というものが存在しないのである。従来の恋愛ゲームとはまったく別の価値観で作ら

れているとっていい。

ゲームの一線を越えてしまった恋愛ゲームといえるだろう。

ラブプラスは恋愛ゲームというより、シリアスゲーム

ここまででラブプラスが犯した3つのタブーをあげた。

1つは恋愛としてのタブー。2つ目は性的倒錯としてのタブー。そして最後は恋愛ゲームとしてのタブーだ。

はっきりいって異色のゲームである。一体このゲームは何を目的として作られたのだろうか。

ラブプラス自体が類をみないまったく新しいゲームであることは間違いないが、それでも似ているソフトは存在する。

それがシリアスゲームである「脳を鍛える大人のDSトレーニング」だ。

シリアスゲームとは、エンターテインメント性のみを目的とせず、教育・医療用途（学習要素、体験、関心度醸成・喚起など）を主目的とするコンピュータゲームのことである。

「脳を鍛える大人のDSトレーニング」は名前の通り大人に向けて作られたゲームであり、タッチペンやボイス入力機能を活かしてる点や、毎日DSを起動することでプレイヤーに要求するシステム。明確なゲームクリアが存在しないところも同じだろう。

ゲーム内のキャラクターの育成ではなく、プレイヤーの脳を鍛えることがゲーム目的であることを考えると「プレイヤーがゲームに攻略される」ということになり、それはラブプラスのコンセプトである「プレイヤーが彼女を攻略するのではなく、彼女がプレイヤーを攻略する」とまったく同じ発想である。

「脳を鍛える大人のDSトレーニング」はDSにおいて、まったく新しいジャンルでミリオンヒットになったゲームなので、類似点からみてラブプラスは企画段階から「脳を鍛える大人のDSトレーニング」を意識して作られたものだという可能性がある。

恋愛弱者の避難所ではなく、恋愛をプラスしてくれるゲーム

シリアスゲームたるからには、プレイヤーに与えるものがある。それは「愛」だ。

気が狂ったような発言ではあるが、ラブプラスが与えてくれるものは、ラブプラスのタイトル通り「愛」なのである。

具体的になにがどう「愛」なのか説明していけばいくほど、信用の足りない文章になるのが目に見えているが、ラブプラスに登場する女の子たちは、プレイヤーのことを無条件で好きで裏切ることがないということである。電源をつければすぐそこで微笑んで、あなたのことを励まして

くれるのだ。こういったところは「ニンテンドックス」と似ていて、癒やしゲーの要素である。

もう一つのポイントは、彼女たちが特別一番好きなのが「がんばっている彼氏」であるということがあげられる。

ニンテンドーDSに住み着いた女の子があなたの応援隊長になってくれると考えてくれていい。プレイヤーは彼女の期待に答えるべく、ゲーム機の電源を切った後も、彼女にふさわしい彼氏として、彼女たちの期待を受けながら生きていくことになるのである。

タブーは時代によって変わるものである

タブーというものは時代によって変わるものだ。

いけないとされてきたものが好ましいとされる時代もある。その逆もまたある。

喫煙なんかはいい例だろう。好ましくないものとされて一気に規制がはじまった。他にももっと根本的な物事が変わることもある。

最近では、親の子殺しが問題になっているが、昔はちゃんとした避妊法がないこともあって七歳以下の子どもは「神の内」と言われ「間引き」されていたのである。

現代でもローカルルールによってはちょこちょこタブー変わる。ブラック企業が人を自殺に追い込むまで働かすこともそうだし、戦争になったら人を殺すことは英雄行為になる。

現在は恋愛ゲームは1つのタブーになっていて、肩身が狭い。でも、それも変わる日がくる。

考えてもみてほしいが、今のゲームのメインカルチャーであるRPGゲームやアクションゲームは「なにかを殺す」ことが前提であり、それが当たり前になっている。しかし、恋愛をすることと、何かを殺すこと、これからの人類がどちらを好ましく思うべきなのだろうか。

何かを殺し、破壊し、自分の力を誇示するのは楽しいことだ。私も戦争は嫌いだがサバイバルゲームは好きである。

しかし、恋愛もまた楽しい。誰かを好きになって、コミュニケーションを深め、その肌の温かさを実感する。

おそらく、どっちの感情も人からなくなることはないだろう。ただ現在はそのバランスが偏っているのだ。

ラブプラスとは、確信犯的に、人のタブーを犯した作品であると同時に、これからの新しいゲームを提示して、今までのゲームや、価値観を壊すものだ。だから、人はラブプラスを「怖がる」のである。

今、付き合ってる恋人は本当に好きですか？

おわりに

恋愛主義の社会である限り、「恋人がいないと恥ずかしいから付き合う」や「なんとなく寂しいから付き合う」という恋愛の形はなくなる。別にこれが悪いというわけではないが、かといって勧める気にもならないのが多くの人の本音だろう。

周りを見回して両思いのカップルというのは少ないことから、「好きな人が別にいるが、とりあえず手頃な人と付き合う」という人たちはうじゃうじゃいるものと思われる。

これも別に悪いとか良いとかいう気はないが、自由な恋愛というものの蓋を開けてみると、結局はこんなものなのかという気もする。

今の恋人に満足している人もどうだろう。テレビや映画にでてくる俳優やタレントの方が、今付き合ってる恋人よりも魅力的なのではないだろうか。

きっとあなたはこの意見に対し「確かに外見はタレントの方が好きけども、性格や相性でいうと今の恋人の方がいい」というだろう。

でも、実際に性格や相性なんて実際に付き合ってみないとわからないのだ。もしかしたら、今付き合ってる恋人より、あなたを愛してくれる可能性だってあるのだ。

あなたはテレビに映っている魅力的な異性に対して、イソップ寓話の「すっぱい葡萄」よろしく、手が届かないから「あの葡萄はどうせすっぱいに違いないさ」と諦めているにすぎない。

納得のいってない恋愛をしている場合、問題が起きやすい。浮気、不倫、離婚。

そんな面倒起こすくらいなら、最初から付き合わなければいいじゃないかとも思う。

ラブプラスは怖くなんかない！

この流れでラブプラスをプッシュすると、それこそ病気と言われそうだけど、あえていおう。ラブプラスは怖くなんかない。みんなラブプラスをやるべきであると。

何故なら実際の恋愛というものはとても怖いからだ。浮気、不倫、離婚、性病、暴力、エトセトラ。あなたの恋人が犯罪者である可能性だってある。軽い気持ちで適当に付き合ったとしても、別れる時は重くのしかかることもある。どんなに優しい人間だって、傷ついて怒った時はその限りではないのだ。その傷がずっと後まで響くことだってある。

しかし、それでもカップルはいなくならないし、恋愛主義は続いていく。それは恋愛がそれだけ素晴らしい体験だからだという一言につきるだろう。

「恋愛の素晴らしさ？ そんなこと知ってるよ、でも相手がいらないんだよ」と思われる方も多

いだろう。

そんな時こそ、ラブプラスだ。これに相手はいらないのである。誰にでも恋愛の疑似体験ができる。

ラブプラスのヒロイン達は商業ベースで人に愛されるために生み出されたキャラクターだ。だから、トップランクでかわいい。あなたが二次元の絵に抵抗がなければ、アイドルや女優にも負けなくらい魅力的な女性に映るだろう。

それにどんなことがあっても、こちらを好きでいてくれるのだ。あなたも相手が好きならば、両思いの恋愛が達成されるのである。

そんなこといっても所詮ゲームだと思う人もいるだろう。

触れることもできないし、ゲームに飽きたらそれで終わりになってしまう。

しかし、そこは逆に考えるべきなのだ。人間ではない利点というものたくさん存在しているはずだ。

歳をとらないとか、そんな甘いことをいってるんじゃない。

日々、科学は進歩していった。これはゲーム技術においてもそうである。

ラブプラスが今の人気のままずっと続いていったらどうなるだろうか。ゲームの歴史は浅くたかだか50年くらいだ。しかし、たった50年でここまで進歩したわけだ。10年後のラブプラスでは、ゲームの中の女の子の体温を感じながら、キスができるようになってても、おかしい話ではないだろう。さらに次の10年後はどうだろう。その次の10年先は？

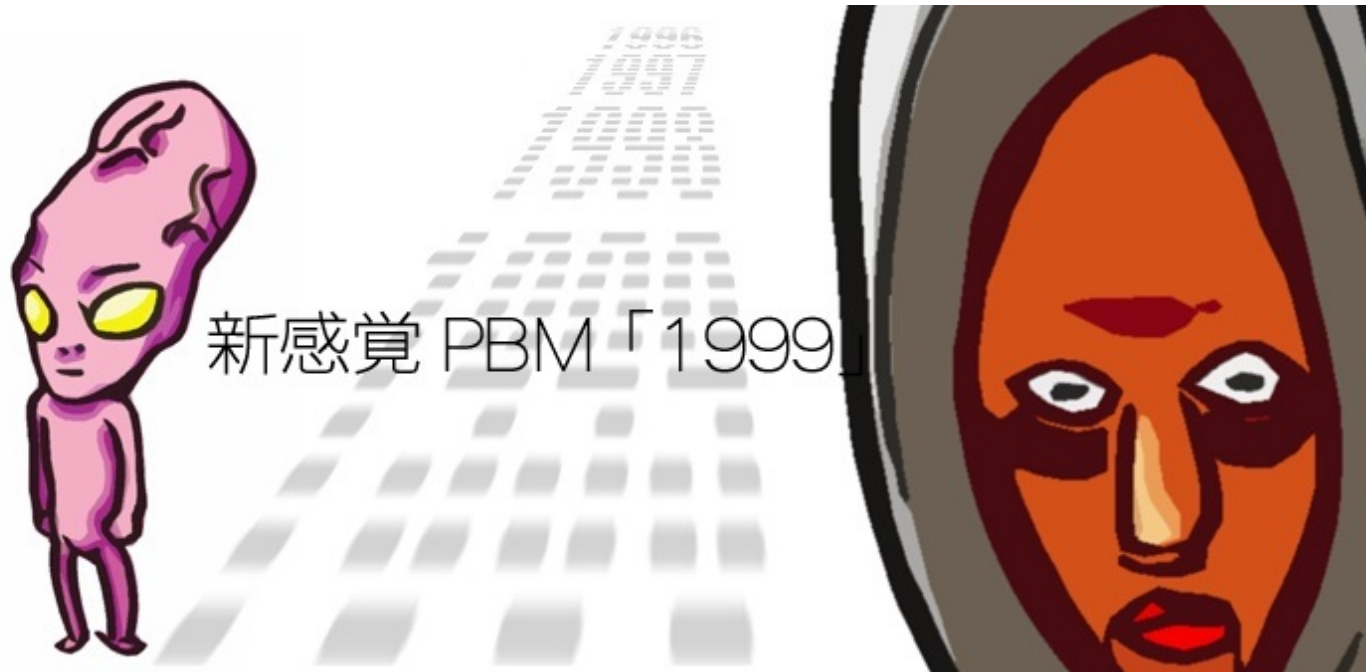
未来には夢があるべきだと私は思う。ラブプラスは一つの夢だ。

今回のNEWラブプラスは確かにひどい出来だった。しかし次がある。このゲームは人類の成長と共に成長するゲームだ。

私はすでに老後の楽しみの投資として、このラブプラスシリーズを購入している。

結婚して、子どもができて、たとえ孫ができたって私はラブプラスシリーズをプレイし続けるだろう。

私のことを待っててくれる彼女が、そのゲームの中にいる限り。



説明

読者参加企画、PBMとはプレイバイメールの略称です。

雑誌などで多く企画されたネットの無い時代に最盛期を迎えたゲームで、付属されたハガキにキャラクターや行動を書き込み、〆切までに送付、次号の雑誌にて発表される結果を読み楽しむものです。

それを、山脈でやってしまいます！

あなたは、世紀末、絶望に包まれたこの星をもう一度人類の下に還すため、エイリアンの枢軸に送り込まれた戦士。次項より始まるガイダンスを是非読んでください。次号v o l 3にて、幾多の戦士たちの顛末が発表されます。

あなたの行動で、この「1999」の世界を変えるのです！



一九九九年七月

空から来るだろう 恐怖の大王が
アンゴルモアの大王を甦らせる
前後に火星が幸福に統治する

—— Michel de Nostredame

『Les Centuries 第一〇巻七二番』

一九九九年七月。

かの有名な予言詩は、現実となった。

地球へと飛来した巨大隕石は燃え尽きることなく衝突し、幾万の命を散らしながら地軸を少し傾けた。

世界中が事前にこの結果を予測発表しなかった宇宙関係の機関を責め立てたが、その声も長く続くことはなかった。

隕石の落下後、地球に現れた二足歩行のエイリアン。

人類をいたぶることに嗜虐を見出す彼らの操る現代の遠く及ばぬ科学の前に、

世界はただ蹂躪される以上の術を持たなかった。

襲り殺される者、捕えられ役畜となる者、いかなる技術によってか身も心もエイリアンへと変えられた者——

もはやこの地球は、我ら人類のものではなくなった。

捕虜収監区域は今日も悪臭に満ちていた。

糞尿や汗やその他人間の放つあらゆる匂いに、腐敗した食用クロレラや黴や虫の死骸が輪をかける。

今そこに、捕虜の一人の逆流した食物が加わった。

排泄用の穴へと消えていったそれには、消化されかけた様々な食物が垣間見える。

それこそが、この醜悪な「人間養殖所」の外から来たという何よりの証だった。

エイリアンたちによって建造されたこの施設はエイリアンの居住地にして、その名の通り人類を殖やしては

あらゆる方法を以って殺すためのもの。

設備の老朽化は近年頃に目立つものの、千年以上に渡り人類の敵であり続けている。

ごく一部、エイリアンから逃れ外で暮らす者たちですら定期的に派遣される「狩人」たちによってここへと

引きずり込まれてくる。

たった今ここに送り込まれてきた数名は、まさしく数時間前にそうされた者たちだった。
やがて彼らは非手術式ロボトミーにより人格を奪われ、その生涯をこの檻の中か、おぞましい何かの機械で閉じることが決定されるのだ。
———これまでの通りならば。
えずきが収まると、捕虜たちは檻の扉に手をかけた。
本来力でどうこうできるものではない、複雑な電子制御によりロックされているはずの扉は、しかし呆気なく開いた。
一人、また一人扉をくぐって檻の外へと出る。
その顔に、自由になれたという安堵や喜びは微塵もない。
これは計画の第一段階、最初の試練を乗り越えただけに過ぎないのだから。
彼らは真の自由を求め、敢えてエイリアンの手に落ちここまでやってきた戦士たちであり、
目論むはこの悪魔の施設の破壊。
周りを見渡し、かつての同胞たちの変わり果てた姿を目の当たりにする。
絶望によって焚きつけられた炎が燃える。
時は三七九七年。
長い長い支配に対する、反撃の狼煙が今上がろうとしていた。
その結末は、予言者にも見通せていない———

山脈が満を持して送る、新感覚RPB『1999』。
救世主は、あなただ。



今回のマップ

scene0
limit: 10
EXODUS
THE PURGATORY



シーン0 「煉獄よりの脱出」 攻略手引き

★ルール説明

はじめまして。わたしはこれからあなたをサポートする非戦闘アンドロイド「イヴ」です。よろしくお願ひします。

これより、エイリアンよりこの星を奪還するための第一ターン、人類解放作戦を開始するための、イントロダクションプログラムを開始します。

○マップを見てください。あなたが今いる場所はマップ上のS地点、「人間養殖場」です。あなたは提示される三つの任務から一つ、三つの戦略から一つ、三つのルートから一つを選択し、最終目的地であるG地点、「エネルギープラント」を目指す事になります。

行く途中で、あなたは憎むべきエイリアンや、残忍な罠に遭遇するでしょう。しかし、あなたは数億の人類から選別された、とても有能な個体です。機に応じ、ミッションの達成を目指してください。

功績はポイント化され、称号が授与されます。称号により、今後のミッションへの生存確率を飛躍的に増加させるスキルや武器の付与が可能となります。ポイントは以下の通りです。

- ・エイリアン一体を殲滅する 3ポイント
- ・拠点の占有に成功する 3ポイント
- ・1区画分人類を解放する 3ポイント
- ・任務を達成する 10ポイント
- ・その他、特別褒賞 1ポイント～

ポイント化された功績の蓄積は、人類反抗の旗頭になります。ポイントが増えれば増えるほど、人類の戦力が増し、いずれエイリアンを駆逐することができるでしょう。

☆地点説明（現在知れている範囲）

S.....スタート地点 人間養殖場 始原の汚泥の中 君達は過去へと踏み出す

A.....培養ルーム 新たなるエイリアンを生み出す胎内である。

B.....遊戯室 人類を弄ぶための遊具が置いてある。きわめて悪趣味な代物だ。

C.....通信室 他の拠点との通信拠点である。破壊しておけば、更なる増援を阻むことができる。

D.....未踏地点 情報はありません。

E.....未踏地点 情報はありません。

G.....ゴール地点 エネルギープラント 破壊すべき目標

◎今回の任務は三区分有り、貴方達には任意に選択する権利があります。

第壹任務 : プラントを破壊する.....エネルギーを産み出すプラントの破壊を優先する。

第貳任務 : 人類を救助する.....人類の生還を優先する。

第参任務 : エイリアンを殲滅する.....可能な限り、エイリアンの破壊を優先する。

猶いづれの任務にも死の危険は避けられない。心して当る事。

◎敵と相対したときの生存戦術を聞いておきます。これは貴方達が未知なる事態に遭遇したとき、パニックに陥ったときに、電子強制的にシステムに立ち戻す為です。

①交戦 率先して先制攻撃を執り行う

②逸走 気配を逸早く察知し遁走する

③隠遁 周囲に紛れやり過ごし機を待つ

◎次に、進軍ルートを選択してください。

①甲ルート..... S → A → G 最短ルートとなります。危険は減りますが、ポイントは余り望めません。

②乙ルート..... S → B → D → G 中央を突破します。危険もポイントもそこそこです。

③丙ルート..... S → B → C → E → G 外廓を走り抜けます。危険はありますが、貴重な拠点がありポイントも稼げそうです。

◎最後に、辞世の言葉をお聞きします。

またこの人間収監場にはあらゆる場所に罠やエイリアンが点在する。

機密情報や人類にとり貴重な物品を発見した場合、略取すること。

.....イントロダクションは全て完了です。あなたの幸運を祈ります。

キャラクター作成手順

①名前を決める和風、洋風、漢字、アルファベット。好きに決めて構いません。しかし余り長い名前ですと、不本意なコード・ネームを拝命する羽目になるかも知れません。

②種族を決める5つの種族から任意に選びます。それぞれ長所、短所があり、覚えることのできるスキルにも関係するので、慎重に選択しましょう。

1) ヒューマン 2) アンドロイド) 3) エイリアンハーフ 4) ミュータント 5) 原住民

③性別を決める自由に決めましょう。男性、女性、またそのハイブリッド、雌雄同体もあります。

④年齢を決める自由に決めましょう。しかし、例えば3歳児が人類の未来を決めるような重要なミッションに任命されると言うのはあまり考えられませんから、応募された時点で強制的に年を取らせ学習した後、任務に当たることとなるでしょう。

⑤スキルを決めるスキル表から、10ポイントのスキルポイント(SP)を消費し、3つまで任意に選択します。ただし、ヒューマンはHu アンドロイドはAn エイリアンハーフはAl ミュータントはMu 原住民はNaのチェックのあるスキルしか取得できません。スキルポイントが余るのは構いませんが、オーバーしますと身体の許容量を越え最悪の場合自壊してしまうことから、任務達成不可個体とみなされ参加はできません。注意して選択してください。スキルによっては能力値、HP・MPにボーナスがあります。忘れずに算出しましょう。

⑥能力を決める下記の種族基本値表+スキルの修正値によって算出されます。色々な判定や、バトルの際に使用します。

⑦HP・MPを決める下記の種族基本値表+スキルの修正値によって算出されます。いずれも0になると死亡します。

⑧任務・戦略・ルートを決める 今回のマップを参考に、達成すべき任務、エイリアンと対峙した時の戦略、そして攻略拠点へのルートを決めます。

⑨称号プレイで際立った功績を残したキャラクターに与えられる栄誉です。称号によっては次回で役に立つ特典があるかも知れません？

スキル表

スキル	Hu	An	Al	Mu	Na	SP	効果
サイコキネシス						6	手を使わず離れたものを動かす力
パイロキネシス						6	物を発火させる力
テレパシー						3	離れた相手に語りかける力
千里眼						2	遠くを見通す力
幽体離脱						2	意識を体から飛ばす力
サイコメトリー						2	物の過去の記憶を読む力
シックスセンス						4	第六感
未来視						3	少し先を見通す力
過去視						3	少し昔を見返す力
耐性：毒						2	大概の毒に馴染んでいる
耐性：痛み						2	ちょっとした痛みじゃ怯まない
耐性：恐怖						2	脚の震えを抑えられる
銃器扱い						3	銃器の扱いに精通している
刃物扱い						3	刃物の扱いに精通している
格闘家						3	任意の格闘術を修めている
ハッキング						5	ハッキングが得意
プログラミング						5	プログラマーだった
死の線						8	物の壊れやすい線を見られる
ひらめき						4	危機回避や行動に明るい
熱血						4	切れると普段以上の力が出せる
努力						3	弛まぬ努力で簡単には諦めない
集中						4	ここ一番に強い
アスリート						3	身体能力が国体級
反射神経						2	攻撃回避能力が高い
気功						4	快復、攻撃に使用できる
雲体風心						8	超快復、超攻撃に使用できる
飛行						5	空を飛ぶことが出来る
登攀						2	壁を伝って登るのが得意
パワードスーツ						6	パワードスーツを所持している
ロケットパンチ						2	パンチが敵に向かい飛んでいく
バーナー						5	火炎放射器を内蔵している
ドリル						4	ドリルを内蔵している
ビーム						5	ビームを内蔵している
レーザー						5	レーザーを内蔵している
隠し刀						2	隠し刀を内蔵している
ビームサーベル						4	ビームサーベルを持っている

スキル	Hu	An	Al	Mu	Na	SP	効果
パイルバンカー						4	杭を打ち出す工作用機械
ミサイル						6	ターゲットを追尾する弾頭
キャノン砲						6	強大な爆発力を誇る実弾兵器
超合金						4	並みのダメージは通さない
自爆						1	威力は凄まじい
放電						4	激しい電流を発する
分離						2	五体をばらばらに制御できる
死んだふり						2	機能停止を完璧に装う
見よ、岩のような肌を						2	硬い皮膚に覆われている
見よ、病を知らぬ体を						2	風邪などひいたことが無い
見よ、山駆ける両脚を						2	100メートルを11秒で走破
見よ、たくましい腕を						2	あらゆる破壊行動に長ける
鷹のような目だ						2	視力が10.0である
兎のような耳だ						2	100m先の猫缶の音も逃さない
犬のような鼻だ						2	三日前の晩御飯も言い当てる
山の向こうまで届く声						2	マップの端から端まで届く声
海の底まで息は続く						2	肺活量はこの世の誰にも負けねえ
暑さにも負けず						2	暑さ我慢大会準優勝
寒さにも負けず						2	寒さ我慢大会3位
雷にも負けず						2	電気我慢大会優勝
毒だって食べるさ						4	毒を含むと回復する
嘘だってわかるさ						3	幻覚や嘘が何となくわかる
敵だって見えるさ						3	敵の気配を恐らく察知する
獣となり猛り狂え、俺						4	戦闘行動にボーナス
人となり思い煩え、俺						4	探索行動にボーナス
神となり願い叶え、俺						4	あなたの行動に幸あれ
溶解液						3	時間を掛ければ鉄をも溶かす
変体						3	狭い隙間にも入り込める
超回復						4	1ターンに1点HPが回復する
保護色						2	周囲の景色に溶け込み忍ぶ
尻尾						2	物を掴んだりバランスを保つ
超音波						3	不可視のダメージがある、かも
ボウリング						1	穴掘りの名人
暗視						3	暗闇を見通す事が出来る
美形						7	そなたは美しい
救世主						1	名声だけが先走っている

スキル	Hu	An	Al	Mu	Na	SP	効果
マッチョメン						3	体力+1
秀才						3	頭脳+1
天性のバネ						3	機敏+1
天稟						3	運+1
馬力重視チューン						3	体力+2 機敏-1
トルク重視チューン						3	体力-1 機敏+2
処理速度重視A I						3	頭脳+2 運-1
人格重視A I						3	頭脳-1 運+2
腕力成長促進体						3	体力+2 HP-1
知能成長促進体						3	頭脳+2 HP-1
運動成長促進体						3	機敏+2 MP-2
奇腕						3	体力+3 HP-2
肥大腦						3	頭脳+2 MP-1
タコ						3	頭脳+4 体力-1 機敏-1 HP-2
次世代進化						3	体力+1 頭脳+1 機敏+1 運+1 HP-3
天の申し子						3	力-1 運+2
神の堕し児						3	力+2 運-1
獸性						3	体力+1 HP+1 MP-1
絢爛舞踏 ※							人であることを辞めた存在
N. E. P ※							非エリンコゲート空間追跡機
ミニ八卦炉 ※							緋々色金製の火炉
モビルトレースシステム ※							理想的なMS操縦システム

*スキルに関する質問にはお答えできかねます。また、同じようなスキルがありますが気にしないでください。

種族能力・HP/MP基本値表

種族能力・HP / MP 基本値表						
種族	体力	頭脳	機敏	運	HP	MP
Hu ヒューマン	3	3	3	4	5	5
An アンドロイド	3	5	4	1	4	6
Al エイリアンハーフ	2	4	4	2	4	7
Mu ミュータント	5	2	2	3	7	4
Na 原住民	4	1	3	5	6	4

1999 CHARACTER SHEET

⑨

① name HP ⑦ MP

② race SKILL

③ sex SKILL ⑤

photo ④ age SKILL

ability strength ⑥ intelligence quick luck

MIS SION TACTICS ROUTE

⑧

- ①名前 自由に決めてください
- ②種族 5つの種族から選びます
- ③性別 自由に決めてください
- ④年齢 自由に決めてください
- ⑤スキル 最大三つまで選択します
- ⑥能力 種族・スキルによって決定されます
- ⑦HP・MP 種族・スキルによって決定します
- ⑧行動 任務、戦術、ルートを書きます。
- ⑨称号 功績により与えられます。

投稿ルール

- ①サンプル ②ヒューマン …のように記述し、メールにて投稿してください。
- キャラシートに直接書き込み、添付してもOKです。

参考 サンプルキャラ

1999 CHARACTER SHEET

サンプル・キャラ name HP 5 MP 8

HUMAN race SKILL パイロキネシス

MAN sex SKILL 銃器扱い

photo 25 age SKILL 対抗：恐怖

ability strength ☆☆☆ intelligence ☆☆☆ quick ☆☆☆ luck ☆☆☆☆

MIS SION TACTICS ROUTE

第一 交戦 甲

キャラシート

1999		CHARACTER SHEET		
name		HP	MP	
photo	race	SKILL		
	sex	SKILL		
	age	SKILL		
ability		MISSION	TACTICS	ROUTE
strength				
intelligence				
quick				
luck				

apply

応募手順

キャラクターを作成して、件名を「1999-0」とし、sanmyaku008@yahoo.co.jp まで投稿してください。その際、名前（ハンドル可）を明記して下さい。記載内容に不備があった際のみ、こちらから送信することがあります。アドレスは目的以外には使用いたしません。どうしてもアドレスを知られたくない方はご相談ください。また、付図のキャラシートに直接書き込み、添付していただいてもOKです。

下にテンプレートを用意しましたのでご利用ください。

①名前： ②種族： ③性別： ④年齢： ⑤スキル 1：
 2： 3： ⑥能力 力： 頭脳：
機敏： 運： ⑦HP： MP： ⑧任務： 戦略： ル
ート： ⑨称号（ある人のみ）： ⑩辞世の言葉（あなたのキャラクターが死んだ時
に叫ぶことができます）：

締切は**4月20日**までです！お気軽にご参加ください！

次号にて、あなたのキャラクターがどのような結末を迎えたのか、気になるリザルトを掲載します。そしてキャラクターの功績に応じランキング、称号授与も！ お楽しみに！

次号予告

人類の反撃の狼煙が上がった。

人類にとって眼前に待つのは、果たして栄光の未来か、暗渠な地獄か.....？

次回「**doom of pandemonium**」 乞うご期待！

ご意見、要望がある方はsanmyaku008@yahoo.co.jp、コメント欄にてお知らせください。

編集後記

サンベエ

僕が一番好きなTRPGはGURPSとって、現実に即した緻密なルールと、計算されランダム要素の一切を排したキャラメイキングが大きな特徴です。

願わくばこの記事がTRPGを知った読者のみなさんの、数あるシステムからいつかお気に入りの一つを見つける、その糸口になればといいなと思います。

蜂殴打 鉄ノ介 (サブカルチャー浮遊体)

トタン屋根を鳴らす雨の音が、何か重大な世界の秘密を教えてる気がしませんか？ しますか？

それは病気です。音が嘘について空気が嘘について耳が嘘について脳が嘘をつくんだから、この世には結局本当のことなんかありゃしない。だったら音量ヴォリューム最大ヘッドフォンで足の皮剥けてもダンス！

鬼霧子(にぎりめし研究家)

私のド適当なレシピをまさか雑誌に載せてもらえるなんて夢にも思ってませんでしたね。編集部の皆様には今度新作の『焼きいもにぎり』を握って差し上げたいところ。話変わって流行りのインフルもらっちゃった系です。皆様体調管理には十分お気をつけ下さい。では素敵なおにぎりライフを。

小倉 眞子

『山脈 vol2』発刊、おめでとうございます。

皆様が健康で、元気であるよう、お祈りします。

稗田タカシ（民俗学研究者）

祝NEWラブプラス発売ということで書いてはみたのだが、蓋をあけてみると、バグ、販売停止、ソフト回収といった噂がとびかう中のとんでもないタイミングになってしまった。発売して一ヶ月以上経つのに今だに話題騒然というのは嬉しいのだけど、なんか想定してたのと違うなと首をひねる毎日。

菅原学（マルチメディアクリエイター）

無事に第一回新派文芸賞を終えることができ何よりである。心残りといえれば誰も「ミゲル・デ・セルバンテス式」を使ってくれなかったことだろうか。第二回新派文芸賞の締切は8月15日。余裕のある日程になっているので、多くの人に参加してくれると幸いである（私も参加しようかな.....）

田子新策（評論家）

わが町グリムスビーの春はまだ遠い。赤煉瓦の覚醒したような色彩は雪に覆われている。いまや見るもの全てがヴェールを纏ってしまって、ほんとうはみにくい彫塑を幻想に感けた一流の芸術に仕立て上げた。こういうものは頭を凍りつかすのだが、第一回新派文芸賞は、私のところをさきにとろけさしたのだ。

まつばらきのこ（評論家見習い）

小説の評論という大役を任され、満月の夜に風呂桶を持って小躍りしました。第一回新派文芸賞は、私の心を弄ぶニクい作品ばかりでした。私は評論なんて呼べるようなかっこいいものできてないですけど(ただの感想)、小説書くのってやっぱりかっこいいです。次回は小躍りじゃ済まされないかもしれません。

蜂殴打 新脈ノ介（文芸評論家）

普段は批判的な立場から作品評論をすることが多いゆえ、今回のような「基本は褒める」という方針での評論は刺激的で大変面白かった。第二回新脈文芸賞の応募も既に始まっており、応募作品を読むのが今から楽しみで仕方無い。僥倖、僥倖。

REC（表紙・ロゴ）

力強さというものは極端さの中にしか存在し得ない。人間の強さがどこから来るのかといえば、自分は、魂のバネの強さにあると思う。魂のバネ無くして断末魔の疾走は生まれない。来世への繰り越しなど知った事か！

すぱんく **the** はに一（編集）

『山脈02』いかがだったでしょう？ 個人的に山脈は「簡単に出来る同人誌」と考えています。何本も評論を集めたり、1冊分の漫画を描くのはかなりキツイです。「じゃあ集めて一つにしたらいいい」で出版できるのが『山脈』の一つの利点なのです。3号が、あなたの創作における1ステップになればいいな。

山脈きのこ (編集部)

若輩者たるゆえんの「自分がここにも良いのかな」という不安を抱えながらも仲間に入れてもらいました。優しい方々ばかりで号泣する毎日です。無事に完成する事が出来てとても嬉しいです。次回の山脈でもよろしくお願い致します。

大友宗麟（編集部）

今回の山脈は、とてもうまく作ることができました。少なくとも私は周りのセンスや才能に触発され、自分の考えていたものより更に良いものを作ることができました。あつまると、いろいろあるけど、うまくいく。おちこむこともあるけれど。ライターは多いほうが良い。みなさんも「限界突破」しませんか？

イエス曖昧（山脈編集長）

無事に完成しました！今回は参加者もぐっと増え、ぐっと雑誌らしくなったと思います。前回は虚ろな目をしながらレッドブルをストローでちゅーちゅー吸いつつ作っていたのですが、今回はみんなのおかげでとても楽しく雑誌を作ることができました。次号も楽しく作れたらなと思っています。皆さんよろしくね。

山脈 vol.02

<http://p.booklog.jp/book/43038>

著者：じい出版

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yesks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43038>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/43038>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.